



Title	日本語の指示詞の研究
Author(s)	堤, 良一
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/51192">https://hdl.handle.net/11094/51192</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博士論文

# 日本語の指示詞の研究

2002年12月

言語社会研究科 言語社会専攻

堤 良一

## <<目次>>

### 第一部 記述的考察の部

#### 第一章 本論文の目的と構成

1. 1	本論が目指すもの	2
1. 2	本論で解決する問題	3
1. 3	本論の構成	4

#### 第二章 本論における基本的な立場

2. 1	指示詞について	7
2. 2	現場と文脈	8
2. 3	記憶指示	10
2. 4	人称区分説と距離区分説	12
2. 5	コ・ア vs. ソ	14
2. 6	話者と聞き手	15
2.6.1	聞き手の知識を想定しないモデル	15
2.6.2	聞き手の知識を想定するモデル：東郷(2000)	18
2. 7	「テキスト的意味の付与」	21
2. 8	指定指示と代行指示	22
2. 9	メンタル・スペース、場面と場	22
2. 10	理論は統一か否か	23
2. 11	第二章のまとめ	25

#### 第三章 文脈指示におけるコ系指示詞とソ系指示詞

3. 1	考察の対象	26
3. 2	先行研究	27
3. 3	分析の方法	30
3.3.1	object dependent/object independent	30
3.3.2	不定名詞と変項	32
3.3.3	「話し手にとって指示的」	33
3. 4	本章における仮説	33
3. 5	問題の分析	35
3.5.1	置き換えが不可能な場合	35
3.5.2	置き換え可能な場合	36
3. 6	変項と複数解釈される名詞句	38
3. 7	問題となる現象	39
3. 8	第三章のまとめ	40

#### 第四章 ソ系列指示詞と変項－「テキスト的意味」を中心に－

4. 1	はじめに	42
4. 2	先行研究	44
4. 3	ソノと「テキスト的意味」	45
4. 4	テキスト的意味の量	48
4. 5	ソノとソレ	51
4. 6	ソレの構造	53
4. 7	不完全同一性	55
4. 8	第四章のまとめ	56
付録	堤(1999)について	57

#### 第五章 指定指示と代行指示

5. 1	はじめに	59
5. 2	先行研究	59
5.2.1	田中(1981)、林(1972,1983)	59
5.2.2	坂原(1991)	60
5. 3	庵(1995a,1996b)	61
5.3.1	庵の主張	61
5.3.2	名詞の構造	62
5.3.3	代行指示のソノとテキスト的意味	65
5.3.4	ソノの構造	68
5.3.5	ここまでのまとめ	70
5. 4	代替案	71
5.4.1	はじめに	71
5.4.2	飽和名詞句と非飽和名詞句	71
5. 5	第五章のまとめ－金水(1999)をふまえながら－	75

<u>第一部のまとめ</u>	78
----------------	----

## **第二部 モデル構築の部**

#### 第六章 文脈指示におけるモデル構築～コ／ソの使い分けについて～

6. 1	残されている問題	81
6. 2	談話管理理論	83
6.2.1	理論の概観	83
6.2.2	談話管理理論の問題点	86
6.2.3	庵(1997)	88



6. 3	モデル化	90
6.3.1	本論におけるモデル	90
6.3.2	第三章の再検討	92
6. 4	データの分析	94
6.4.1	コノ／*ソノ	94
6.4.2	コノ／ソノ	100
6.4.3	*コノ／ソノ	105
6.4.3.1	名詞の指示性	105
6.4.3.2	束縛変項解釈・代行指示	108
6.4.3.3	「予測裏切りの意味」	109
6. 5	第六章のまとめ	111
 <b>第七章 現場指示のソ系列指示詞</b>		
7. 1	はじめに	113
7. 2	ソ系列指示詞と文脈指示用法	115
7. 3	ソ系列指示詞の本質と現場指示用法	116
7. 4	現場指示に用いられるソ	117
7.4.1	聞き手とソ	117
7.4.2	聞き手の領域	118
7.4.3	「映像化」再考	120
7.4.4	仮説	123
7. 5	分析の論拠	126
7.5.1	制約のキャンセル可能性	126
7.5.2	文脈指示における現象	127
7. 6	分析の利点	129
7.6.1	Hoji et al.(2000)、田窪(2002)の問題点	129
7.6.2	曖昧指示	130
7.6.3	聞き手の存在	131
7.6.4	二項対立 vs.三項対立	131
7. 7	第七章のまとめ	132
 <b>第八章 指示詞モデルからみたア系列指示詞</b>		
8. 1	はじめに	134
8. 2	モデルの問題点と補強	135
8.2.1	問題点	135
8.2.2	モデルの補強	135
8.2.3	直示の再定義	137
8. 3	コ／ア	140
8. 4	ア系列指示詞の記憶指示用法	142

8. 5 テキストのタイプ	144
8.5.1 リンク	144
8.5.2 文脈指示とはどのようなテキストタイプか	146
8. 6 第八章のまとめ	149
<u>第二部のまとめ</u>	151
<u>第九章 本研究のまとめ</u>	
9. 1 はじめに	152
9. 2 本論で明らかにしたこと	152
9. 3 指示詞のそれぞれの関係	154
9. 4 今後の研究に向けて	154
謝辞	158
<u>参考文献表</u>	160

# **第一部**

## **記述的考察の部**

## 第一章 本論文の目的と構成

### 1. 1 本論が指すもの

本論では、日本語の指示詞について研究する。日本語の指示詞については、佐久間(1951)をその研究史の出発点として位置づけることが多いが、その後国語学、日本語学、言語学そして日本語教育学の中で膨大な量の研究が積みかさねられてきた。1990年代に入り、金水・田窪(1990)が談話管理理論に基づく分析を発表し、指示詞研究は大きな転機を迎えた。この理論は、Fauconnier(1985)のメンタル・スペース理論<sup>\*1</sup>を応用発展させたものであるが、この研究によって初めて、指示詞を理論的枠組みの中で捉えようとする試みがなされたと言えよう。その後田窪・金水(1996)、坂原(1996)などで理論的な整備が行われる一方、金水(1999)、岡崎(2001)などが、歴史的な事実から指示詞研究にインパクトのある主張を行ってきている。

文脈指示用法の指示詞は庵(1997)や、彼のそれまでの一連の研究によって興味深い用法が数多く指摘、検討されてきた。庵の研究が明らかにしたことは、文脈指示用法は現場指示用法とはかなり異なった体系を有しており、談話管理理論では説明ができないデータが存在することであった。彼は文脈指示には談話管理理論とは別の理論が必要であると主張し、文脈指示用法のみを取りあげ、非常に綿密かつ詳細な研究を行った。

しかし、庵の研究にも問題はある。文脈指示用法と現場指示用法が一見全く異なった体系を有していることは、記述的には正しい。ところが、このように考えることは両者の関係を見えにくくし、そのことによって指示詞の本質とは何かという重要な問いに答えることを困難にしているように思われるのである。庵の研究によって、それまでより文脈指示用法の記述がより精密になり、筆者を含め多くの視線が文脈指示用法に向けられることになったことは彼の貢献であったが、あまりにも文脈指示用法に注目し、そこには現場指示用法とは異なった理論を用意しなければならないと強調しすぎたことが、上のような問題を引き起こしたのではないだろうかと考えられる。

---

\*1 メンタル・スペース理論そのものについては Fauconnier(1985)他、Fauconnier(1997)、坂原(1989)等も参照。

## 1. 2 本論で解決する問題

本論では上で述べたような問題を克服するような理論を提出することを最終目標としている。具体的には、指示詞研究の中で重要な問題である次のようなものに答えを与えていくことになる。

- 1.指示詞とは何か。指示詞は言語のシステムの中で何をしているのか。
- 2.指示詞が「指示」しているものは何か。
- 3.現場指示用法と文脈指示用法の関連は何か。両者には全く異なった理論が必要か。それとも、統一的に説明ができるものなのだろうか。
- 4.コ系列ソ系列ア系列は、それぞれがどのような関係を持って成立しているのか。

本論の中でこれらの問いに対する答えを見ていきたい。1.については、指示詞というものは外的世界と言語表現の間に存在する心的領域で行われる処理に関係するものであり、その領域の中に存在する要素を指す役割を有すると考える。また2.であるが、指示詞が指示するものはしたがって、決して外的世界に存在する対象ではなく、その心的領域の中に存在する対象なのである。このように考えるならば、その心的領域とはどのようなもので、そこに存在する対象はどのような性質を持っているのかを考える必要がある。本論第二部での仕事になる。

3.については、本論では現場指示用法と文脈指示用法は、単一かつ単純なモデルによって統一的な説明が可能となることを示す。上述のとおり、談話管理理論では説明ができない現象が存在することは庵(1997)で指摘されているし、庵はそのような現象を別の説明装置を用いることによって解決しようとした。本論で提示されるモデルは、この両者の問題点を克服し、談話管理理論では説明できなかったような現象も含め、現場指示用法、文脈指示用法全ての用法に対して説明力を発揮するようなモデルである。

4.については三上(1970)が、指示詞をコ／アとコ／ソの二項対立が折り重なった構造であるとして以来問題となっている点である。これとは逆に堀口(1978)はコ／ソ／アは三者が並立に存在しているとした。これはどちらの見解が正しいのであろうか。また、これと関連する概念として「包含型視点」と「対立型視点」(木村(1992))というものがある。包含型視点とは、話者と聞き手が同一の視点を有し指示詞を用いるので基本的にコ／アの

みが出現する。一方、対立型視点においては、話者と聞き手は向かい合って対峙するため、聞き手の領域にある対象はソで指される。このような考え方は言うまでもなく三上(1970)の立場におけるものであって、堀口(1978)の立場をとるならば、このような概念とは別の概念によりこのような現象を説明する必要があるだろう。

本論での4.に対する立場は、田窪・金水(1996)と同様、基本的にはコ／アとソが、その対象の指し方において対立すると考える。しかし、この対立は対象の指し方に関する対立であって、実際の使用の場においてはこの差はそれほど明確には現れない。したがってデータを観察すれば三者全てが使用できる環境があつて当然であり、事実そうである。完全に二項対立的立場をとる研究(三上(1970)や、久野(1973)、庵(1997)など)ではこの現象は説明できないであろう。また、田窪・金水も採用している「包含型視点」と「対立型視点」という概念は採用しない。この二者を用いた説明には、聞き手の存在というものを文法の中で考える必要あり、好ましいものではないと考えるからである。本論では語用論の中で聞き手を扱うことにより、指示詞の選択は全て話者に一任されると考える。

### 1. 3 本論の構成

以上のような目標・問題点を考えるべく、本論は次のように構成されている。

本論は二部構成である。本章を含む第一部は、記述的考察の部と題して、指示詞、特に文脈指示用法のソ系列指示詞を中心に扱う。これはコ系列指示詞／ア系列指示詞に比して、ソ系列指示詞は非常に複雑で微妙な用法を持っているからである(金水(1999:86))。第二部では第一部の考察をもとに得られた結論を、モデルに援用することを試みる。まず文脈指示用法のモデルを構築し、そのモデルを現場指示用法に拡張する方向で議論を進めていく。

本章に続く第二章では、本論が先行研究より踏襲する基本的な立場や、本論を読み進めていく上で必要最小限の概念などを提示する。本論で指示詞と呼ぶものはどのようなものなのか、またその中で本論が中心的に研究していくものは何かなどを見る。同時に、指示詞研究の中で何が明らかになっており、何がいま問題になっているのかについても記述していく。この章は第三章以降の議論の導入部の役割を果たしている。

第三章では、文脈指示用法におけるコ系列指示詞とソ系列指示詞の使い分けについて、記述的な考察を行う。これと同じ問題は第六章で再び取りあげることになるが、本章はそのための準備的考察である。ここでは名詞句に object dependent なものと object independent

なものがあることを指摘し(Neale(1990))、コ／アは前者を、ソは後者の名詞句を指すとする。そのうえで、object dependent な名詞句は「話し手にとって指示的」であり、object independent な名詞句はいったん変項におきかえられて解釈されると主張する。つまり、コ／アは「話し手にとって指示的」なものを指し、ソは変項を指すと考えるのである。この仮説によって説明できる現象を見ることによって、この仮説の妥当性を検証する。

第四章では、ソ系列指示詞が変項を指すということの傍証と考えられるデータとして、「打ち消し問答」文(近藤(1990))と「不完全同一性」(sloppy identity)の現象について考察する。両者は、先行詞とそれと照応する名詞句のあいだで、指示する対象が異なる点で共通の性質をもっている。ソ系列指示詞によって指される名詞句が、変項として解釈されているならば、変項に変域が認められる以上、このような現象はむしろ当然のことであると考えられる。逆に「話し手にとって指示的」である名詞句にはこのように指示対象を変えることは到底不可能である。このような主張を、庵(1995c)の「テキスト的意味」という概念を中心にして考察していく。またその中で、指示詞の構造についても言及する。

第五章においては、指定指示と代行指示の問題について観察する。ソ系列指示詞には、大きく分けるとソノで先行詞を受けるものとソノのソの部分のみが先行詞と照応すると考えられるものがあることが指摘されてきた(林(1972,1983)、田中(1981)、坂原(1991)、庵(1995a)等)。本章では、この考えに異議を唱える。ソ系列指示詞は基本的に一種類のみを考えればよく、一見代行指示のように見えるものは名詞句の飽和性と関係してそのように解釈されるのであることを示す。

第二部の最初の章である第六章においては、第三章でとりあげた文脈指示用法におけるコ／ソの使い分けに再び焦点をあて、そこでの記述を理論的モデルの中で検討することを主な仕事とする。まず、モデル構築にあたって、先述の談話管理理論(金水・田窪(1990)、田窪・金水(1996))と庵(1997)の研究に批判的検討を加え、両者の問題点を指摘する。そのうえでいよいよ、本論で提示するモデルの構築を行う。このモデルを用いることによって、第一部で扱ったデータが全て説明できることはもちろんのこと、本章で新たに問題にあげるデータで、先行研究でも統一的に扱えていないものが全て一つのモデルの中で解決できることを明らかにする。

第七章は、第六章のモデルを現場指示用法の説明に拡張する方向で議論が進められる。本論ではソ系列指示詞は変項を指し、したがって非指示的であると考えているが、もしそうであるのならば、眼前にある対象を直接的に指示する用法であるところの現場指示用法

においてソ系列指示詞が使用されるのは不思議な現象である。本章では、この問題についての答えを、聞き手の領域に関する語用論的な制約に求める。このような主張は、現場指示用法におけるソ系列指示詞の用法はその本質的なものではないと主張しているが、その根拠やそのように考えることの利点などを議論する。

第八章においては、このモデル構築の最後の仕事であるア系列指示詞の特徴付けを行う。先述したように、本論のモデルでは田窪・金水(1996)同様コ／アを同じ領域を指すものであると仮定している。そうであるならば、二つを区別する根拠は別のところに求めなければならない。本章では Hoji et al.(2000) の議論を援用し、そのことによってモデルを補強、修正する。本章の後半では、この補強されたモデルを用いて、ア系列指示詞の特殊な用法である記憶指示について検討する。この議論から、なぜ文脈指示用法においては原則的にア系列指示詞が使用されないのかについての理由を説明することが可能になる。

最終章である第九章においては、本論で明らかになったことをまとめ、問題点と今後の展望について少し触れる。



## 第二章 本論における基本的な立場

本章では、本論が基本的立場としてとる考え方を、先行研究を概観することによりみていくことにする。本章で取りあげる概念以外にも、本論に関与的なものは多くあるが、それらは議論の過程でその都度検討を加えることにし、ここでは本論を読み進めていくために必要最小限のものだけを紹介するにとどめる。

### 2. 1 指示詞について

「指示詞」という用語自体を詳細に検討することは本論の目的ではないが、出発点として、本論において「指示詞」という用語が何を指すのかということは、ここで明らかにしておく必要がある。結論だけを述べてしまえば、「指示詞」とは佐久間(1951)が「こそあど」として抽出した一連の語群の総称である。

(1)

	” 近称 ”	” 中称 ”	” 遠称 ”	不定称
もの	コレ	ソレ	アレ	ドレ
方角	コチラ コッチ	ソチラ ソッチ	アチラ アッチ	ドチラ ドッチ
場所	ココ	ソコ	アスコ	ドコ
もの 人 (卑)	コイツ	ソイツ	アイツ	ドイツ
性状	コンナ	ソンナ	アンナ	ドンナ
指定	コノ	ソノ	アノ	ドノ
容子	コー	ソー	アー	ドー

(佐久間(1951:7)より引用。原文縦組み。)

これらの語群を「指示詞」と呼ぶ本論における根拠は、単に形態的な共通点である。意味や機能にまで考察を進めていくと、品詞論や構文論、あるいは文章論といった分野にまで議論がおよび、難しい問題が色々出てくる（このあたりの事情については佐久間(2002:3.5節)に記述があるので参照されたい。また、佐久間(2002:178)によると、「指示詞」という語は佐久間(1951:13)に由来し、その後井手(1960)、国立国語研究所(1981)などがこれを表題に用いるなどして一般的に用いられるようになったようである）。本論は、これらの語群がもつコ・ソ・ア（・ド）という形態素の意味、機能を記述することが目的であり、その他の品詞との比較を行うことは主たる目的ではない。以上のような理由により、本論ではコ・ソ・ア（・ド）という形態素をもつ(1)の語群を「指示詞」としておく。

## 2. 2 現場と文脈

指示詞には現場指示用法（以下、現場指示）と文脈指示用法（以下、文脈指示）とが存在することはよく知られている。文脈指示用法の存在を最初に指摘したのも佐久間(1951)であると考えられる。そこでは「文脈指示」という用語は用いられず、代わりに「対話の際相手のいう事をこういう語（＝ソレ、ソノ、ソコデ、ソノ時など）でさす」「前に述べた事柄や品物をさす」（p.24）と記述されている。その後三上(1955)が「文脈承前の用法」として文脈指示の用法をたてた。

本論でも、指示詞の用法としては大きく現場指示用法と文脈指示用法を認める。金水(1999)は、「直示／非直示」という用語を用い、田窪(2002)では「非照応／照応」が用いられているが、これらの用語は立場や分析の違いによるものであって、それらが意味する用法の範囲に大きな差があるわけではない（金水(1999)については 2.5 節で今少し詳しく触れる）。したがって本論では今後、特に問題が生じない場合は「現場指示用法／文脈指示用法」という用語を用いることにする。本論では、この二者は連続的なものであり、この区別は分析の便宜のために行ったものであると理解されたい。本論における両者の定義

は以下のようなものである。例文とともに示す<sup>\*1</sup>。

(2) 現場指示用法

その指示対象の同定に、言語的先行文脈が必要ではない用法。

(3) 文脈指示用法

その指示対象の同定に、言語的先行文脈が必要な用法。

(4) a. (手に持っているボールペンを聞き手に見せながら)

「このボールペン、とても書きやすいよ」

b. (聞き手が読んでいる本を見ながら)

「その本、何？」

c. A: 「すみません、このあたりに郵便局はありますか」

B: (100m ほど先の信号を指して)

「あの信号を左に曲がって 50m ほど行けば左側にありますよ」

(5) 「わたしよりあとに冬眠した人はいないのですか」

「たくさんおりますよ」

との返事。しめた。そいつらに対してなら、いばることもできるだろう。エヌ氏は元気づき、そういう人たちに会ってみた。

しかし、うまくいかなかった。その人たちは、なにもかも知っている。事情をたずねるとこう教えられた。百年間も冬眠すると、目ざめてから時代おくれになり、そのごの生活をうまくやっていけなくなる。それを防ぐため、冬眠中の脳に、世の変化についての必要な情報を送りこむ方法が開発された。

(星新一「新しがりや」 p.67 より引用)

---

\*1 庵(1997:ch.3)のように、テキストのタイプを「自己充足型テキスト」と「非自己充足型テキスト」に分けて考えることも可能である。前者は状況に依存せず、言語的文脈を参照するだけで第三者にも解釈可能となるテキスト、後者は言語的文脈のみでは第三者には解釈が不可能で、状況に依存しなければならないタイプのテキストであるとされている。この点については第八章で詳しく議論することにする。

(4)が現場指示、(5)が文脈指示の用法である。(4)は全て発話時において現場に存在する事物を指してコノ、ソノ、アノと言っている。反対に(5)では最初の発話中の「冬眠した人」を指して、ソイツラ、ソウイウ人たち、ソノ人たちと言っている。ソノゴ(=ソノ後)のソノは後述する代行指示の用法であるが、言語的先行文脈は「百年冬眠して目ざめた」後とでもなろう。最後のソレの先行文脈は「その後の生活をうまくやっていけなくなる」ことであろう。(5)の例で、どの指示詞もその先行文脈が言語的に明示されていなければそれらが指す指示対象が同定できない点に注意されたい。一方、(4)では現場の当事者であるならこれらの指示詞が何を指しているのか、容易に同定することが可能である。

(2,3)では言語的先行文脈が、その指示詞が指す対象の同定に必要であるか否かが、現場指示と文脈指示の用法を分けるとした。この定義からすれば、指示詞の用法は基本的にはこの二者のみであるということになる。次節で議論する記憶指示の用法は、このような観点から論じるならば現場指示用法の一つであると考えることができる。

### 2. 3 記憶指示

次の例を見てみよう。

(6)a.そこに行こう。

b.あそこに行こう。

言語的文脈が全くない状況で、いきなり(6)を発したとき(6b)は聞き手が、アソコがどこを指すかを知っていれば使用が可能であるのに対して、(6a)はそのような状況でも不自然となる。つまり、現場に指示対象が存在していない時には、ソ系列指示詞(以下、単にソと記すことがある。コ、ソについても同様)は常に言語的先行文脈が必要となり、したがって文脈指示用法になる(上山(2000)、田窪(2002)も参照)。一方アは、その指示対象が現場に存在しなくても、言語的文脈に頼ることなく対象の同定に成功している。

ここで、「対象の同定」とはどういうことであるかについて少しばかり言及しておかなければならない。これは必ずしも、その対象が何であるか、その具体的な値を特定することではない。ある指示対象が、現場には存在しないがその存在が、発話時点で話者にとって確信できるものであるなら、アを用いてその指示対象と言語表現をリンクすることが可能であるということである。10km ほど離れた場所にあり、したがって当然話者に

は可視的ではない場所を指して(6b)のようにいうことはできても(6a)のようにいうことは不可能なのである。

(6b)のアソコは、実存する場所を直接指していると考えられることも可能ではあるが、また、話者が頭の中に思い描いているその場所に対するイメージを指していると考えられることも可能である。次のような例を考えあわせるのなら、アは実世界の対象をそのまま指すとするよりは、頭の中にある対象を指していると考えた方がよさそうである。

(7)おーい、あれ取って。(熟年夫婦の会話)

(8)金平糖、好きです。あの、ちっちゃくて、あっちこち突起があつてお星様みたいで・・・(中略)・・・何ともカラフルで、上品な甘さのお菓子。

(新井素子「解説」(星新一『未来いそっぷ』) p.264 より引用)

(9)あの試合はよかったな。(庵(1995b:620)より引用)

(10)こないだ酔って課長の秘密しゃべっちゃったろ？あの話、誰にも内緒だぜ。

このような用法は、堀口(1978)、庵(1997)、春木(1991)などでは観念指示用法と呼ばれ、金水(1999)では記憶指示と呼ばれている。本論では金水にしたがい記憶指示という用語を用いることにする。(7)は実存の対象を指していると考えられることも可能であるが、(8-10)は話者が頭に描いたイメージを指していると考えざるを得ない。(8)は、それぞれの話者の知識、経験から得られる金平糖の典型的なイメージを、(9,10)はその話者が過去に経験した事象の、記憶の中に存在するイメージを指していると考えることができる。(10)は言語的先行文脈が存在し、それをアノで指していると考えられるかもしれない。しかし庵(1995b)が正しく指摘するように(10)の先行文脈はアノの解釈に関して必須的ではない。先行文脈は単に聞き手の解釈を容易にするために、補助的に働くだけであり、アの使用に対する必要条件ではないのである。堀口(1978)は(10)のようなアを、観念指示とは区別し、文脈指示のアであるとしているが、上のような理由からこの主張には賛同できない。

記憶指示の用法は、本論での文脈指示の定義(3)からすれば、先行文脈が必要でない用法であるので現場指示用法である。さらに金水(1999)が、アには文脈指示用法はなく、そのように議論されているものは全て記憶指示であると指摘していることを考えあわせれば、アには文脈指示用法は存在しないということが言える。

本節の冒頭でのソの指摘と、これまで議論してきたアの指摘をまとめると次のようになる。記憶指示のアに関する記述と合わせてここでまとめておこう。

(11) ソは、指示対象が現場にない限りは文脈指示用法になる。

(12) アには、文脈指示用法はない。

(13) 記憶指示のアは、話者の記憶の中に存在するイメージを指す。

記憶指示のアを現場指示用法の一つとすることには抵抗があるかもしれない。というのは、これまでの議論では指示詞はあたかも、現場、文脈、記憶という三つの領域を指す別の用法があるかのように論じてきたからである。しかし、第六章以降で構築される本論のモデルにおいては、現場と記憶はある意味において同一視される。その段階で、本節での主張の意味が明らかになることであろう。

## 2. 4 人称区分説と距離区分説

再び現場指示用法に戻って、その用法を観察していくことにしよう。これもよく知られていることであるが、指示詞の使い分けを説明するものとして、人称区分説と距離区分説の二つが存在する。人称区分説とは、(14)のようにコソアが指す領域を人称に関連させて説明しようとするもので、佐久間(1951)以来広く受け入れられてきた説である。一方、距離区分説とは、コは話者の近くの対象を、アは話者から遠くの対象を、ソはそのどちらでもないと捉えられる対象を指すといった説である。

### (14) 人称区分説

コ・・・話し手の領域に存在する対象を指す。

ソ・・・聞き手の領域に存在する対象を指す。

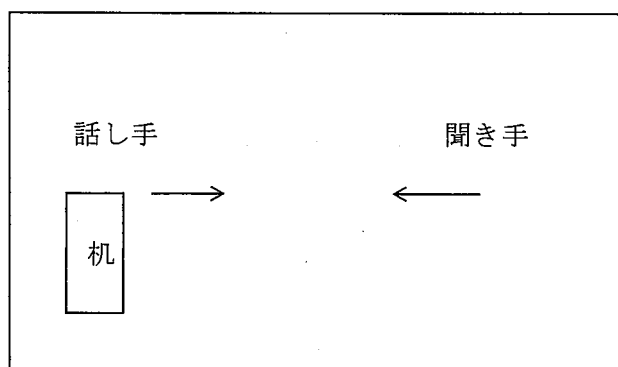
ア・・・話し手・聞き手どちらの領域でもない領域に存在する対象を指す。

ところが、特にソに関して、(14)では説明が難しいものが存在することも高橋(1956)、服部(1968)、阪田(1971)などにより広く知られているところである。高橋(1956)から引用する。

- (15) 図のように、話し手と聞き手とが部屋の中で立ち話をしている時、話し手が手を後ろへやって机を指し、「その机をごらん」と言う場合を例にとると、距離においても方向においても話し手の側にあるものがソ系で発言されることになる。

(高橋(1956:56)より引用)

(16)



(17) (タクシーの中で)

「運転手さん、そこの角を曲がったところで降ろしてください」

これらの例に現れるソは一般に中距離のソと呼ばれているもので、人称区分説だけでは説明できず、距離区分説的な説明が求められるものである。もちろん、人称区分説を距離区分説に還元してしまうことなどできない(金水・田窪(1992:168))。どんなに離れているところにある対象でも、その対象を聞き手が手に持っているなどして、明らかに聞き手の領域に存在することが認められれば、決してアで指されることはないからである。結局この問題を統一的に説明する原理というものは、現時点では明示的な形では示されていない(金水・田窪(1992)が同じ論文の中で談話管理理論的立場から説明を加えたものと、Hoji et al.(2000)による理論的考察がある。さらに、金水(1999)にも記述があるが、いずれも十分に実証的であるとは言い難い)。

本論で提出する理論は、どちらの説に立脚するものでもない。人称区分説に関与的なものは、聞き手の領域に存在する対象をソで指す用法についてであり、本論ではこの用法は、文脈指示用法のソ系列指示詞が、何らかの語用論的要請により現場指示に出現するという分析をとる。その意味では(18)に引用する金水・田窪(1992)が言う「より高次の説明原理」であり得ると考えられる(ただし、本論第七章における議論でも中距離のソについては解決できない問題が残ることは、この段階で断っておかなければならない)。

(18)・・・ソ系列の聞き手用法と中距離用法をつなぐ、より高次の説明原理が求められなければならないということであろう。そのために、例えば次のような点に着目すべきであろう。

a.中距離のソといえども、聞き手の存在に大きく依存しているのではないか。論者の内省によれば、独り言では聞き手のソはもちろん、中距離のソもかなり使いにくくなる。

b.指し示す対象の意味範疇に偏りはないか。やはり論者の内省によると、場所を指し示す「そこ」「そのへん」等は中距離指示に用いやすいが、ものや人を指し示す「それ」「その人」等の形式は用いにくいようである。

(以上、金水・田窪(1992:169)より引用)

## 2. 5 コ・ア vs. ソ

最近の指示詞の主な研究は、指示詞をコ・ア vs.ソの対立として捉えることが多い。これは堀口(1978)、黒田(1979)を先駆とし、最近では田窪・金水(1996)、金水(1999)がこのような考え方に立脚した論を展開している。堀口、黒田の主張を簡単に示す。

### (19) 堀口説

コ・ソ・アは、強烈指示の近称コ・遠称アと、平静指示の中称ソとから成る。そして、三者はやはり並立しても用いられる。ただ、その場合、強烈指示のコ・アに挟まれて、平静指示のソは影が薄くなるのである。(堀口(1978:75)より引用)

### (20) 黒田説

さて、以上で独り言における独立的用法でア系(及びコ系)の指示詞とソ系の指示詞との意味機能上の対立を、直接的体験的知識と(単に)概念的な知識という対比で特徴づけたが、同様の説明が独り言における照応的用法にも通用することは直ちに納得されよう。(黒田(1979:52)より引用)

黒田(1979)では主にア vs.ソの対立が考察されているが、論文のいたるところで「ア(及びコ)」と記されており、コについてもアと同様に扱うとしている。(20)の引用は、独り言における用法に関する記述であるが、彼の最終的な結論はこの記述とほぼ同一のもので



ある。

この黒田の説を理論的に考察しモデルに取り込もうとする取り組みが、金水・田窪(1990)、田窪・金水(1996)などに見られる談話管理理論である。談話管理理論に関する批判的考察は第六章で行うことにするが、彼らもほぼア vs. ソの対立を考察しておりコに関する記述は少ない。しかし、彼らが黒田の説を踏襲したという点を考えると、コもアと同様に扱うと考えていると思われる。

金水(1999)はこの点をより明確に打ち出している。すなわち、コ・アは全ての用法において直示の性質を保持しているとし、逆にソは非直示的な用法がその基本的な用法であるとしたのである。彼の直示の定義を見ておこう。

#### (21) 直示の定義：

談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むことである。(金水(1999:68)より引用)

本論での立場も基本的にこれらの先行研究の延長上にある。コ・アは直示的で現場指示的な用法をその基本とし、ソは非直示的で文脈指示的な用法をその基本とする。この違いが何に起因するのかという問いに対しては第六章の議論を待たなければならないが、このことを裏付けるようなデータとして、ソには他の二者にはない様々な特殊な用法が存在することを次章以降において示す。

## 2. 6 話者と聞き手

### 2.6.1 聞き手の知識を想定しないモデル

本論のモデルは、その中に聞き手の知識を考慮しない。これは田窪・金水(1996)の次のような記述を踏襲している。

#### (22) 聞き手知識に関する原則：

言語形式の使用法の記述は、その中に聞き手の知識の想定を含んではいけない。

(田窪・金水(1996:62)より引用)

指示詞の、特に文脈指示用法における記述は久野(1973)以来、聞き手の知識に言及することが多かった。久野(1973)の一般化は次のようなものである。

(23) アー系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソー系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

(24) 話し手：昨日、山田さんに会いました。あの／\*その人いつも元気ですね。

聞き手：本当にそうですね。

(以上、久野(1973:185-6)から引用)

(23)の記述によって、(24)はうまく説明がつく。しかし、この一般化には重要な反例が存在することを黒田(1979)が指摘した。

(25) 僕は大阪で山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくといいよ。

(26) 今日神田で火事があったよ。あの／\*その火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。

(以上、黒田(1979:101)に加筆)

(25)では「あの先生」で指されるところの山田太郎は、聞き手に知られていてもよいが知られていなくてもよい。(26)も同様に、聞き手は「神田で昨日あった火事」について知っている必要は全くない。さらに(26)では、久野の予想に反してソノが使用できなくなる点が重要である。黒田(1979)、金水(1999)によるとこれは「～ことだから」という表現は、後件の推論を導くための十分な根拠である必要があるが、「ソノ火事」で指される概念的知識(「今日神田であった火事」)のみでは「人が何人も死んだ」という結論を導き出すことができない。一方、アノ火事で指されるのは話者の直接的知識であり、これにはその火事に関する属性が含まれている。その属性から「人が何人も死んだ」という結論を導き出すことができるので、アノ火事と言えると考えられるのである。黒田は、このような事実および、独り言で指示詞が利用できるなどという理由により、指示詞の意味の記述から聞き手の知識を排除した。

これと同様の結論を、堀口(1978,1990)も別の観察を行うことで導き出した。堀口は、先の高橋(1956)であげられている(16)を引き、「話し手は、自己が占めるとする領域の内にある事物はコと指示し、その外にある事物はソと指示するのである」(p.76)とし、さら

にコ／ソの領域は「話し手中心に出来ているのである」とした。

このような指摘に加え、田窪・金水(1996)では共有知識を仮定したモデルの問題点を理論的に詳細に検討し、やはりそこにも問題が存在することを指摘している<sup>\*2</sup>。その問題とはいわゆる「相互知識のパラドックス」と呼ばれているものであり(Clark & Marshall(1981)参照)、田窪・金水(1996)によれば、ある情報Pを相互に知っていることを相互に確認しようとするとき、

(27) 話し手がPを知っている。

聞き手がPを知っている。

話し手が、聞き手がPを知っていることを知っている。

聞き手が、話し手がPを知っていることを知っている。

話し手が、聞き手が、話し手がPを知っていることを知っている。

聞き手が、話し手が、聞き手がPを知っていることを知っていることを知っている。

.....

(田窪・金水(1996:60)を修正)

というように、どこまで追求しても相互知識は確認されなくなり、この埋め込みは無限に続く。なぜこのようなことが起こるかという、それは聞き手の知識を考慮に入れたからであり、さらに人間が言語を計算する際に脳にかかる負担を考えあわせれば(22)のような原則を立てるのが妥当であるということになる。

このような、聞き手の知識をモデルに組み入れないという仮定の下では、(24)のような例は全て語用論的な制約によるものであるということになる。この点について堀口(1978)が的確に述べている部分を引用しておこう。

---

\*2 共有知識を想定したモデルとしては田窪(1989)、Yoshimoto(1986)、金水・田窪(1990)、東郷(2000)などがある。これらに対する批判は詳しくは金水・田窪(1992)、田窪・金水(1996)に譲る。東郷(2000)は、これらの後に出版され田窪・金水(1996)に批判を加えているので本節でとりあげることにする。

(28) もっとも、ア・ソの使い分けについても、話し手が聞き手の存在を顧慮する事実がある。たとえ自己に関わり強い遙かな存在の事物であっても、それがよりいっそう相手に関わり強いとする場合には、自己抑制して、その対象を自己に関わり弱いものとして、ソと指示するのが普通である。そういう配慮も含めて話し手はコ・ソ・アの領域を設定するのであるが、もしも、その設定が相手に理解され得ないようなひとりよがりのものであるならば、その場合は、相手にとまどいを与えたり不快感を与えたりすることになるから避けなければならないという事情はあるであろう。しかし、もちろんそれは、言語の法則としてではなく、社交の術としての問題である。  
(堀口(1978:77-8)より引用)

田窪・金水(1996)、金水(1999)などの先行研究でも、この考え方は引き継がれている。本論第六章で提示するモデルも、このような考え方を援用したものである。

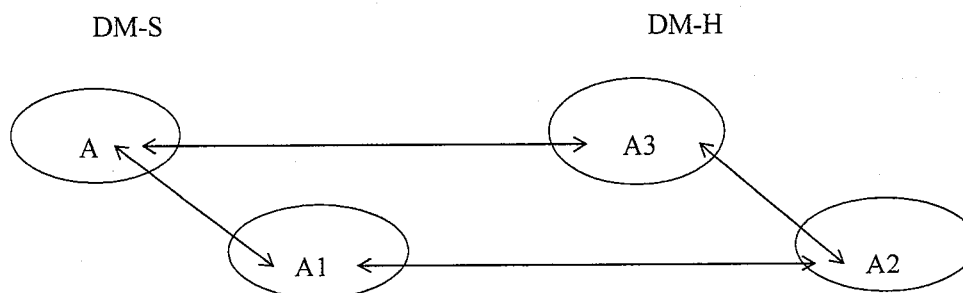
## 2.6.2 聞き手の知識を想定するモデル：東郷(2000)

2.6.1 節で述べたように、本論での聞き手の知識に関する立場は田窪・金水(1996)と同じである。しかし、聞き手の知識をモデルに組み入れようとする立場が皆無であるかというとしてそうではない。最近のものでは東郷(2000)が、田窪・金水を批判的に検討して、やはり聞き手の知識はモデルの中に組み入れる必要があると主張している。

東郷は、話者の談話モデル(DM-S)と聞き手の談話モデル(DM-H)を別に設定し、その中に「共有知識領域」「言語文脈領域」を設けた。簡単に言えば、前者は記憶指示の領域、後者は文脈指示の領域である(彼のモデルにはもう一つ「発話状況領域」があるが、ここでの議論に関与的ではないのでここでは言及しない)。(29)において、DM-S/ DM-H内の上段が共有知識領域、下段が言語文脈領域である。矢印はそれで結ばれた対象が同一のものであるということを保証するものである。

このモデルで特徴的なのが、A と A3 を結ぶリンクである。このリンクは話者の記憶内の要素と聞き手の記憶内の要素を結ぶもので、これが共有知識であることを決定的に保証している(と、東郷は主張する)。そして、このリンクがないものはアで指すことができないとしている。

(29) ほら、先週食事をしたイタリア料理店、あの店はおいしかったですね。



(東郷(2000:30)より引用)

まず指摘しておきたいのは、彼が DM-H を DM-S の部分集合としている点である。つまり、DM-H とは、純粋な（彼がいうところの「神の視点」による）聞き手の知識ではなく、話者が想像するところの聞き手の知識なのである。前節(25)や次の(30)のように、A と A3 にリンクがない場合もあるのであるが、それは話者が DM-H の査定をいったん停止、あるいは意図的にカッコに入れて計算しているものであり、そこから一方的断定というニュアンスや、聞き手を置いてきぼりにして回想にふけるといったニュアンスが生じるとしている。

(30) A:B さんが芸能界に入ったのはどんな時代でしたか？

B:あの頃は浅草オペラの全盛時代でしてね。

(東郷(2000:41)より引用)

しかし少し考えてみると、このモデルが形式化している部分は黒田(1979)、堀口(1978)、田窪・金水(1996)が語用論的制約として文法の外に置いたものである。彼らとて、指示詞の用法を記述する際にこのような事実を全く無視しているわけではない。そのことは先の堀口(1978)からの引用である(28)からもうかがい知ることができよう。DM-H が DM-S に埋め込まれたとするのであれば、東郷の主張は先行研究の主張を覆すほど強いものではないことになる。

このことを裏付けるかのように、東郷(2000)の田窪・金水(1996)に対する反論は非常に弱いものであるといえる。

(31) A:昨日山田さんに初めて会いました。あの人ずいぶん変わった人ですね。

B:ええ、あの人は変人ですよ。

(久野(1973:186)より引用)

田窪・金水(1996)は、A と B が互いに直接山田さんを知っていさえすればよいとする。しかしそれでは A と B の山田さんが同一であると保証することができないというのが東郷の反論である。

しかし、果たして A と B の間で、要素の保証は必要なのであろうか。(31)の対話のあと、A の山田と B の山田は全くの別人であったことが判明したとしよう。このようなことは実際にも往々にしてあることであるが、東郷のモデルではこのような状況を許さないかのである。また、(32)のように A が山田さん知らないような文脈においても B はアノ人と言うことができるが、このような場合には明らかにリンクは存在しない。リンクが存在しなくてもアノが使用できることは東郷も認めるところであるが、結局のところはこのリンクがあるかないかはかなり恣意的であり、かなりの程度話者に委ねられていることになってしまう。このリンクがアノの使用の必要条件であるとする東郷の主張は、彼自らの記述によって矛盾を来すことになるのではないだろうか。

(32) A:昨日駅で大声を出している人を見ましたよ。変わった人でした。

B:あー、それは山田さんですよ。あの人は変人だからつき合わない方がいいですよ。

結局のところ、東郷の田窪・金水(1996)への反論および彼の主張は、聞き手の知識を文法から外そうとする試みを決定的に覆すほどには有力ではないということになる。繰り返すが、本論では田窪・金水らの主張を採用する。

アノを使用するとき、その対象を話者が何らかの形で知っている<sup>\*3</sup>ということは、アノが話者の記憶内の要素を指すことの帰結である(2.3 節参照)。それでは、聞き手も共に知っているというニュアンスや、時として一方的断定、相手を批判するなどのニュアンスはどのようにして生じるのであろうか。このことに対する答えは第八章で、本論のモデルを用いたアノの分析を詳細に行うまで待たねばならない。

## 2. 7 「テキスト的意味の付与」

先に2.3 節において、ソ系列指示詞は、その指示対象が現場にない限りは文脈指示用法になると指摘した((11))。文脈指示用法において、ソ系列指示詞が前文から引き継ぐ情報を、庵(1995c)に倣い「テキスト的意味」と呼ぼう。そして、それが名詞に与えられることを「テキスト的意味」が付与されるということにする。

(33) 名詞句が語彙的意味の他に各テキスト毎に臨時に持つ意味を「テキスト的意味」と呼ぶ。(庵(1995c:81)より引用)

「テキスト的意味」については、第四章において詳しい検討を施すことにする。

---

\*3 田窪・金水(1996)、金水(1999)などでは、アノは話者が直接経験により知っている対象を指すとしている。しかし、この指摘は必ずしも正しいものではない。第六章において、彼らのモデルを議論する際に詳しく検討する。i)は筆者の友人から送られてきたメールの一部であるが、友人はアノ人で指されている人物には全く会ったことも話したこともなく、ただ、筆者が事前に送ったメールの内容のみで知っている。にもかかわらず、彼女はアノ人を用いてその人物を指し得ている。田窪・金水(1996)の指摘が必ずしも正しいものではないことを示す一例としてここであげておく。

i)・・・ところで、こないだ××××の知り合いがブラジルに学会に来るって言ってたやろ？

あの人、ゆうこさんっていう人？

私が(ズル)休みだった日に、電話かけてきた人がいたらしくて、その人がゆうこさんっていうらしいねんけど、知り合いにその名前の人いないからさ。

「テキストの意味」は、その情報量を変化させることが可能であり、そのことから不完全同一性(sloppy identity) (坂原(1991))等の、先行詞と、それと照応する名詞句との間で、指す対象が異なる現象が説明できる。その意味において「テキストの意味」は、非常に重要な概念である。

## 2. 8 指定指示と代行指示

林(1983)、庵(1995a)は、指示形容詞にはその照応の仕方から二種のタイプがあることを指摘した。一つはソノ／コノ全体で先行詞と照応するタイプ、もう一つはソノ／コノのソ、コの部分だけが先行詞と照応し、ソレノ／コレノという意味になるものである。

(34) 先日論文を発表したが、その論文は高く評価された。

(35) 先日論文を発表したが、その主張は学会に旋風を巻き起こした。

このような考え方は田中(1981)の照応のⅠ類、照応のⅡ類、坂原(1991)の同一照応、非同一照応(連想照応)などあるが、それぞれ少しずつ立場が異なる。これらの先行研究については第五章で詳しく検討することにする。

本論で問題となるのは、はたしてこれらの二用法は全く別のものなのであるのか、あるいは同じソノが二種類の用法があるように振る舞うのかという点、そして代行指示にはコ(ア)は存在しないとされるが、それはなぜなのかという点である。前者については第五章で、また後者については第六章で本論での考え方を示す。

## 2. 9 メンタル・スペース、場面と場

金水・田窪(1990, 1992)、田窪・金水(1996)、坂原(1996)、金水(1999)などは指示詞を談話管理理論というモデルの中で説明しようとする試みである(談話管理理論については第六章参照のこと)が、このモデルの基礎となっている理論は Fauconnier(1985)のメンタル・スペース理論である。本論でも、談話管理理論およびメンタル・スペース理論の中核となる考え方を援用する。それは次のようなものである。

一つは話者の頭の中に、「言語表現と外的世界とをつなぐ位置に中間構造としての心的表示を仮定する(金水(1999:69))」ことである。この考え方は高橋(1956)の「場面と場」という考え方に非常に近いものであると考えることができる。高橋(1956)から引用してみ



よう。

(36) 話し手の口から何かについてことばが発せられる時、その発言は客観的素材と直接に結びついているのではなく、主体的立場における話材を媒介にしている。その話材は自分と相手の緊張関係のあらわれでもあるから、「場面」は「場」をへて発言にあらわれる。

(高橋(1956:54)より引用)

(37) 言語表現→ 心的表示→ 外的世界

(金水(1999:69)より引用)

ここで高橋が「場面」と言っているものが金水のいう外的世界であり、「場」と言われているものが心的表示である。本論では心的表示を田窪・金水(1996)にしたがい心的領域と呼ぶことにする。

さて、田窪・金水(1996)では心的領域を複数設定することが提案されている。一つはD-領域、今ひとつはI-領域と呼ばれる。そしてコ/アは前者の要素を探索する指令、ソは後者の要素を探索する指令として捉えられている。指示詞を、心的領域の中に登録されている要素を探索し、それを指すという彼らの考え方は重要な発見であり、本論にも引き継がれる。この点に関する議論は第六章で行うが、そこでは田窪・金水(1996)から離れ、それぞれの領域を心的世界と捉え、その特性を規定することにより様々な現象を説明する。このモデルの構築およびそこから指示詞に関する現象を統一的に説明することが、本論の最終的な目標となる。

## 2. 10 理論は統一か否か

2.2 節において、本論での現場指示用法と文脈指示用法について定義した。ところで、この両者の関係はどのようなものなのであろうか。言い換えれば、人間はこの両者を全く別のシステムをもとに使用しているのであろうか、あるいは同じシステムを用いて使用しているのであろうか。この問題に対する先行研究の立場も大きく二分される。一つはこの二つは全く別個のシステムに支配されていると考える立場であり、もう一つは現場指示と文脈指示に対して、その両方に説明力を持つような統一的システムを構築しようとする立場である。

佐久間(1951)、井手(1959)などの初期の(とでもいうべき)研究においては、統一的な

説明を試みる研究者が多かった。これは、文脈指示用法が一応発見されてはいたものの、それは現場指示の特殊な用法の一種に過ぎず、人称区分説により説明が可能であると考えられていたためであると考えられる。その後三上(1955, 1970)によって文脈指示用法が文脈承前として、現場指示用法(眼前指示)からいったん明確に区別して捉えられ、現場指示用法から文脈指示用法への無理のない説明がなされた。

これらの立場とは反対に、久野(1973)、Kuno(1973)や庵(1997)\*4などは現場指示と文脈指示にそれぞれ別個の理論を立て説明しようとする。久野は、文脈指示では指示詞は元々の意味を失うと述べているし(Kuno(1973:288))、庵(1997:ch.3)は、現場指示では知識管理に関わる原理がはたらき、文脈指示では結束性に関わる原理がはたらくと考え、後者にはテキスト言語学的な観点からの考察が有効であると述べている。

このような、理論を別に立てるという立場では、現場指示、文脈指示といった記述的な区別は理論にまで反映され、それはそのまま現場指示の指示詞と文脈指示の指示詞の関係を断ち切るような枠組みとなってしまう。この点に関して金水・田窪(1992)は次のように述べている。

(38) 現場指示のソと文脈指示のソが別の原理に基づいて成立するとするならば、両者の関係はどのようなものなのであろうか。派生関係にあるのか、同音異義語であるのか、あるいはさらに高次の説明原理によって統一的な扱いが可能なのであろうか。

(金水・田窪(1992:164)より引用)

本論で構築する理論は、この金水・田窪(1992)の考え方に立脚し、現場指示と文脈指示を統一的に捉える。その際上であげた先行研究やその他の最新の研究にも言及することになる(第七章)。

---

\*4 庵(1997)は、それ以前に刊行された論文をもとにまとめられたものである。個々の概念や例文をあげる際はそれらの論文を引用するが、彼の一貫した立場に言及する際には庵(1997)として引用する。

## 2. 1 1 第二章のまとめ

本章では、本論を読み進めていく上で必要かつ最小限の概念について、先行研究を紹介することによって記述していった。以上のことから明らかなように、指示詞の問題は佐久間(1951)以来、様々な考察が加えられ、そして着実にその成果を上げてきている。にもかかわらず、未だ未解決の問題が山積していることも事実である。次章以降の考察によって、それらの問題に対する本論なりの答えを明らかにし、指示詞研究への一貢献としたい。

### 第三章 文脈指示におけるコ系列指示詞とソ系列指示詞

本章から第五章にかけては、文脈指示の指示詞について中心的に考察を進めていく。これは、文脈指示の指示詞（特にソ系列指示詞）には、他の指示詞の用法とは明らかに異質な用法が多数存在し、それらを先に議論することで文脈指示におけるソ系列指示詞の機能を明らかにし、後の議論につなげるためである。また後述することではあるが、金水(1999)、岡崎(2001)らは、ソの基本的な用法は非直示的な用法であるという可能性を、通時的な研究により示唆している（第七章で論じる）。もしこの議論が正しいものであるとするならば、少なくともソについては文脈指示の用法から検討していくことが、現場指示の用法についても有益な知見をもたらすことが考えられる。以上のような理由で、本論では文脈指示を先に考察することにする。

なお、2.3 節で議論したとおり、本論では春木(1991)、庵(1997)、金水(1999)にしたがい、ア系列指示詞には文脈指示用法がないと考えるので、以下の議論ではコ／ソの使い分けが主な問題点となる。ア系列指示詞の詳しい考察は第八章で行うことにする。

#### 3. 1 考察の対象

文脈指示において、コとソは言い換えが可能である場合とそうでない場合とがある。

- (1) a. 昔むかし、あるところにおじいさんが住んでいました。その／このおじいさんは、山へ柴刈りに行きました。
- b. この大学にはたくさんの野良猫がいる。その／\*この野良猫は学生からえさをもらって生活しているようだ。
- c. エリザベス・テラーがまた結婚した。\*その／この女優が結婚するのはこれで七回目だそうだ。 (庵(1997:52)より引用)

文脈指示におけるこれらの問題については、庵(1997)およびそのもととなった論文で詳しく取り上げられるまで、あまり本格的に分析されてこなかった。本章は、彼の説とは別の視点から同じ問題を分析する試みである。

ソノとコノでは、それが付与される名詞句の特質に差が存在する。ソノが付与される名詞句は非指示的であるのに対し、コノが付与される名詞は、少なくとも話者にとっては指示的なのである。以下、先行研究を概観し、本章での方法論を記述した後に、問題の分析を行う。

### 3. 2 先行研究

この問題に関しては、庵(1997:ch.6)に詳しい。庵(1997)は、金水・田窪(1990,1992)で提出された「談話管理理論」による指示詞の分析は、現場指示および、彼が「広義の文脈指示」と呼ぶ用法の説明には有効であるが、彼が「狭義の文脈指示」と呼ぶ用法の説明には別のシステムによる分析が必要だと主張した。談話管理理論とは、前章 2.9 節でも議論したが、話者が複数の心的領域を用意し、それらをそれぞれ D-領域、I-領域とし、指示詞はそれらの中に登録された要素を探索せよという指令であると捉える理論である(田窪・金水(1996))。金水・田窪(1990,1992)では、D-領域は直接経験領域、I-領域は間接経験領域と呼ばれている。

庵によれば、次のような例ではコ系列指示詞は使用できずソ系列指示詞のみが使用できるが、金水・田窪の説によればこのことは説明できないという。

(2) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その／\*この順子が今は他の男の子供を二人も産んでいる。(庵(1996a:31)を修正)

金水・田窪らの理論によれば、ここでの「順子」は卓越性を持っており直接経験領域に登録されるはずであるが、にもかかわらずコが使用できずソのみが使用可能である。このことは、金水・田窪理論が間違った予測をしているのではなく、彼らの理論で予測できる範囲には限界があると庵は考える。そこで、(3)のように、文脈指示の指示詞には別の原理にしたがうものが混在していると考えた。

(3) 文脈指示には「知識管理」の原理に従うものと、「結束性」の原理に従うものがある。(庵(1997:22)より引用)

前者には談話管理理論が有効であり、後者には「結束性」を捉えた理論を用意する必要がある。

あるとしたのである。そして、「結束性」の原理にしたがうソノ／コノは、それぞれ次のような捉え方がなされている。

(4)a.トピックとの関連性という観点から捉える。(コノ)

b.テキスト的意味の付与という観点から捉える。(ソノ)

(庵(1997:60)、括弧内は筆者)

(5)トピック(topic)：庵(1997:55)

テキストの内容を1名詞句で要約する時、その名詞句をそのテキストの「トピック」、トピックを構成する意味上の諸要素の中で、特に重要度の高いものをそのトピックと関連性が高い名詞句と呼ぶ。

(6)テキスト的意味：庵(1997:57)

テキスト内で名詞句が繰り返されると定情報名詞句はその文脈内で限定される。この限定を「テキスト的意味」と呼び、限定を受けた名詞句には先行文脈からのテキスト的意味の付与があると考ええる。

庵(1997)の(4)の最大の特徴は、それまでの先行研究で（主に現場指示について）いわれてきた、「聞き手／話者」の概念を完全に取り払った点にあると思う。本章においても、ソノの使用に関しては、これらの概念は直接的には必要ではないという主張を行う。一方、コノの使用については、「話者」という概念が文脈指示においてもやはり必要であると考えられるようなデータが存在する。

(7)a.彼は昨日生協でぜんざいを食べたそうだが、その／\*このぜんざいはうまかったそうだ。

b.君、昨日生協でぜんざいを食べたんだって？その／\*このぜんざいはうまかったかい？

(8)a.1時間後に会社の者が受け取りに来ますから、その者に渡して下さい。

(金水・田窪(1990:102)より引用)

b.僕が好きな国をあててごらん？その／??この国は南アメリカにあって、コーヒーがとても有名なんだ。

c.君が好きな食べ物をあててあげよう。その／\*この食べ物はボルシチだね？

(7,8)において、下線を引いた名詞句は、それぞれの文のトピックであると考えられるにも関わらず、コノの使用が不自然である。これらの点は、すでに金水・田窪(1992)で、「他人の知覚は直接的には知りがたいので、間接経験的対象でしかありえない」「ソは・・・、間接経験的領域<sup>\*1</sup>」の対象を指し示す。」(p.187)「話し手が知らない対象、仮定的対象として話し手が導入した対象、世界の事物との対応が不明な不定的対象等」(p.189)と指摘されている(注釈は筆者)。

本節では、文脈指示における分析においても、コノの使用に関しては「話し手」という概念が必要であることを指摘した。本章では、庵(1997)の問題点を克服するべく議論を展開するが、次節ではその方法論を述べ、以下の分析への準備をすることにする<sup>\*2</sup>。

---

\*1 直接経験的領域とは話者が直接知り得た知識等が存在しうる領域である。一方、そうでない知識は直接経験的領域に存在することはできず、「間接経験的領域」のみに存在する。

\*2 本節での議論とほぼ同様のものを、堤(1998a)で発表したところ、庵(2002)において、(7,8)の例は聞き手がおり、したがって談話管理理論が有効な例であるので、彼の説への反論にはならないとの指摘がなされた(庵(2002:8))。しかし、庵(1997:18)は別のところで、談話管理理論が有効な指示詞はアとソが対立すると述べている。だとすると、例えば(7)において少なくともコは全く現れる可能性がなく、アは環境が整えば出現するということになる。なるほど i) ではアが存在しても構わないが、重要なことはコも出現することが可能だという点である。

i) 僕は昨日生協でぜんざいを食べたんだけど、その／この／あのぜんざいはうまかったよ。

このような例を庵の立場から捉えんとするならば、i) は談話管理理論、結束性の両方の原理から捉えることができるものだということになるのかもしれないが、それでは二つのテキストタイプを区別する理由がなくなると思われる。ここにも、指示詞の説明に別の理論を立てようとする試みの無理が現れていると考えられるのである。

### 3. 3 分析の方法

本章では、「名詞の指示の仕方」に焦点をあてた分析を行う。これまで、指示詞の研究といえば、指示詞そのものに焦点をあてたものが多かったように思うが、それらが付与される名詞を含めた考察はあまりなされなかったと思う。

そこで本章では Neale(1990)の object dependent/object independent という概念と、Diesing(1992)の不定名詞句に関する分析を援用する。

#### 3.3.1 object dependent/object independent

Neale(1990)は、全ての自然言語の名詞句は指示表現(a referring expression)か量化表現(a quantifier expression)かのいずれかであると主張している。彼が指示表現としているものは、(英語の)固有名詞、指示詞、一部の代名詞であり、その他の名詞句は量化表現であるとしている。これら二つを区別するものは、それらの名詞が object dependent (指示表現)であるか object independent (量化表現)であるかということである。まず、object dependent という概念の規定を Neale(1990)から引用しよう。

##### (9) object dependent

次のような場合、'b'は object dependent(i.e.指示表現)である。

- (R1) If 'b' is a genuine referring expression (singular term), then for a (monadic) predicate '- is G', it is necessary to identify the referent of 'b' in order to understand the proposition expressed by an utterance u of 'b is G'.
- (R2) If 'b' has no referent, then for a (monadic) predicate '---is G', no proposition is expressed by an utterance u of 'b is G'.
- (R3) If 'b' is a genuine referring expression that refers to x, then 'b' is a rigid designator; i.e., x enters into a specification of the truth conditions of (the proposition expressed by) an utterance u of 'b is G' with respect to actual and counterfactual situations.

(Neale(1990:18-20)より引用)

##### (10) a. Aristotle was fond of dogs. (p.19)

- b. ダイアナ元妃は世界平和のために尽くした。



(10a,b)が真であるためには、指示表現である"Aristotle"「ダイアナ元妃」が知識等によって唯一の人物を指していると確認 (identify) されなければならない(R1)。その意味で仮に"Aristotle"「ダイアナ元妃」が実在しなかった場合には、(10ab)は何らの命題を表現しない(R2)し、したがってこれらの指示表現は命題が真か偽かという問題に直接関わってくる(R3)。

次に object independent の規定を見よう。

#### (11) object independent

次のような場合、"the F"は object independent (i.e. 量化表現)である。

(D1) If 'the F' is a definite description, then for a (monadic) predicate phrase '- is G', the proposition expressed by an utterance of 'the F is G' can be perfectly well understood by a person who does not know who or what is denoted by 'the F'. (p.21)

(D2) If 'the F' is a definite description, then for a (monadic) predicate phrase '----is G', an utterance of 'the F is G' expresses a perfectly determinate proposition whether or not there is any individual that satisfies 'the F'.

(D3) The individual x that actually satisfies a definite description 'the F' does not enter into a specification of the truth conditions of 'the F is G' in either actual or counterfactual situations.

(Neale(1990:21-23)より引用)

(12) a. The last great philosopher was fond of dogs.

b. イギリスの元王妃が事故でなくなった。その王妃は世界平和のために尽くした。

(10ab)とは対照的に(12ab)では"the last great philosopher"「その王妃」を知らない者でも、命題を理解することが出来る(D1)。また、もしそれらが実在しない場合でも(12)があらわす命題は成立するし(真である)(D2)、仮に反現実的な状況において、最後の偉大な哲学者がアリストテレスではなかったり、事故で亡くなったイギリス王妃がダイアナ元妃でなかった場合でもこれらの命題は真であり得る。その意味においてこれらの表現は、命題の真偽に直接関わってこない(D3)。

本論での立場を先どりしていえば、指示詞コ／アをともなった名詞句は、Neale(1990)の用語で言えば object dependent であり、ソをともなった名詞句は object independent であ

る。object dependent な名詞句は (R3) にもある通り 'rigid designator' である (Kripke (1972))。本論ではこれを阿部 (1998:13) にしたがって、「厳格な指定表現」と呼ぶことにする。

### 3.3.2 不定名詞と変項

さて、前節 (12) は、仮に "The last philosopher" 「イギリスの元王妃」が誰か知らなくても、その命題は解釈されるとした。つまり、object independent である名詞句 (量化表現) は不定 (indefinite) であるということが出来る。不定名詞句について、Diesing (1992:6) は Heim (1982) を援用して次のように述べている。

(13) indefinites are not inherently quantified, but merely introduce variables into the logical representation.....They must receive quantificational force by being bound by some other operator.

(14) a. Every llama ate a banana.

b. Every<sub>x</sub> [x is a llama]  $\exists$  [y is a banana]  $\wedge$  x ate y

↑

↑

↑

quantifier

restrictive clause

nuclear scope

(Diesing (1992:7) より引用)

意味解釈において、不定名詞句は何らかの演算子に束縛されなければならないということである。(14a) の llama, a banana はそれぞれ (14b) の Every,  $\exists$  に、それぞれ束縛される。 $\exists$  は、a banana が存在することを表す抽象的な演算子 (存在量化詞) である。この分析を用いれば、object independent な名詞句は、全て意味解釈において変項を導入し、何らかの演算子に束縛されることになる。

では、object dependent な名詞句はどうか。本論ではこのような名詞句は変項を導入せずに、直接に世界の対象物を指示すると考える。このような指示を本章では「直接指示」と呼ぶことにする。

ここで「指示的／非指示的」を次のように定義しておく。

(15)ある名詞句( $\alpha$ )が世界の対象物を直接指示するとき、その名詞句を指示的であるといい、意味解釈において変項を導入するとき、その名詞句を非指示的であるという<sup>\*3\*</sup>。

### 3.3.3 「話し手にとって指示的」

分析のための概念として、最後に「話し手にとって指示的」という概念を導入する。この概念は、大体 Donnellan(1971,1978)の"speaker reference"という概念に等しい。例えば、ある殺人事件が発生し、その手口の残虐さを見て刑事が「犯人は相当残酷なヤツだな。」と発話したとしよう。この場合、「犯人」は object independent であり、仮にこの事件の被害者が自殺であってもかまわない。ところがその後、ある容疑者 A が浮かび上がり、裁判において検察官が「犯人は相当残酷なヤツです」と発話した場合、検察官は「犯人」という表現を用いて容疑者 A を指示したと考えられる。しかし、聞き手には、検察官が果たして本当に容疑者 A を指示したかどうかは判断できない。このような場合、「犯人」は「話し手にとって指示的」に用いられたということにする<sup>\*5</sup>。

以上、本節では、本章の分析に必要な概念である、object dependent/independent、不定名詞句の変項の導入および指示／非指示の定義、「話し手にとって指示的」という概念を提出した。以下、これらを用いてコノ／ソノの分析を試みる。

## 3. 4 本章における仮説

まず、例文に立ち返ってみよう。(16,17)はそれぞれ(7,8)の再録である。また(16a)は庵

---

\*3 Kripke(1972),Donnellan(1972)も、これに近い見解であると考えられる。彼らは、固有名詞は内包を有さず、外延のみを持つという議論を行っている。

\*4 現段階では「世界」についての厳格な規定は行わず、一般的に言われているような外的世界であるとしておく。この規定には問題があり、それを修正する議論は第六章で行う。また、本章で暫定的に「直接指示」としているものも、この規定を修正する際に本論での最終的な定義を示す。現段階では、議論を簡略化するために(15)を仮定するが、今後の議論には差し支えない。

\*5 庵(2002)や『言語研究』の査読者から指摘されたとおり、この概念は特定／非特定にほぼ対応する。

(1997)による。

(16) a. 僕は昨日生協でぜんざいを食べたけど、その／このぜんざいはうまかったよ。

b. 君、昨日生協でぜんざいを食べたんだって？ その／\*このぜんざいはうまかったかい？

(17) a. 1 時間後に会社の者が受け取りに来ますから、その／この者に渡して下さい。

(金水・田窪(1990:102)より引用)

b. 僕が好きな国をあててごらん？ その／この国は南アメリカにあって、コーヒーがとても有名なんだ。

c. 君が好きな食べ物をあててあげよう。 その／\*この食べ物はボルシチだね？

(16ab)を比べて分かることは、コノは一人称でしか使用できないということである。つまり、「コノぜんざい」と言うためには、それが少なくとも話者にとって object dependent なければならないということである。(17a)も同様のことが言える。「コノ者」と言えるためには、話し手はある特定の人物を念頭において発話しなければならない。「コノ者」以外の人間が来れば、(17a)は偽であるということになる。しかし、聞き手は、話し手が「コノ者」によって指示した人物が誰であるか知っている必要はない。つまり「コノ者」は「話し手にとって指示的」なのである。(17bc)も同様の説明が出来る。

一方、ソノは人称に関係なく使用でき(「話し手にとって指示的」ではない)、また(17a)から分かるように「ソノ者」は「一時間後に受け取りに来る会社の者」という属性を持っていれば誰でもよい。つまり、「ソノ者」は意味解釈に変項を導入する非指示的な表現であるということである。(16b)の「ソノぜんざい」も、指示的ではなく、当然ながら固有名詞のような指示表現でもないので、量化表現として変項を導入すると考えられる。

ここで、コノ／ソノの機能を仮説として提示してみよう。以下、この仮説の妥当性を議論していくことにする。

#### (18) ソノの機能

ソノをともなった名詞句は、意味解釈において変項(x)として解釈される。

#### (19) コノの機能

コノをともなった名詞句は「話者にとって指示的」である。

### 3. 5 問題の分析

#### 3.5.1 置き換えが不可能な場合

前節での仮説(18,19)はコノ／ソノの使用について一つの予測を生む。

(20) 指示詞が付与される名詞句が、

a. 変項として解釈される (object independent) → ソノ

b. 変項を介さずに、直接対象を指示すると解釈される (object dependent) → コノ

この予測は前節(16,17)をうまく説明する。また、先行詞が固有名詞である場合(20b)が適用されるために、コノが使用され(固有名詞は直接指示であるので変項として解釈されず)、ソノは使用できないという予測になるが、これも(20)が予測する通りの結果を生む。

(21) a. ダイアナ元王妃が亡くなりました。\*その／この王妃は世界平和にとっても貢献したのを知ってる？

b. こないだ U2 のコンサートに行ったよ。\*その／このバンドは、やっぱり人気があるね。会場は超満員だったよ。

(22) a. 小学校の帰りに、見るからに怪し気な男が何か得体の知れない物を売っているという事が時々あった。

売っている男の人が、恐らく決して善良なタイプの人間ではないであろうことは子供心にも大体ひと目で見当がついていたし、売っている物だってインチキ臭い物であろう事は予想できていた。だがその男の前で足を止めてしまうのである。どうしてもその男が何を売っているか見たいのである。

(さくらももこ『あのこと』p.8より引用)

b. 私は今日この公園で、この前の陸上記録会の優勝者(の一人)に会うことになっている。その／\*この優勝者(x)はここまで車で来るそうだ。

一方、(22a)では、文脈により先行詞が不定である。「得体の知れない物を売っている怪しい男」という属性を持っている男(x)であれば誰でもいいわけである。また、(22b)においても、「陸上記録会の優勝者」は複数いる(幅跳びの優勝者、100m 走の優勝者・・・)

わけで、そのうちの誰が来るかは不明であるという状況ではソノしか使用できない。これを(22b)を用いて図式化してみよう。

(22) c. その優勝者(x): {x/A, B, C, ....}

つまり、変項 x の変域として集合 {A,B,C,...} が存在する (A,B,C...は、それぞれの種目の優勝者であると仮定する。また、A,B,C....は指示表現であって変項ではない)。その中から誰が来るかは分からないので、変項の x が使用されるのである。

### 3.5.2 置き換え可能な場合

ところで、ソノ／コノが置き換え可能である場合が多く存在する。この場合(20)の予測をもってどのように説明すればよいのだろうか。(22b)を再録したものと、それを少し修正した(22d)を比べてみよう。

(22) b. 私は今日この公園で、この前の陸上記録会の優勝者 (の一人) に会うことになっている。その／\*この優勝者 (x) はここまで車で来るそうだ。

d. 私は今日この公園で、今年の琵琶湖マラソンの優勝者 (\*の一人) と会うことになっている。その／この優勝者はここまで走ってくるそうだ。

(22b)では不可能であったコノの使用が(22d)では突然可能になっている。両者の違いは何か。それは(22b)では文脈から「優勝者」が複数いて、その中の誰か(x)が来るということになるが、(22d)では一般的に言って、「マラソンの優勝者」は一人であるという、我々の世界に関する知識がはたらき、その結果として「優勝者」が唯一的となるというように考えられる。この状況は、先の(22c)における変項の変域が、コンテキストによって唯一的になったものであるというようにみることが出来る。

(22) e. その優勝者(x) → {x/A}

f. この優勝者 → 直接指示 (「この優勝者」=A)

(22ef)は、それぞれ(22d)におけるソノが使用された場合とコノが使用された場合の、名詞句の解釈のされ方を図示したものである。ソノで表現される場合には(18)の本章の定義にしたがって、名詞句は変項として解釈される。しかし、その変項の変域は、前文までの文脈によって唯一的になり、例えば{A}だけが残る。一方、コノで表現される場合には「話し手にとって指示的」に対象物が直接指示され、変項では解釈されない。結果、両者は表面上、あたかも同じものを「指示」しているように感じられるようになる。しかし、実際はソノは、あくまで導入された変項を指示しているだけで、Aという人物そのものを直接「指示」しているのではない\*。

つまり、ソノ／コノが共に使用可能で、しかもそれらを置き換えることで文の意味に差が生じないような場合は、前文の文脈によって変項の変域が唯一的となったために、結果として表面上コノが直接指示する対象を「指示」していると感じられるようになるのである。

ソノ／コノの置き換えが出来る場合は、変項の変域が唯一的であると述べた。しかしこれは、変項の変域が唯一的であれば、必ずソノ／コノの置き換えが出来るということをも主張しているのではないことに注意されたい。上の(22)の例では、マラソンはすでに行われており「優勝者」は唯一的かつ object dependent である。コノの使用には、あくまで object dependent であるかどうかに関わってくるので、たとえ「優勝者」が唯一的になるような文脈であっても、それが object independent であればやはりコノは使用できない。(23)で確認されたい。

(23)a. 今日僕は、こないだの琵琶湖マラソンの優勝者に会うことになってるんだ。僕が

担当している雑誌のコーナーで今度、その/この優勝者を特集するつもりなんだ。

b. 明日の琵琶湖マラソンの後、優勝者に会うことになっていてね。僕が担当している雑誌のコーナーで今度、その/\*この優勝者を特集するつもりなんだ。

---

\*6 本章の狙いは、コ系列指示詞とソ系列指示詞の機能の差異を明らかにすることであるので、現段階では両者の関係については述べないことにする。この仕事にとりかかるためには、両者を同一のモデルの中で扱う必要があるが、これは第六章で本格的に行うことにする。

### 3. 6 変項と複数解釈される名詞句

ソノが変項を導入するという議論は、複数名詞が先行詞である場合の分析にも有効である。例えば、次のような例である。

(24) a. 太郎は多くの羊を飼っている。花子はその/\*この羊にえさをやる。

b. 多くの <sub>x</sub>[x are 羊]

Diesing (1992) の分析にしたがえば、(24a) の先行詞は、意味解釈において (24b) のように数量詞「多くの」に束縛されるような変項を導入する。このことから (24a) の先行詞は、非指示的であり、それを受ける場合にもソノのみが使用されると分析される。

次に (25) のような例を考えてみよう。「羊」は全て複数解釈で読んでいただきたい。

(25) a. 太郎は羊を飼っている。花子はその/\*この羊にえさをやる。

b. 太郎は羊を飼っていて、それを育てて売ることによって生計を立てている。花子はその/\*この羊にえさをやる。

(25a) は一見すると、3.5.2 で分析したように意味の差違はないように感じられるかもしれない。「コノ羊」は直接指示的に「太郎が飼っている羊」を指示するのであるから、object dependent であり、内実の変化があってはならない。つまり、「太郎が飼っている羊」が、例えば {A,B,C,D} であり、そしてそれのみであるという場合である。このような場合、ソノを用いても変項  $x$  の変域は  $\{x\} = \{A,B,C,D\}$  であり、コノが指示するものと同一であるので置き換えが可能であっても不思議はない。

しかし、(25b) のようなコンテキストを考えてみる。この状況では、「太郎が飼っている羊」の内実には常に流動的で、(25a) のような集合を決定することが出来ない。つまり、この場合の「羊」は非指示的であり、したがって変項  $x$  を意味解釈に導入する。そしてこの変項  $x$  の変域は常に流動的である。流動的な集合は object dependent ではないのでコノの使用が不可能になり、内実の変化を変項によって捉えうるソノのみが使用できるようになる。



るのである”（なお、本章の目的はソ系列指示詞とコ系列指示詞の違いを記述することにあるので、議論はできる限り簡潔にした。第六章では再び同じ現象を取りあげ、モデルの中で一般化する）。

### 3. 7 問題となる現象

本章では、文脈指示の一つのタイプである、指定指示の用法のみについて述べてきたので、もう一つのタイプである、代行指示については言及を行わなかった。代行指示とは次のようなものである（2.8 節も参照のこと）。

(26) a. 昨日モスバーガーでシェイクを飲んだが、その／＊この味は良かった。

b. 昨日、大阪シンフォニカーの演奏会に行ったが、その／＊この演奏はたいへん良かった。

---

\*7 堤(1998a)においては、コ系列指示詞とソ系列指示詞の差異に重点をおいて考察したために、両者の関係が明らかにはならなかった。そのことから論者は、コ系列指示詞とソ系列指示詞はともに全く異なったものを指すものと考え、金水・田窪(1992)の、両者が同一のものを指すという考えを否定した。

i) 「コやアを用いることは、{a,b,c,...}を指し示すことであり、ソを用いることは、{a',b',c',...}を指し示すことである。そして結局両者は「同一」なのであるから、対象の同定のためには、どちらを用いてもよいことになる。つまり、どのような場合にコ・アを用い、どのような場合にソを用いるかという選択は、指示方略に

属する問題となる。 (金水・田窪(1992:187)より引用)

次章以降で議論するとおり、ソ系列指示詞の場合は先行詞が指すものと、それに照応する名詞句との間で、指示対象が異なることがあり得る。この点において、堤(1998a)の指摘は正しいものであると考えることもできる。本論では、指されている指示対象が同一か否かは、文脈によって変項がとりうる値が唯一的に決定するか否かという、語用論的な要因に関わるとしているので、条件が整えば同一である場合もあるし、そうでないこともあるということになるだろう。いずれにしても、本章で強調しておきたいことは、両者はその機能に大いなる違いがあるということである。

先行詞をソノ全体ではなくソのみで受けるような場合である。これについても庵(1995a)で観察されていて、ソ系の指示詞は使用できるがコ系は使用できないとされている。この現象は本章の記述のみでは説明ができないものである。第五章で記述的な分析を提示し、第六章でモデルを示した後、この問題について考えることにする。

今ひとつ問題となる現象は、庵(1996a)が「予測裏切り」的意味をもつ用法とした、(27)のような例である。

(27) a. 太郎は朝寝坊で滅多に朝食を食べない。今朝、その／\*この太郎が朝食を食べた。(庵(1996a:31)より引用)

b. 犬はおとなしい動物です。その／\*この犬が人に噛みつくはずはありません。

このような一連の例文においては、直接指示が可能であるはずの固有名詞がコノでは指示できずソノのみが使用できるという現象が起こる。本章の仮説のもとではこのことは説明が不可能で、指定指示／代行指示の問題と同様、モデルを用いて考えなければならない問題である。第六章で議論する。

さらに、(28)のように、先行詞を言い換えた名詞に指示詞がつくような場合にはコ系列指示詞が使用されるという事実がある。(28a)は先行詞が固有名詞であり、直接指示的であるのでコのみが使用されると考えることもできるかもしれないが、(28b)の先行詞は総称名詞であり、このような場合には固有名詞と同様の説明が可能であるかどうかは、総称名詞自体の考察をも含めて議論しなければならないであろう。

(28) a. 私は琵琶湖のほとりに住んでいるが、\*その／この湖には色々な思い出がある。

b. 私は紅茶が好きだ。\*その／この飲み物はいつも疲れを癒してくれる。

### 3. 8 第三章のまとめ

本章では、名詞句が変項として解釈されるか否かという点に注目した、文脈指示のコノ／ソノの観察を試みた。コノをともなった名詞句は、それが指す対象を直接指示し、ソノをともなった名詞句は、変項として解釈されるという仮説を提出し、その妥当性を検討した。ここでの考察はあくまで記述的なものとどめた。本章の目的は両者の機能の違いを

明らかにするというものであったからである。いったん全く別のものとして切り離された両者は、第六章で提示するモデルによってその関係が明らかにされることになる。

最後に、3.2 節において、問題点を指摘した庵(1997)におけるコノの定義について一言述べておく。コノが付与される名詞句が、何らかの意味で、テキスト内での「トピック」を表すという指摘は、庵(1997)以前から散発的に存在し、古くは大野(1978)にはじまり、Yoshimoto(1986)、金水・田窪(1992)もこのように考えていると思われる。

確かに、ソノを用いた場合よりコノを用いた場合の方が、「トピック」を表しているような直感はある。しかし、だからといってコノの機能は「トピック」を表示することであるとは言えないと思うのである。本章の立場からすれば、そのような直感のコノ本来の機能なのではなく、コノが付与された名詞句は「話者にとって指示的」であるために、ソノが付与された名詞句よりは卓立的な効果をもたらし、その結果として「トピック」をあらわしうると考えられるのである。

次章ではさらにソ系列指示詞についての考察を進めていく。ソをともなった名詞句が、変項として解釈されるという仮説によって説明が可能であると思われる現象がいくつか存在する。次章ではこのような現象について、指示詞の構造をも考察対象としながら議論していくことにする。

## 第四章 ソ系列指示詞と変項―「テキスト的意味」を中心に―

### 4. 1 はじめに

第三章では、コ系列指示詞が「話者にとって指示的」な対象を直接指示するのに対して、ソ系列指示詞は、それがともなう名詞句が変項として解釈されるという主張を行った。本章では、この仮説によって説明が可能となる文脈指示のソの用法について考察を進めていく。具体的にはそれは次のような例文に現れるソの用法である。

(1) A: 中間選挙で共和党が勝った。

B: いや、その党／それは民主党だ。 (庵(1995d:632)より引用。判断は筆者)

(2) A: 人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

B: いや、その人工衛星／それは二番目で、最初のはソ連が打ち上げただろう。

(近藤(1990:32)に手を加えた)

(3) a. 1ヶ月前にトム・ヤム・クンを作ってみたけれど、やみつきになってまだ\*そのトム・ヤム・クン／それを食べている。

b. 1ヶ月前に思い切って長年生やしていた髭を剃ったが、今ではまた\*その髭／それをたくわえている。

(1,2)は近藤(1990)で「打ち消し問答」文といわれているものであり、(3)はいわゆる sloppy identity の例である。sloppy identity は、本論では坂原(1989)にしたがい「不完全同一性」という用語を用いることにする。(1,2)においてはソノ N とソレとの言い換えが可能であるのに対して、(3)ではソノ N が言えない。(3a)においては「一ヶ月前に作ったトム・ヤム・クン」をまだ食べているという解釈(この解釈を同一解釈と呼ぼう)はもちろん可能であるが、不完全同一性の解釈、つまり、いったんトム・ヤム・クンを食べるのをやめて、また新たに一ヶ月前のものとは別のトム・ヤム・クンを食べているという解釈のもとではソノ N は使用不可能である。(3b)においてはそれはさらに鮮明で、剃ったはずの髭を生

やすことはできず、ソノ N は使用できなくなっている<sup>\*</sup>。(1-3)の例は、先行詞とそれを承ける名詞句とで指示対象が異なっているという点においては共通しているのにも関わらず、文法性は異なったものとなる。これはなぜか。

また、このように先行詞との指示対象を変えることができるのはソ系列指示詞のみに見られる特徴であり、コ・アではそれはできない。

(4) A: 中間選挙で共和党が勝った。

B: いや、\*あの党 / \*あれは民主党だ。

(5) A: 人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

B: いや、\*この人工衛星 / \*これは二番目で、最初のはソ連が打ち上げただろう。

(6) a. 1ヶ月前にトム・ヤム・クンを作ってみたけれど、やみつきになってまだ\*あのトム・ヤム・クン / \*あれを食べている。

b. 1ヶ月前に思い切って長年生やしていた髭を剃ったが、今ではまた\*この髭 / \*これをたくわえている。

これは、前章での仮説を考えてみれば簡単に説明がつく。コ・アは「話し手にとって指示的」であるために、発話以前からその指示対象が、少なくとも話者の中では確定しておりかつ特定のなくてはならない。ソで指される対象は、変項となるが、変項は変域を有する。前章で、コ／ソで対象が同一となる場合を議論したが、そのためには文脈によってソで指される変項の変域が唯一的になることが必要であった。もし文脈がそのことを保証しなければ、変項であるという特性から指示対象を変えることは当然可能となるのである。だとすると、ソがとりうる変域とはどのようなものであろうか。本章では、このことについて考察していく。議論の中で、指示詞の構造についても考察する。ソがとりうる変域と、指示詞の構造によって(1,2)と(3)とでソノ N とソレの言い換えの可否に差が出るということが説明できるようになる。

---

\*1 この文においても、別の解釈が成立しないわけではない。いわゆる「予測裏切り」的意味の解釈で、「剃って、もう生やさないだろうはずの髭」を生やしているという解釈である。この解釈については第六章で議論する。

#### 4. 2 先行研究

ソノ／ソレの言い換えについては庵(1995d)があるが、そこでのソノ／ソレの言い換えに関する一般化は(7)である。また、坂原(1996)における指示形容詞句に関する言及(8)も同様の指摘だと考えられる。

##### (7) 庵(1995d:634)

ノ形とレ形(及びコ形)は、先行詞が「個体」である時は交換可能だが、そうでないときはレ形(コ形)しか使えない。

##### (8) 坂原(1996:49)

代名詞による照応では、付加された属性は受け継がれることもあればそうでないこともある。しかし、指示形容詞句による照応では、付加された属性は受け継がれなければならない。

両者の主張は、ソレで先行詞を指示する場合は、先行詞と指示対象が異なるものを指しうるが、ソノの場合は、先行詞の指示対象を変更してはならないということであろうと考えられる<sup>\*2</sup>。しかしそうすると前節(1,2)では、ソノ N で指される指示対象は、先行詞のそれとは異なっており彼らに対する反例となる。

---

\*2 庵(1995d)で「個体」と言われているものが何であるかは定義が曖昧である。(i)でソレが指すものは「源氏物語の作者であるの」という補文であると庵は言うが(p.633)、ソレは「源氏物語の作者」を指し得ないという保証はない。

(i) A:源氏物語の作者は清少納言だ。

B:いや、\*その人／それは紫式部だ。

また、(ii)のソレが個体を指示しないと庵は言うが、この記述は恐らくは、先行詞と同一の指示対象を指さないという意味であろう。

(ii) 山田の本と田中のそれとはどっちがよく売れていますか。

((i,ii)ともに庵(1995d:633-4)より引用)

(1)A:中間選挙で共和党が勝った。

B:いや、その党／それは民主党だ。

(2)A:人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

B:いや、その人工衛星／それは二番目で、最初のはソ連が打ち上げただろう。

(2)は庵(1995d)の例であり、庵の判断では「ソノ党」は不自然であるとされている。しかし、筆者が行ったインフォーマントチェックでは、庵の判断同様不自然とする話者が存在する一方で(1,2)ともに自然であるとする話者が多数存在した。(1B)でのソノ党が先行詞と同一の指示対象を指すとする「共和党」を指すことになるが、これは筆者を含め(1)を自然であるとする話者の直感とは反する。また(2A)での「人工衛星」は「人工衛星トイウモノ」と解釈されるのに対し、(2B)では個体解釈がなされており、先行詞と同一の指示対象を持つ場合のみにソノ／ソレの言い換えが可能であるとする庵の一般化に反するものである<sup>\*3</sup>。

#### 4. 3 ソノと「テキスト的意味」

上の問題を考察するために、庵(1995c)で提示されている「テキスト的意味」という概念を導入しよう。

##### (9)テキスト的意味

名詞句が語彙的意味の他に各テキスト毎に持つ意味を「テキスト的意味」と呼ぶ。

(庵(1995c:81)より引用)

---

\*3 いわゆる「予測裏切りの意味」のソノ／ソレも庵(1995d)の一般化への反例となる。先行詞が総称解釈されるものを存在量化解釈ができるソノで指しうるからである(i,iiは三原健一先生(私談)に負っている)。少なくとも先行詞を同一の指示対象であるということとはできないだろう。「予測裏切りの意味」のソノ／ソレについては第六章参照。

i) 犬は本来はおとなしい動物だ。その犬が昨日君にかみついたなんて信じられない。

ii) くじらはほ乳類だ。そのくじらが、卵を産んだそうだ。

いずれにしても、ソノ N も含めて、ソ系列指示詞は先行詞との間に、指示対象の完全な同一性が必ずしも保証されないということである。

(10) 尾道に有名なラーメン屋があると聞いて行ってみたら、その店の前には午後3時という中途半端な時間にも関わらず長蛇の列ができていた。

一般的な言葉を用いて言うと、テキストの中で名詞句が臨時に付与される属性のことを「テキスト的意味」という。(10)では、「尾道にある有名なラーメン屋」という前文で与えられた情報を、ソノが「店」という名詞に付与するということである。ソノの最も基本的な用法は、前文から与えられる属性を全て引き継ぎ、それが付与される名詞句に与えることである。

(11) 昨日実験をしたんだけど、その実験の結果おもしろいことが分かったよ。

(12) 昨日実験をしたんだけど、その結果おもしろいことが分かったよ。

(13) a.  $[\alpha]_{i, \dots}$  ソノ  $[\alpha]_{i, \dots}$

b.  $[\alpha]_{i, \dots}$  ソノ  $[\beta]_{j, \dots}$

c.  $[\alpha]_{i, \dots}$  ソノ  $[\alpha]_{j, \dots}$

d.  $[\alpha]_{i, \dots}$  ソノ  $[\beta]_{i, \dots}$

(11)ではソノが付与される名詞句は、そのままの形で先行詞として前文に存在している。一方(12)では、ソノは前文の中には先行詞を持たない。いずれの場合においてもソノの果たす役割は「テキスト的意味」の付与であることには変わりはない。また(10)のような例では推論によって「ラーメン屋=店」という関係が成立している（つまり $\alpha = \beta$ ）<sup>\*4</sup>。ソノ N が先行詞と照応するということを表記するために、名詞表現（ $\alpha$ 、 $\beta$ ）に指標（ $i, j$ ）を与えるとすると、 $\alpha$ 、 $\beta$ と $i, j$ の論理的な組み合わせは(13)のようになる。このうち(13ad)のように、同一指標が与えられ、先行詞と照応すると解釈されるソノを同定詞のソノと呼

---

\*4 ここで「推論」と言っているのは、テキスト的意味を用いた推論ということではなく、 $\alpha$ 、 $\beta$ の辞書的意味に登録されている意味を用いたものである。(10)の場合であれば「ラーメン屋」と「店」が、この文脈の中で同一の指標が与えられる可能性があるとして推論できるという程度の意味である。



ぶことにしよう<sup>\*5</sup>。ここで暫定的に以下のような仮説を立てる。

(14) if ( $\alpha$ .....ソノ $\alpha$ ..... $\vee$ ( $\alpha$ .....ソノ $\beta$ ..... $\wedge$ 推論により $\alpha = \beta$ )) $\rightarrow$ 二つの $\alpha$  (あるいは $\beta$ )

に同一指標を与えよ (= (13a) か (13d) の解釈を行え)。

(15) ソノにテキスト的意味の最大値を付与せよ。( $I^{\max}$ 、以下  $I^m$ )

(16) テキスト的意味の最大値 ( $I^m$ )

前文までに $\alpha$ に対して与えられた全ての情報。

これは、(14)のような表現が存在する場合、自動的にテキスト的意味の最大値を利用してソノを同定詞解釈せよということである。この仮説は直感的には妥当であると考えられるが、以下の例を考えてみればよい。

(17) A:先日、君と二人で行ったレストランに行ったよ。

B:そのレストランは、.....

(18) A:人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

B:その人工衛星は.....

(17,18)のBの発話において、不完全な部分を補えと言われれば、恐らくは多くの話者が次のような文を考えるだろう。

---

\*5 (12,13b)は庵(1996b)で代行指示と呼ばれているものである。この用法については第五章、第六章を参照されたい。

\*6 ここでの $\alpha$ 、 $\beta$ は、言語外に存在する指示対象を指しているのではないことに注意されたい。ソノ系列指示詞はそのような指示対象を指すのではなく、変項を指すという議論を前節で行ったことを想起されたい。

例えば前章でみた「優勝者」の例では、 $\alpha$ は、言語外に複数いる外延を指すのではなく、「この前の陸上記録会の優勝者」であるという属性をもつに過ぎない。「ソノ優勝者」は、(14,15)の定義により、デフォルトではこれと全く同じ（「この前の陸上記録会の優勝者」）であると解釈されるということである。

(19) B: そのレストランは最近経営難らしいね。

(20) B: その人工衛星は、作るのに膨大なお金と年月がかかったそうだね。

これはまずデフォルトとして(14)の解釈がなされることを示している。これ以外の解釈を行う場合には、デフォルトの操作を一度キャンセルする必要があるため、処理に負担がかかる。

本節では、ソノが(14)のような環境においてはデフォルトとして同定詞として解釈されること、そしてその際にはテキスト的意味の最大値が利用されることをみた。これまでの議論の中ではテキスト的意味の最大値に言及する必要はないかのようなのであるが、次節での議論ではこの条件が必要となる。

#### 4. 4 テキスト的意味の量

再び(17,18)について考えてみよう。(17B,18B)における無標の読みは、先行詞と同一の解釈を得るものであった。

しかし、これらは(21,22)のような談話をつなげることも可能である。

(21) A: 先日、君と二人で行ったレストランに行ったよ。

B: いや、そのレストランは僕たちが先日行ったやつじゃないね。だって、あそこは先月つぶれてもう存在しないんだから。

(22) A: 人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

B: o.k.-? いや、その人工衛星はソ連ので、アメリカのは二番目だったでしょう。

(21,22)では、ソノは先行詞と同一指示解釈を受けておらず、先行詞とは別の指標を与えられている。これは前節での(13c)の状況である。この状況は前節(14)で述べたことからすると明らかに有標である。しかし、(21,22)は多くのインフォーマントによって自然であるとされた。それはなぜか。

(13) a. [ $\alpha$ ]<sub>i</sub>.....ソノ[ $\alpha$ ]<sub>i</sub>.....

c. [ $\alpha$ ]<sub>i</sub>.....ソノ[ $\alpha$ ]<sub>j</sub>.....

前節(14)によって、(21,22)は一旦その表面的な形式から(13a)のように同定詞として解釈される。その際に付与されるテキスト的意味は、(15)によりその最大値をとると考えよう。(21,22)におけるテキスト的意味の最大値( $I^m$ )を用いた解釈はそれぞれ(23,24)のようであるが、これらの解釈は完全に容認できないものとなることは明白である。

(23) A:先日、君と二人で行ったレストランに行ったよ。

B:いや、\*先日君と二人で行ったレストランは僕たちが先日行ったやつじゃないね。だって、あそこは先月つぶれてもう存在しないんだから。

(24) A:人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

B:いや、\*アメリカが最初に打ち上げた人工衛星はソ連ので、アメリカのは二番目だったでしょう。

(14,15)に従えば、(21,22)において最初に計算される解釈は(23,24)のようになる。このことから、庵(1995d)をはじめとして、筆者が行ったインフォーマントチェックにおいても(21,22)を不自然とする話者が存在することが説明される。その説明とはすなわち庵(1995d)、坂原(1996)の言うように、ソノは先行詞と同一指示解釈のみを許容するというものである。したがって彼らの説明は、これらの文を不自然であるとする話者に対しては妥当な説明力を有するものであると考えられる。

しかし、すでに述べたとおり、(21,22)を自然であるとする話者も多く存在するという事実は説明されなければならない。そこで、彼らが(21,22)に対して施した解釈を以下に挙げてみよう。

(25) A:先日、君と二人で行ったレストランに行ったよ。

B:いや、(A が) 行ったレストランは僕たちが先日行ったやつじゃないね。だって、あそこは先月つぶれてもう存在しないんだから。

(26) A:人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

B:o.k.-?いや、最初に打ち上げられた人工衛星はソ連ので、アメリカのは二番目だったでしょう。

ここで(25,26)でのテキストの意味をそれぞれ  $I(25), I(26)$  と表記すると、ミニ談話(25,26)において得られるテキストの意味の最大値( $I^m-(25), I^m-(26)$ と表記する)との間には次のような関係が成立する。

$$(27) I(25) \in I^m-(25)、I(26) \in I^m-(26)$$

(27)は、ソノを同定詞として解釈できなかった場合には、テキストの意味をその最大値( $I^m$ )を利用して後続文に合うように修正することができることを表している。

先述したように坂原(1996)の立場では、指示形容詞においてはテキストの意味は最大値であり、それを変更することは許されない。しかしこの記述はこれまで本節で見えてきている観察とは反するものであり、もし(21,22)が(25,26)のように解釈されるということが正しい観察であるとするならば、ソノにおいてもテキストの意味は( $I^m$ )を基準にして修正を施すことができるとすべきではなかろうか。

(8)坂原(1996:49)

代名詞による照応では、付加された属性は受け継がれることもあればそうでないこともある。しかし、指示形容詞句による照応では、付加された属性は受け継がれなければならない。

そこで、先述の(13-16)に加え、ソノの解釈の条件に(28)を付け加える。

(13)a.  $[\alpha]_i \dots \text{ソノ} [\alpha]_i \dots$

b.  $[\alpha]_i \dots \text{ソノ} [\beta]_j \dots$

c.  $[\alpha]_i \dots \text{ソノ} [\alpha]_j \dots$

d.  $[\alpha]_i \dots \text{ソノ} [\beta]_i \dots$

(14) if ( $\alpha \dots \text{ソノ} \alpha \dots \vee (\alpha \dots \text{ソノ} \beta \dots \wedge \text{推論により } \alpha = \beta)$ )  $\rightarrow$  二つの  $\alpha$  (あるいは  $\beta$ ) に同一指標を与えよ。

(15) ソノにテキストの意味の最大値を付与せよ。

(16) テキストの意味の最大値

前文までに  $\alpha$  に対して与えられた全ての情報。

(28) もし\*(13a)なら、 $I^m$  を修正した任意のテキスト的意味( $I'$ )を作成し、(13c)解釈を行え。(但し、 $I' \in I^m$ )

このような仮定を行うことにより、本章で議論しているようなデータを不自然だと判断する話者が存在する一方で、同じデータを自然だと解釈する話者が少なからず存在するという事実も無理なく説明することが可能になるのである。すなわち、不自然だと判断する話者は(28)の処理を行わず、自然だと判断する話者は(28)の処理を行っていると考えられるのである。(28)を行う話者とそうでない話者がなぜ存在するのかという問題があるが、このように考えることで、文法性判断に関する揺れを説明することが可能になる。

#### 4. 5 ソノとソレ

$I^m$  を修正したテキスト的意味( $I'$ )を利用しても、ソノ N が後続する文とうまく合致しない場合には(29,30)のような不自然な連結が生じる。(29)では  $I^m$ -(29)をどのように修正してもうまく後続文に合致するような  $I'$  が作れない。(30)でも「x はウズラだ」の x を満たすためには x は雷鳥であってはいけないが、「ソノ雷鳥」という表現においては雷鳥であることをキャンセルすることができない。使用できる  $I^m$  を増やしたり、雷鳥であるという属性をキャンセルするような文脈を作ることでソノの使用は自然なものへと近づく(31,32)。

(29) A:人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

B:いや、??-\*その人工衛星／それはソ連が最初だろう

(30) A:僕は昨日雷鳥を見たよ。

B:いや、\*その雷鳥／それはウズラだよ。このあたりには多いんだ。

(31) A:半永久的に使用できる人工衛星はアメリカが最初に打ち上げたんだよね？

B:いや、確か o.k.-?その人工衛星はソ連が最初に打ち上げたはずだ。

(32) A:僕は昨日雷鳥を見たよ。

B:いや、その鳥はウズラだよ。このあたりには多いんだ。

ところでソレを使用した場合においても我々は前節までに議論してきたような処理を行っているのであろうか。つまり、“ $\alpha$ ...ソレ”という連続において“ $\alpha$ ... $\alpha$ ...ソレ”という同

一指標を与える解釈をデフォルトとして行うのであろうか。もしそうであるとするならば、ソレもソノ同様、デフォルトとして同定詞として解釈される可能性があるということである。しかしもしそうであるとする、(29,30)においての両者の判断の差が説明できない<sup>\*7</sup>。

近藤(1990)はソレの指示対象について、一見名詞を指示していると思われる例にも意味的にかなり複雑な内容を持った例が存在すると述べ、「打ち消し的問答」(本章で主に扱っている類の文)と呼ばれるソレを考察し、以下のように述べている。

(33) a. 「ソレ」は前文の述語とそれに関係する補語の中からいくつかを選んで、述語と補語との全体を補文として指示している。

b. 「ソレ」という文脈指示の指示代名詞が指示しているのは、単純な体言であることはむしろまれで、一般には、その状況(文脈)を記述した文それ自体を指しているのではないか。(近藤(1990:33)より引用、下線は筆者)

近藤の、ソレは文そのものを指しうるという考えは卓見である。これは、ソレが先行詞と同一指標を与えられて解釈されるものでは必ずしもないということである。つまり、次のようなことが言えよう。

(34) ソレは同定詞ではない。

(35) ソレに I<sup>m</sup> を付与せよ。

(36) I<sup>m</sup> を修正して I<sup>r</sup> を作成せよ。

(34-36)とソノにおける記述(13-16,28)との違いは、デフォルトでの同定詞としての解釈を義務づけるかそうでないかである。ではなぜソレは同定詞ではないのか、またなぜ近藤(1990)が言うように文を指示することができるのか。この疑問に答えるためにはソレの構造について考える必要がある。

---

\*7 同様に、これまでのソノを使ったデータを不自然と判断する話者にとっては、それらのデータにおいてもソレが使用できるという非対照性が説明できない。

#### 4. 6 ソレの構造

日本語学において指示詞の内部構造について考察したものは筆者の知る限りでは多くなく、林(1983)、庵(1995a)に指定指示と代行指示のソノについての記述がある程度である。生成文法の枠組みでの研究で指示詞を扱ったものに Hoji (1995,1998), Ueyama (1998) 等があり興味深い。その中で、Hoji (1995) でのソコについての構造は(37)のようである。DemP (Demonstrative Phrase) とは、Hoji (1995,1998) で提案されている機能範疇 (functional category) で、名詞句内に生成されて指示詞のコ／ソ／アの部分をその主要部 (head) に持つと考えられている。また筆者は堤(1999)において(38)のような構造を仮定した<sup>\*8</sup>。

(37) [NP [DemP ソ] コ] (Hoji (1995:258) より引用)

(38) [DP ソレ [NP<sub>e</sub>]] (堤(1999:5) より引用)

(39) [NP [DemP ソレ]  $\phi$ ]

両者に共通する直感は、指示詞におけるコ／ソ／アは NP とは別の範疇を形成するというものである。日本語の名詞句が DP (Determiner Phrase; Abney (1985), Fukui (1995) 等参照<sup>\*9</sup>) であるか NP であるかは本論の議論に影響を与えないので議論せず、本論では NP であると仮定しておく。そのうえで、本論では Hoji (1995) の [DemP] を採用し、(39) の構造を採用する。重要な点は、ソレはそれ自体 NP ではなく、音形のないゼロ代名詞 (以下  $\phi$ ) のような実体が NP 主要部に存在すると考える点である。この  $\phi$  はそれ自体では指示対象を持たず、単にソレに名詞性を与える役割をもつと考えよう。本論での言い方をうければ、[DemP ソレ] は単にテキスト的意味を付与されるだけであり、その点においては [DemP ソノ] と変わりはない。[NP [DemP ソレ]  $\phi$ ] として初めて名詞性を帯びるわけであるが、この  $\phi$  が文脈に応じて様々な解釈が可能であるがゆえに、ソレが時として文脈や状況をも指しうると考えるのである。このように考えることで、これまでに議論してきた例がどのように説明

---

\*8 堤(1999)では Chierchia (1993), Reinhart (1998) の議論にヒントを得て(38)の構造を導き出している。堤(1999)の議論は少し詳しく章末に付録として示した。

\*9 Fukui (1995) では、日本語は投射が閉じないとして日本語の名詞句は N' であるとされている。三原(1994:ch.2)も参照されたい。

されるか見てみよう。

(40) 先週末京都で演奏会があったが、それは大盛況だった。

(41) (= (1)) A: 中間選挙で共和党が勝った。

B: いや、その党／それは民主党だ。 (庵(1995d:632)より引用)

(42) A: 人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

B: いや、??-\*その人工衛星／それはソ連が最初だろう。

(35)によりそれぞれのソレに I<sup>m</sup> が付与される。(36)により I<sup>d</sup> が作られるが(40)ではそれは「先週京都であった演奏会」であると考えられる。したがって[NP[DemP 先週京都であった演奏会 (である) ] $\phi$ ]と解釈される。ここで $\phi$ は特別の指示対象を持たず、ソレに名詞性を持たせるものであるので一種の形式名詞のように解釈されると考えると、[NP[DemP 先週京都であった演奏会 (である／という属性をもつ) ]もの]となる。(40)の文脈から、ソレは、同定詞であるかのように解釈される。(42)も同様に考えられ、[NP[DemP 人工衛星を最初に打ち上げた]の]と解釈され、I<sup>m</sup> と[x はソ連が最初だ]という情報から(42B)全体が解釈されることになる。この場合、話者によっては" $\phi$ =国"のように解釈し(42B)を「人工衛星を最初に打ち上げた国はソ連が最初だ」とするかもしれない。しかし $\phi$ をどのように解釈するかは、話者個人の解釈の問題でありソレの文法としての問題ではないであろう。

金水(1999:72)は(43)を示し、ソレが「(言語的な先行文脈からの) 推論によって形成される状況 (括弧内は筆者)」を指示領域とすると述べているが、この推論を可能にしているものが $\phi$ であると本論では考える。「ソノ小麦粉／ソノ牛乳」を使うと、それらが同定詞と解釈され「小麦粉と牛乳の混合物をフライパンに注ぐ」という解釈は生まれない<sup>10</sup>。

「もの／こと」のように指示性の低い名詞を使用すればソノ N でも言い換えが可能な場合もある(44)。

---

\*10 小麦粉と牛乳を別々に混ぜるという解釈は、あり得るかもしれない。

i) 小麦粉と牛乳をよく混ぜ、その小麦粉をフライパンに注ぎ、その牛乳は電子レンジで温めます。



(43)小麦粉と牛乳をよく混ぜ、それ／\*その小麦粉／\*その牛乳／そのものをフライパンに注ぐ。(金水(1999:72)より引用)

(44)花子は太郎と結婚したが、それ／そのことが次郎にはショックだった。

ソレが持つ $\phi$ が状況を指しうると考えることで、いわゆる状況を指すとされる接続詞の類との関連性が捉えられると思われるがこれは今後の課題としたい(指示詞と接続詞については庵(1996a)が詳しい<sup>\*11</sup>)。

(45)A:インターネットはうまく接続できましたか。

B:それが、パスワードが一致しなくて困っているんです。

(46)それにしても暑いですね。

(47)それなのに、それを、それはそうと……

#### 4. 7 不完全同一性

最後に、以上の議論をふまえた上で、本章の最初に挙げた(1-3)を考えてみることにしよう。(1,2)のような打ち消し問答文ではソノ N とソレの言い換えが可能である理由は、これまでの議論から明らかである。また、ソレが(3)において不完全同一性の解釈を許容するのは、 $[NP[DemP \text{ ソレ}] \phi]$ のテキスト的意味( $I'$ )を「トムヤムクン(である)  $\phi$ 」「髭(である)  $\phi$ 」とすることができるためである。ソノ N においては、「トムヤムクン」「髭」が主要部の名詞として顕現しており、これをテキストの意味の中に入れて  $I'$  として使用することができない。そのために、 $I'$  をどのように加工、修正しても結束性を保証できるような解釈を得られないことが、(3)のようなタイプの文においてはソノ N が使用できないことの理由であると考えられるのである。つまり、本章の分析を用いることで不完全同一性の文においてはソノ N が使用できないことが説明できるのである。

(1)A:中間選挙で共和党が勝った。

B:いや、その党／それは民主党だ。

(2)A:人工衛星はアメリカが最初に打ち上げた。

---

\*11 本節での議論に関しては、Postal(1966)の英語の代名詞に関する分析も参照されたい。

B:いや、その人工衛星／それは二番目で、最初のはソ連が打ち上げただろう。

(3) a. 1ヶ月前にトム・ヤム・クンを作ってみたけれど、やみつきになってまだ\*そのトム・ヤム・クン／それを食べている。

b. 1ヶ月前に思い切って長年生やしていた髭を剃ったが、今ではまた\*その髭／それをたくわえている。

#### 4. 8 第四章のまとめ

本章では、ソ系列指示詞をともなった名詞句が、いったん変項として捉えられるという前章までの議論を支持するような現象として、ソ系列指示詞では先行詞と同一のものを指す必要が必ずしもないことを挙げ、その理由をテキスト的意味の量という観点から考察した。いったん変項に置き換えられた名詞句は、先行詞に縛られることなく自由にその指示対象を変えることが、潜在的には可能であるということである。

具体的には、テキスト的意味の量は両者においてその最大値をもとに変化、修正させることができ、このことによってある話者には不自然な文連続も別の話者には自然なものとなる場合があることを指摘した。本章で提示した例文は、インフォーマントによって判断に揺れが生じたものが少なくない。本章ではその文が本来的には自然なのか不自然なのか(つまりどちらのインフォーマントが”正しい”判断をしたか)を議論するよりもむしろ、なぜそのような判断の揺れが生じるのかという観点から議論を進めた。その結果、ソノとソレの両者は、それ自体は[DemP]内の要素であるという点では共通し、それを支配するNP主要部の要素の解釈によって違いが生じるのだという主張を行った。本章の議論が正しいものであるとするとソレ自体はソノ同様指示形容詞とも呼べるべき存在であり、 $\phi$ により指示代名詞的な性格を呈するということになるであろう。

ソ系列指示詞には、コ・アにはない用法がまだある。その一つが代行指示と呼ばれる用法である。次章ではこの現象について考察することにする。

## 付録 堤(1999)について

堤(1999)では、Chierchia(1993), Reinhart(1998)の議論を援用して、以下のような仮説を提出した。彼らは、ペアリスト解釈を許す文とそうでない文を研究しているが、そこで彼らは疑問詞 *who*, *what* などについて興味深い提案をしている。それを端的に示す部分を Chierchia(1993), Reinhart(1998) から引用しておこう。

### Chierchia(1993:192)

i) *Who* and *what* are interpreted as *which person* or *people* and *which thing* or *things*, respectively.

### Reinhart(1998:44) (括弧内は筆者)

ii) Regarding pronominal *wh*-phrases, such as *who*, I assume that their structure is the same (as *which-N* phrases). That is, *who* is a determiner, but the noun position is empty.

興味深い点は、特に Reinhart が明記しているように、*who* を限定詞として扱うという点である。Reinhart(1998) が提示している構造を iii) に示す。

iii) a. [who[e(i)]] (Reinhart(1998):44)

b. [誰[e(i)]]、[どれ[e(i)]]

iv) DP

D	NP
a. <i>who</i>	[e(i)]
b. <i>which</i>	person
c. 誰/どれ	[e(i)]
d. これ/それ/あれ	[e(i)]
e. <i>this/that</i>	book
f. <i>this/that</i>	[e(i)]

この分析の下では、who や what は、which person, which thing にそれぞれ対応すると考えられている (iv) b)。Hoji (1995, 1998) の構造も、基本的にはこれと同じものであろうと考えられる。

## 第五章 指定指示と代行指示

### 5. 1 はじめに

第三章と第四章においては、主に文脈指示用法のソ系列指示詞が変項として解釈されるという仮定を提出し、この分析を支持すると考えられるデータについて考察してきた。本章ではこの分析にとって一見問題となる現象である代行指示と指定指示について考察する。指示詞ソノの研究においては、その構造あるいは機能が異なる二種類のソノが存在すると言われている（林(1972,1983)、田中(1981)、坂原(1991)、庵(1995a,1996a)等）。しかし、天野(1993)、金水(1999)ではこの見解に疑問が投げかけられ、ソノは一種類であるとされている。

第二部の前半では、文脈指示用法に関するモデルを構築するが、このモデルはソ系列指示詞を一種類であると仮定しているので、代行指示と指定指示という二種類が全く異なるものであると考えることはできない。以上のような観点に立ち、本章では先行研究を詳しく議論し、天野(1993)、金水(1999)らと同様に、ソノは一種類であるという結論を主張する。

### 5. 2 先行研究

#### 5.2.1 田中(1981)、林(1972, 1983)

田中(1981)は次の(1,2)のソノをそれぞれ「照応のⅠ類」「照応のⅡ類」として区別した。

- (1) a. 門の前に一人の男が立っていた。その男はわたしが出て行くと近づいてきた。  
b. きのうの午後わたしは会社の近くの喫茶店で一人の男に会った。その男は突然自分  
はわたしと高校で同級だったものと言い出した。
- (2) a. A くんと奥さんとわかれたという話はいろいろの人から聞いて知っていた。たまたま先日、A くに会ったのできいてみたが、その理由はどうしても教えてくれなかった。  
b. この道をまっすぐ行くと郵便局があつて、そのとなりに交番がありますから、そこで聞いてください。(以上、田中(1981:25-6)より引用)

田中(1981:29)は、これらの違いを「Ⅰ類では照応関係が先行詞と照応詞の指示対象が同一であること・・・(中略)・・・によって成立するのに対し、Ⅱ類では先行詞と照応詞が同一指示的であるほかに、聞き手の側にある種の意味論的知識が前提とされるという点にある」としている。これは、先行詞であるものをソノで受け、それと、ソノが付与される名詞とが何らかの意味論的關係によって結びつけられて解釈されるということである。田中自身はこれ以上の記述はしていないが、これは林(1972,1983)と基本的には同様に、『こ／そ』の部分だけが先行詞と照応する」と考える分析であり、二者の違いを構造に求める立場であると考えられる。本章では林(1983)の用語にしたがって、照応のⅠ類を指定指示、照応のⅡ類を代行指示と呼ぶことにする。

彼らは、文脈指示のソノにこれら二種の存在を指摘しているが、そう考えられる根拠をあげている訳ではない。例えば(2b)において「そのとなり」は、彼らが言うようにソノが先行詞「郵便局」と照応すると考えることもできるが、「その郵便局のとなり」から「そのとなり」を派生させる方法を否定することはできないだろう。また、(2a)のようにそもそも先行詞が何であるかがはっきりしない場合も存在する。

また、林(1983)では代行指示の用法はソノにのみ見られるという報告がなされているが、それが何故かという説明はなされていない。この問題の本格的な解決への取り組みは庵(1995a)、金水(1999)を待たなければならなかった(両者の見解は正反対のものである。後述)。

### 5.2.2 坂原(1991)

田中(1981)、林(1972,1983)のように、二種類のソノの差異をそれらの形態的構造に求める分析とは異なり、その違いを意味の観点から分析したものに坂原(1991)がある。坂原は、本論で代行指示と呼んでいるものを「非同一照応指示」とか「連想照応」などと呼び「先行情報が活性化するフレームに暗黙のうちに含まれる要素を指すような用法」(p.66)であるとしている。坂原(1991)がはっきりとそう書いているわけではないが、この見解はソノに二種類が存在するというよりは、ソノが付与される名詞と先行詞との関係によって二つの差異が現れるという分析で、その点では本章の主張に近いものであると考えることができる。

このような分析で問題となるのはしたがって、ソノが付与される名詞のタイプであると

いうことになる。つまり、どのような名詞が連想照応を引き起こすのか、また、そのような名詞は常に連想照応になるのかなどの点を明らかにする必要がある。坂原(1991)は、フランス語と日本語の限定表現を対照的に研究したものである。コノ、アノとソノの使い分けは考慮されていない。しかし、金水(1999)も指摘するように、なぜ、コノ、アノは連想照応に使われ得ないのかという問題点は、解決されなければならない問題である。この問題については、本章を含めた前章までの記述的一般化をモデル化する試みである第六章で論じることにする。

### 5. 3 庵(1995a, 1996b)

前節までに挙げた先行研究からは、代行指示のソノと指定指示のソノは異なった構造を有するものなのか、あるいは単に、それらが付与される名詞の性格によってその振る舞いが異なってくるものなのか、にわかには決定しがたい。前者の立場に立てば、ソノには二種類があるということを認めることになるし、後者の場合ではソノは一種類を立てておきさえすればよいことになる。特に根拠がないのであれば、たとえ振る舞いが異なるように見えていても、それを二つの別のものとして扱うよりは、一つのものがそれが使用される環境によって異なった働きをすることとおいた方が、分析として簡素であるし、好ましい方向であると考えられる。

ソノを二種類に分析し、なおかつその具体的な根拠を明示的に示したものとしては庵(1995a)が最初のものであろう。本節ではそこで示されている根拠を詳細に検討し、それらの観察に反論を加える。結論として、庵の主張となる根拠を否定することになるが、そこから消去法的結論としてソノは一種類であると主張する。

#### 5.3.1 庵の主張

庵(1995a, 1996b)は、指定指示のソノと代行指示のソノをその内部構造が統語的に異なるものであるとした上で、この問題について重要な記述的一般化をいくつか呈示している。それらを簡単にまとめると以下のようなになる。

(3)a. 名詞には、その内部構造が統語的に異なる 1 項名詞と 0 項名詞の二種が存在する。

b. 1 項名詞には代行指示のソノが、0 項名詞には指定指示のソノが付与される。

- c. 代行指示のソノは、その内部構造は [[ソ] ノ] であり、これは [[ソレ] ノ] と等価である (庵(1995a:95))。
- d. (単一文中では) 代行指示のソノはコノに言い換えることができない<sup>\*1</sup>。
- e. 代行指示のソノは埋め草であり、意味的には「空」である。
- f. 代行指示は単一文中で照応を閉じることができるが、指定指示ではこれは不可能である (庵(1995a:94))。

次節以下で、これらの主張について詳しく検討していくことにする。

### 5.3.2 名詞の構造

指定指示と代行指示の違いに、名詞のタイプが関係していることを主張した点は、庵(1995a)の卓見であった。彼は次のような事実に着目し、名詞には必須項を取るものと取らないものがあるとした。その上で、前者を1項名詞、後者を0項名詞と名付けた。

(4) A: 昨日久しぶりに著書を読んだよ。

B1: #ああそうですか。 B2: えっ、誰の？

(5) A: 昨日街で知り合いの作者を見かけたよ。

B1: #ああそうですか。 B2: えっ、何の？

(6) A: 昨日久しぶりに本を読んだよ。

B1: ああそうですか。 B2: えっ、誰の？

(7) A: 昨日街で知り合いの作家を見かけたよ。

B1: ああそうですか。 (以上、庵(1995a:88-9)より引用)

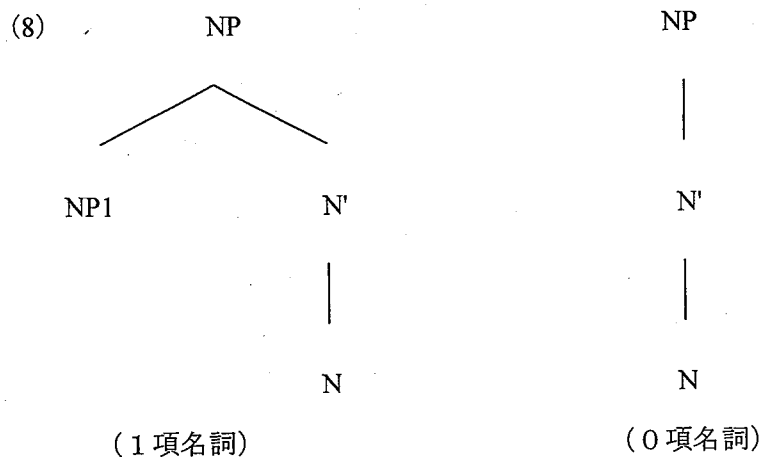
聞き手に何の前提もない状況で、(4A-7A)を発する。すると(4A,5A)に対する答え(4B1,5B1)は不自然な発話であるのに対し、(6A,7A)に対する答え(6B1,7B1)は自然である。この違いは、(4A, 5A)が(4B2, 5B2)のように「誰の／何の？」などという疑問文を必ず誘発する

---

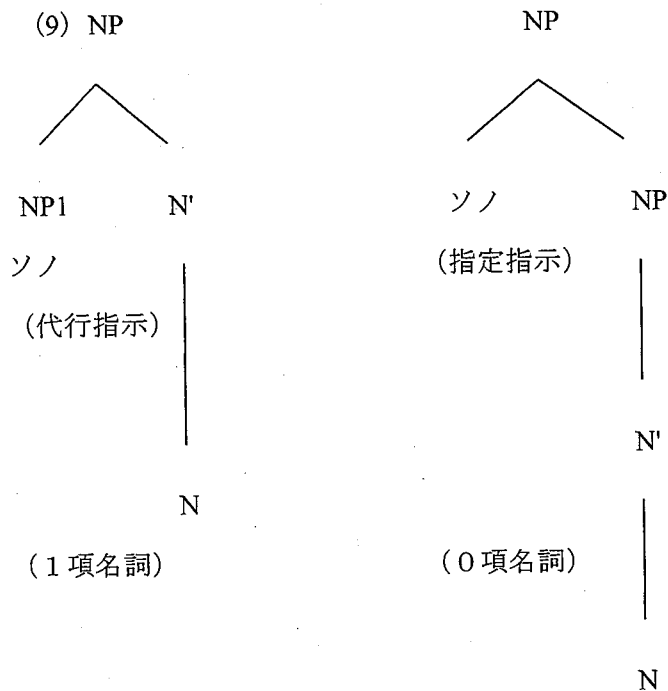
\*1 庵(1995a)は、単一文中でない場合には適当な文脈下においてソノとコノが言い換え可能であるとしているが、本論ではこの問題には立ち入らない。



のに対し、(6A, 7A)はそれが義務的ではないという違いである。つまり、「誰の／何の？」は(4A, 5A)にとってはそれぞれ不可欠な要素(＝必須項)であり、「著者／作者」には、それらが生成するための位置が予め用意されているということである。このことを図式化すると次のようになる((8)は庵(1995a:95, fn.12)から引用)。



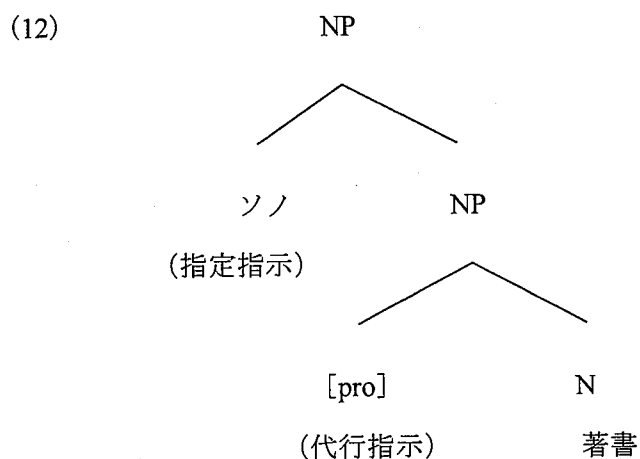
庵(1995a)のこの主張は先述したとおり、名詞には異なるタイプのものが存在するというを示した点では評価されるべきであるが、その差異を統語構造によって説明しようとした点には問題が残ると考えられる。まず、両者がこのような構造になっているとする証拠を、庵は挙げていない。(4-7)の観察は妥当なものであると考えられるが、これが「著者／本」の統語的な差異を反映したものなのか、意味的な差異を反映したものなのかは判断がつかない。仮にこの議論が妥当なものであるとして議論を進めてみよう。庵(1995a)は、1項名詞に付加されるソノは代行指示であり、0項名詞に付加されるソノは指定指示であると考えている。これはつまり、ソノが生成される位置が異なるということに他ならない。なぜなら、1項名詞につくソノは、必須項の代用表現であるので、(8)の NP1 が生成される位置に置かれるはずである。一方、0項名詞につくソノは、NP 内には他の要素が生成される場所がないので、結果的に付加の位置に生成されることになる。



(10) 次郎を殺した犯人が捕まった。その犯人が太郎を殺した。(庵(1995a:91)より引用)

(11) 昨年 B 先生は一冊の本を出版された。その著書の中で先生は、現代の若者像を新しい観点から考察されている。

(10,11)を見てみよう。これらの例でのソノは「ソ」のみが先行詞と照応するという読みは全くないか、あっても非常に弱い(筆者にはこの解釈はできない)。つまり、これらのソノは指定指示のソノであると考えられる。1項名詞であっても、付加詞を生成させることは理論的には可能であるので、指定指示のソノが付加されることは、庵の理論にとっても問題はない。つまり、(11)の構造は次のようになっていると考えることができるのである。



庵にしたがえば、代行指示のソノは単に「著書」が1項名詞であることを表すための埋め草であるため、意味的には「空」である(3e)。したがってこのソノはあってもなくてもよく、(12)のようにゼロ形式であっても構わない。しかし問題は、このソノはあってもよいという点である。庵の説にしたがえば、指定指示のソノと代行指示のソノは別の要素で、したがって生成される位置も異なっているので、(12)のように別の位置に生成され、しかも代行指示のソノはあってもなくてもよいので(13)のように言うことができるはずであるという誤った予測をしてしまうことになる。

(13) \*そのその犯人 / \*そのその著書

このような問題が生じるのは、名詞のタイプの違いを統語構造に求めたことが原因であると考えられる。名詞の構造は基本的には全て同じであり、その意味的差異によってある名詞句がその名詞句に対する項のように振る舞うと考えるのが妥当であろうし、ソノの生成位置を二つ仮定することによる誤った予測をすることも避けることができる。

以上、本節では庵(1995a)の主張である(3)のうち、(3ab)に対する反論を行った。次節では(3e)の、代行指示のソノは意味を持たないという記述について検討する。

### 5.3.3 代行指示のソノとテキストの意味

庵(1995a)によると、代行指示のソノには意味はない。庵(1995a)からの引用を見てみよう。

「1項名詞は結合のための「手」を持っていると述べた。これを換言すれば名詞句の構造自体が結束性を保証しているのである。このことから代行指示で用いられる「その」(厳密には「そのの」の「それ」)は意味的には「空」であり、その名詞が項を持っていることをマークする機能だけを持つ埋め草(filler)だと考えられる(cf.Halliday&Hasan(1976))。』

(庵(1995a:95)より引用)

また、庵(1996b)では、これと同様の主張が前章でも議論した「テキストの意味」の観点からなされている。庵(1996b)は、指定指示には「テキストの意味」を認めているが、代

行指示のソノには「テキスト的意味」を引き継ぐ機能がないと述べている。このことの帰結として、(14)のような代行指示のソノは、ゼロ形式にしても意味を変えないことが説明できるとしている。

(14)a.この論文には、その／ $\phi$ 結論がない。

b.先日の実験は、その／ $\phi$ 結果が学会で大きな注目を集めた。

しかし、この主張にも理論的、経験的両面からの問題点がある。理論的な問題点とは、前節で議論したとおり0項／1項名詞の区別が統語構造によるものではないという点である。もし、前節の指摘が正しいものであるとするならば、この名詞の構造を根拠にした説明は、その力を失うことになる。一方、経験的な面での問題点とは、天野(1993)が挙げる以下のようなデータである。

(15)ウェ이터が笑っている。??その妻／彼の妻は、12月24日が誕生日だ。

(16)ウェ이터が大口を開けて笑っている。その妻はもっと豪快に笑っている。

(以上、天野(1993:761)より引用)

(17)あの中学生はスポーツが得意だ。ところで、あそこで??その弟／彼の弟が笑っている。

(18)あの中学生はスポーツが得意だ。その弟は国体選手だ。

(15,17)は(16,18)に比べてソノの使用が許容されにくい。これは、前文からの情報をソノが引き継いでしまったために、例えば(15)では「笑っているウェ이터の妻は12月24日が誕生日だ」のような解釈を強要することになり、不自然な文連結になることがその原因であると考えられる<sup>\*2</sup>。「妻／弟」は、庵(1995a)の立場をとるとすれば1項名詞ということになるであろうから、それに付与されるソノは代行指示のソノであるはずで、したが

---

\*2 もちろん前章で述べたような操作を施して、テキスト的意味を変更することができるが、これらの例ではI' (テキスト的意味I''を操作したもの) を後文にふさわしいものすることができないのである。

って「テキスト的意味」は付与されないはずである。このように考えるならば(15,17)の不自然さに対して別の説明を与えなければならないはずであるが、その仕事は庵(1995a,1996b)ではなされていない。

ただ、庵(1995a:98, fn.17)において彼は次のような例を挙げ、「その責任」には前文からの情報を引き継ぐ解釈と、そうではなくて「自分たちの／自らの責任」と置き換えられるような解釈が存在することを指摘し、天野(1993)の、(全ての)ソノは前文の情報を引き継ぐという主張は強すぎるとしている。

(19) 田中[角栄]の政治支配は、田中のバラまく金を受け取り、田中を政治的に支えた田中派と呼ばれる政治集団なしに存在しえなかったのだから、彼らも、日本の政治をかくも腐敗させたことに対する責任を共有しているはずである。・・・(中略)・・・  
今こそ旧田中派の人々は、その責任を明らかにすることを持って、角栄的なものを日本の政治から最終的に葬る第一歩としてほしい。

(立花隆「旧田中派は反省と自己反省をせよ」朝日新聞朝刊 1993.12.17、庵(1995a:98, fn.17 より引用、中略は筆者)

(19)のような文脈において、庵が言う代行指示の解釈は筆者には困難である。これは前節の(10,11)と並行なものであるが、もし庵が言うように、二つの解釈が可能であるとするならば、指定指示のソノと代行指示のソノは全く別の先行詞(指定指示のソノは前段落の情報、代行指示のソノは「旧田中派の人々」)を持つということになる。

このように考えたとするなら、二つのソノは別の先行詞を別々に指しているのだから、それらを同時に指して(つまり先行詞を二つ持たせて)「そのその責任」ということができるはずであるが、これは前節の議論の通り不可能である<sup>\*3</sup>。また、後者の解釈(=「自分た

---

\*3 5.3.5 節での議論の先取りになるが、庵(1995a)は非単一文における1項名詞のソ(レ)ノのソレは、指定指示でも代行指示でもいいと述べ、前者の場合には前文の情報を引き継ぐ解釈が、後者の場合には引き継がない解釈が出てくると述べている。このように考えることは不可能ではないが、代行指示の[[ソ]ノ]が[[ソレ]ノ]とは等価ではないと考えられる(5.3.5 節)ので、やはりこの可能性も排除されとすべきである。

ちの責任」) が仮に可能であるとしても、ソノが先行文脈を全く引き継いでいないと考える根拠はない。つまり、天野(1993)に対する庵(1995a)の反論は(15-18)への説明がなされていない点、ソノを二種類設定すると前節での議論のような問題が生じる点、先行文脈が引き継がれていないとする根拠が挙げられていない点において不備があると考えられるのである。

本章では、指定指示のソノと代行指示のソノは同一のものであり、その機能は前文からの情報を引き継ぐものであると仮定する。このように考えるならば(15,17)の不自然さは前述したとおりの理由により簡単に説明することが可能になる。

以上の議論により(3e)の庵の主張も妥当ではないと考えられるのである。

#### 5.3.4 ソノの構造

前節冒頭の庵(1995a)からの引用にもあるとおり、彼は指定指示のソノと代行指示のソノは名詞の構造によって生成位置が異なるものであると考えただけではなく、そもそもソノの構造自体も異なっているのだと考えた。つまり、代行指示の[[ソ]ノ]は、[[ソレ]ノ]と等価なものであるとしたのである。

しかし、これには金水(1999)が次のような反例を挙げている。

- (20) 象の心臓はとても大きい。一方鼠にも心臓はあるが、その/\*そのφ (=鼠の心臓) はとても小さい。(金水(1999:81)より引用)

また、庵自身が挙げている(21)を見てみよう。

(21) a. 太郎とその家族

b. チョムスキーとその著書

((21a)は庵(1995:99)より引用)

c. \*太郎とこの家族

d. \*チョムスキーとこの著書

- (22) 「もし、埋め草の「それ」が(運用論的制約のために)「人」を指せないとする(21ab)のような例が説明できなくなる。」

(庵(1995:99)より引用、例文番号は本章のものに合わせた)

庵は、代行指示のソノは「そのの>その」と主張し、(21ab)が文法的で、(21cd)がそうでないのは、コノは「これの>この」という派生過程で、レ系指示詞で人を承けることによる運用論的問題（近藤(1992)）が生じるためであるとしている(p.99)。

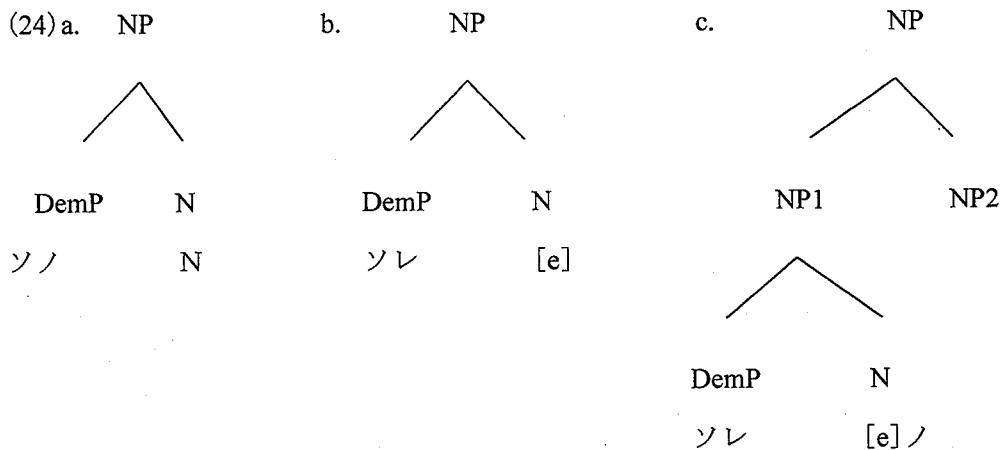
しかし、これは奇妙な記述であると言わざるを得ない。(21ab)のソノが「ソレノ」からの派生であるとする(23)と言えるはずであるが、これは決して言えない。

(23) a.\*太郎とそのの家族

b.\*チョムスキーとそのの著書

すなわち、(21ab)は(23ab)から派生したというようには決して考えられず、両者はもともと別の構造を有していると考えなければならないのである。

前章において、レ系指示詞とノ系指示詞について考察し、その構造を提示した。ここに再掲しておこう。



詳しい議論は堤(1999,2001)および前章に譲るが、ソレはそれ自体は名詞句(NP)ではなく指示詞句(DemP; Hoji(1995))であり、音声形式を持たない名詞化辞[e]によってその名詞性が保証されるとした。この構造は、指定指示も代行指示も同様であるとする、ソノとソレノの構造は異なっていることになり、本節で見てきたデータとも合致する。ソノとソレノの違いは、先行詞を複数形にすると指定指示も代行指示もソレノとすることができるのに、指定指示のソノはソレノに置き換えができない等、さらに深く考察しなければならない問題があるが、少なくとも、庵(1995)が主張するようにソノとソレノが同じ構造を

有していると考えることには無理があるということと言えると思う。

(25)a.昨日 CD を買いましたが、その／\*その CD はとても聞きやすかったです。

b.昨日 CD を 3 枚買いましたが、?その／それらの CD はとても聞きやすかったです。

(26)a.昨日実験をしましたが、その／その結果おもしろいことが判明した。

b.昨日実験を 3 つしましたが、その／それらの結果おもしろいことが判明した。

以上、本節では庵の主張である (3c) にも問題があることを指摘した。

### 5.3.5 ここまでのまとめ

本節でのここまでの議論により以下の点が明らかになった。

(27)a.名詞に構造が異なる 1 項名詞／0 項名詞の区別は必要ではない。

b.代行指示のソノにも、指定指示と同様前文からの情報を引き継ぐ機能がある。

c.代行指示のソノの構造はソレノとは等価ではない。

これまでの議論により (3abce) の庵の主張に反論を加えたことになる。(3)を再掲しておこう。

(3)a.名詞には、その内部構造が統語的に異なる 1 項名詞と 0 項名詞の二種が存在する。

b.1 項名詞には代行指示のソノが、0 項名詞には指定指示のソノが付与される。

c.代行指示のソノは、その内部構造は [[ソ] ノ] であり、これは [[ソレ] ノ] と等価である。

d. (単一文中では) 代行指示のソノはコノに言い換えることができない。

e.代行指示のソノは埋め草であり、意味的には「空」である。

f.代行指示は単一文中で照応を閉じることができるが、指定指示ではこれは不可能である。

(3d)「(単一文中では) 代行指示のソノはコノに言い換えることができない」については、この指摘は本論でも正しいものであると仮定しているが、庵(1995a)ではその理由をコノ



には代行指示の用法がないとして説明しているだけで、根本的な解決案が呈示されているわけではない。次節以降では、指定指示と代行指示のソノを同一であると考えた上で、庵の指摘への代替案を提出する。なぜ代行指示のコノが存在しないのかという問題について明示的な解答を示すことができるのは、この分析の結果をモデルに取り込む第六章においてである。また、(3f)であるが、筆者にはこれが指定指示と代行指示を区別する決定的な根拠だとは考えられない。これは単に、ソノが付与される名詞句が、次節以降で議論する、飽和名詞句であるか非飽和名詞句であるかの違いによって二次的に生じる現象であると考えられるのである。

## 5. 4 代替案

### 5.4.1 はじめに

前節までの議論により、指定指示のソノと代行指示のソノを考える際には名詞の構造による分析は適切ではないこと、代行指示のソノがソレノからの派生であるという分析が不適切であり、このことを根拠に指定指示と代行指示を区別することは必ずしも必要ではないことを見てきた。本節以降では、これらの問題に対する代替案を提出する。結論を先取りすると、前者の問題に対しては、指定指示と代行指示を分けているのは名詞の意味論的な差異であると考え。後者に対する答えとしては、ソノ自体に二つの用法があるわけではなく、ソノが付与される名詞の意味論的性格によって、一見二つの用法があるように感じられるだけであると考え。

### 5.4.2 飽和名詞句と非飽和名詞句

庵(1995a)の1項名詞／0項名詞と似たような名詞句の区別を行っているのが、西山(1990)の飽和名詞句と非飽和名詞句である。1項名詞／0項名詞の別が統語論的な構造の差異であるのに対し、飽和名詞句／非飽和名詞句のそれは意味論的なものである。

庵(1995a)のような仮定を行った場合には、1項名詞に付くソノは必ず代行指示であるという誤った予測をしてしまうことは前節で見た。庵(1995a:91)によると、(28)の「犯人」は1項名詞であるが、(28)での先行詞は一体何なのであるか、筆者には分からない。むしろ、この場合のソノは、前文の情報を引き継いだ指定指示の用法であると解釈できる。(29)も同様に、「その著書」のソノが「B 先生の」を先行詞にするという解釈は筆者にはできないか、できたとしても非常に弱く、指定指示の解釈「去年 B 先生が出版された著書」

の方がはるかに強い。このような問題が生じるのは、1項名詞／0項名詞という概念が統語論的なものであるということによると考えられる。「犯人／著者」などの（庵(1995a)が1項名詞と呼ぶ）名詞句は、ある文脈では指定指示のソノをとり、また別の文脈では代行指示のソノをとるというように、意味論的な要因でその性質を変えるのである。西山(1990)の分析は、正にこの点に注目した分析であるといえることができる。

(28(=10))次郎を殺した犯人が捕まった。その犯人が太郎を殺した。(庵(1995:91))

(29(=11))昨年 B 先生は一冊の本を出版された。その著書の中で先生は、現代の若者像を新しい観点から考察されている。

西山(1990)は、非飽和名詞句を「それだけでは外延が定まらない名詞（西山(1990:177)）」と定義し、次のような「X が Y の Z だ」という文から「Y は、X が Z だ」という文を派生することができる場合、Z は非飽和名詞句であると論じている。なお、(32b)はソノがなければややすわりが悪いが、ソノを付加すれば完璧な文となる。

(30)a.村上が、この小説の作者だ。

b.この小説は、村上が（その）作者だ。

(31)a.村上が、岡山県出身の作家だ。

b.\*岡山県出身は、村上が（\*その）作家だ。（以上西山(1990:177)、判断は筆者）

(32)a.『生成文法と比較統語論』が、三原先生の著書だ。

b.三原先生は、『生成文法と比較統語論』が（その）著書だ。

(33)a.『生成文法と比較統語論』が、三原先生の本だ。

b.\*三原先生は、『生成文法と比較統語論』が（\*その）本だ。

また、庵(1995a)の「そうですかテスト」も、飽和名詞句と非飽和名詞句を区別するテストとして用いることができるだろう（「そうですかテスト」によって、名詞のタイプに少なくとも二種類あるということは分かるが、それが統語論的な差異なのかどうかは分からないという議論は5.3.2節で行った）。

(34) A:昨日作者に会ったよ。

B:#あ、そう。／え、何の？

(35) A:昨日作家に会ったよ。

B:あ、そう。

(36) A:昨日著書を読んだよ。

B:#あ、そう。／え、誰の？

(37) A:昨日本を読んだよ。

B:あ、そう。

先に、「犯人／著書」などの名詞は、ある文脈では指定指示のソノをとり、別の文脈では代行指示のソノをとると述べた。これは非飽和名詞の共通の特徴であるようである。

(38) a.この作品は、その作者が不明だ。

b.「くるみ割り人形」の作者はとても偉大な人なんだ。その作者が、盗作なんかするはずはないじゃないか！

(39) a.太郎とその弟

b.太郎君の弟は10年前はとても小さくて華奢でした。その弟が、今では太郎君よりも30 cmも背が高くなっているんですよ。

(38b,39b)のソノは庵(1996a)の「予測裏切りの意味」を持つソノであるので、指定指示のソノである\*4。

西山(1990)の仮説に従えば、この現象の説明はいたって容易である。西山は「非飽和名

---

\*4 庵(1996a)は i) のような例文に現れるソノは予測裏切りの意味を持っており、この意味はソノに「テキスト的意味」が義務的に付与されるような環境に現れると述べている。

i) 袁さんは欠席はおろか遅刻すらしない。その袁さんが、今日は連絡もなく来ていない。

5.3.3 節でも議論したことであるが、庵は代行指示には「テキスト的意味」の付与はなされないと考えているので、(38b,39b)のソノは1項名詞に付与され、かつ指定指示として解釈されるソノである。

詞句であっても、パラミターの値がコンテキストから適切に補充されていれば、いわば飽和名詞句と同じ状態になる」(西山(1990:178-9))と述べている。このことを(40)を用いて説明しよう。(40)での「作曲者」は、(30)の「作者」と同様、非飽和名詞句であると考えられる。(40)における「ペテルブルグでこのバレエを初演した」は、「作曲者」の外延を決定するのに直接的な役割を果たしているのではない。この仕事をしているのはあくまで前文脈中に存在する「くるみ割り人形」であって、この存在によって「作曲者」は飽和名詞句化していると考えられるのである。

(40)本日演奏されるのは「くるみ割り人形」です。ペテルブルグでこのバレエを初演した作曲者は、この曲を死の一年前に書いています。(堤(1998b:17))

(41)a.チャイコフスキーが「くるみ割り人形」の作曲者だ。

b.「くるみ割り人形」は、チャイコフスキーが(その)作曲者だ。

(42)a.チャイコフスキーが19世紀最大の作曲家だ。

b.\*19世紀最大は、チャイコフスキーが(その)作曲家だ。

(43)A:昨日作曲者に会ったよ。

B1:#あ、そう。 B2:えっ、何の？

(44)A:昨日作曲家に会ったよ。

B:あ、そう。

つまり、(28,29,38b,39b)において、非飽和名詞句に付与されるソノが指定指示と解釈できるのは、前文の情報によって当該名詞句が飽和名詞句化していることによると考えられる。このことを図式化すると次のようになる。

(45)a.ソノ＋非飽和名詞句→代行指示と解釈される

b.ソノ＋飽和名詞句→指定指示と解釈される。

本論では、飽和名詞句化した非飽和名詞句は、もはや飽和名詞句であると考え。したがってその場合には(45b)が適用されることになる。(45)により、庵(1995a)が1項名詞と呼ぶものに指定指示のソノが付与されるという、庵の枠組みでの説明が困難であった現象が説明できるようになる。また、(45)はもう一つの重要な主張を行っている。それは、代行

指示と解釈されるか、指定指示と解釈されるかはソノが付与される名詞句の飽和性によるという点である。このことをさらに突きつめて考えると、指定指示とか代行指示という区別はソノに備わった意味ではなく、単にどのような名詞句にソノが付与されるかによって変わる「見せかけの」意味であるということである。

5.3.4 節において、代行指示のソノにも前文からの情報を引き継ぐ機能があることを見た。このことと、本節での議論を合わせると、本論での主張は(46)のようになる。

(46) ソノは1種類しかなく、その機能は前文からの情報を引き継ぐというものである。

従来の研究において、二種類に区別されてきたのは、それが付与される名詞の飽和性によるものである。

## 5. 5 第五章のまとめ—金水(1999)をふまえながら—

本章では、指定指示と代行指示について、ソ系列指示詞をこのような二種に区別することは、便宜上有益ではあるが、それはソ系列指示詞に根本的に機能、性質の異なる二種類のもが存在するのではないということを主張してきた。本章での議論が正しい方向に向かうものであるとするならば、少なくとも文脈指示のソ系列指示詞においては、ソに対して一つの意味を与え、それにより全ての現象を説明しようとするのが望ましいということになる。そして、本論が本章までで目指してきた方向は正にこれであり、ソ系列指示詞が持つ意味とは、それが付与される名詞（ソレの場合はそれ自体）を変項として解釈せよというものであるということになる。

代行指示に関して残る仕事は、なぜ代行指示<sup>\*5</sup>のソノはコノに言い換えることができないのかという問題に答えを出すことである。この問題については、次章以降でこれまでの記述を統一的に説明し、なおかつ現場指示用法をも取り込み得るようなモデルを提示する。これにより、この問題は解決することになる。本章の最後に、この問題について論じた先行研究として金水(1999)を取りあげて、次章以降の準備としたい。

金水(1999:81-2)は、代行指示用法のソノについて触れ、本章と同様、指定指示と代行

---

\*5 「代行指示／指定指示」という用語は、ソノを1種類であると主張した以上使用すべきではないが、以降も便宜上用いることにする。

指示という区別は「見せかけ」のものであると結論づけている。そして、(47)のように代行指示でコノ、アノが使えない理由について下のように述べている。

(47)a.会員はその家族とともに宿泊することができる。(代行指示可能)

b.会員はこの家族とともに宿泊することができる。(代行指示不可能)

c.会員はあの家族とともに宿泊することができる。(代行指示不可能)

(金水(1999:80)より引用)

「本稿の立場では、代行指示用法も他の指示詞表現と同様に、「N(そ)」のようなカテゴリ一関数に対する領域パラメータの適用として統一的に捉える。すなわち、「その」がマークする領域と関連づけられたカテゴリNである対象を値とするのである。「会員とその家族」であれば、目下の発話において焦点化された言語的文脈に「家族」が関連づけられるわけで、実質的には「家族(会員)」という関数適用が成立するのである。ではなぜコ・アではそれができないか。直示用法の場合、「領域と関連づける」というのは、基本的に「領域内に指示対象が存在する」ということを表す。間接直示や種類読みのように、真の指示対象が眼前にない場合でも、指示対象を代表するもの、指示対象の“現れ”が眼前にあるという点で事情は同じである。つまり、「この家族」「あの家族」等の表現では、現在焦点化されている領域に指示される「家族」またはその代表物が存在しなければならないのである。ところがソ系列の文脈照応の場合は、領域とは言語的文脈によってのみ形成されるので、そもそも対象の存在は前提されていない。それ故に、「その」が指定する文脈に「そのN」の指示対象が無くても、「そのN」という表現それ自体によって、Nである対象を新規導入できるのである。」

(金水(1999:80)より引用、下線は筆者)

次章以降で議論することになるが、非飽和名詞句に(ある種の)関数が適用されるという点では筆者も同意見である。問題は、筆者が下線を付した箇所である。筆者が誤解をしていなければ、これは「その領域に指示される対象または代表物が存在すればコノ、アノが使用できる」ということになる。しかしこれは(48,49)が示すように明らかに誤りであるといわざるを得ない。

(48) この会員は\*あの／\*この／その家族とともに宿泊することができる。

(49) ジャンの万年筆を見ろ。\*あの／\*この／そのペン先が壊れている。

(坂原(1991:67)より引用)

「家族」や「ペン先」は(48,49)が焦点化している領域内にある要素で、かつ現場にもその対象物があるような文脈内で用いられているにも関わらず、やはりコノ、アノは使用できない。これは、金水のいう関数適用が、何らかの理由によってコ系列指示詞やア系列指示詞には適用されず、ソ系列指示詞にのみ適用されるということを示していると考えられるのである。

このような金水が直面する問題も、次章で提示するモデルによって難なく解決することが可能となるのである。

## 第一部のまとめ

第一部では、主に文脈指示のソ系列指示詞について考察した。まず第三章において、ソ系列指示詞およびそれをともなった名詞句は、意味解釈の過程においていったん変項に置きかえられるという仮説を提出し、このことによって説明できる基本的な現象をいくつか観察していった。一方、コ系列指示詞についていえば、それはその対象が「話者にとって指示的」であることを表示するものであると考えることができる。これらのコとソの特徴付けにより、先行詞が固有名詞である場合には基本的にはソ系列指示詞が使用できないこと、コ／ソ両者が使用可能である場合には、その使用条件は語用論的なものや話者の主観的判断に委ねられること、先行詞が数量詞を伴うなどして、何らかの意味において「話者にとって指示的」にならない場合にはソのみが使用されることが明らかになった。

次に第四章において、「打ち消し問答」文に注目し、ソ系列指示詞では先行詞と照応する名詞句が、先行詞とは別のものである場合が存在することを指摘し、第三章での仮説に基づいてこのことを説明しようと試みた。その結果、そのようなソ系列指示詞の特徴は、やはりそれが意味解釈の過程で変項として解釈されと考えることによって説明が可能であり、同時に話者は、「テキストの意味」の量を後文の文脈に合うようにうまく調節しながら文解釈処理を行っているということが明らかになった。また、ソノとソレの違いについても触れ、その違いは、それらの構造的差異によるものであると仮定した。そのように仮定することによって、「不完全同一性」解釈は、ソレでは可能であるがソノ N では不可能であることの理由を説明した。

第五章では、ソ系列指示詞のもう一つの重要な現象であるところの、指定指示と代行指示について考察した。先行研究で二種類に分けられることが多かった指定指示と代行指示であるが、本章ではそれを区別することによって生じる不都合を指摘した。また、名詞句の中にはその内部構造が異なる 0 項名詞と 1 項名詞が存在し、それらの違いと指定指示、代行指示の付与可能性が連動するという庵(1995a)の主張には疑わしい点があり、我々は意論的な観点をもってこの現象を考える必要があることを述べた。

本論での最終目標は、以上のような記述的一般化を理論化することにある。指示詞の使い分けを見事に予測する理論の構築は、言語の本質を解き明かす上で非常に重要である。また、そのようにして構築される理論は、指示詞の大きな二用法である現場指示の用法と



文脈指示の用法の両者を同時に、かつ統一的に説明するものでなければならない。このような視点のもと、第二部においては指示詞のモデルを構築することを試みる。第六章においては、本章までの記述をもとに、主に文脈指示において有効であると考えられるモデルを提示する。次に第七章、第八章において、それらを現場指示の指示詞の用法に援用することにより、モデルの補強を行う。そのようにして最終的に提示されるモデルは、指示詞の全体像を網羅的に、かつ非常に単純な説明装置を用いることにより捉えることができるものである。

## **第二部**

### **モデル構築の部**

## 第六章 文脈指示におけるモデル構築

### ～コ／ソの使い分けについて～

#### 6.1 残されている問題

第一部において、文脈指示における指示詞の様々な用法についての記述的一般化を行った。その中で、コ系列指示詞は、その名詞句が「話者にとって指示的」であることを表し、ソ系列指示詞はその名詞句が意味解釈される段階でいったん変項に置きかえられるという仮説を提出した（第三章）。また、ソ系列指示詞には、他の指示詞（ア／コ）にはない用法がいくつか存在した。先行詞と別の対象を指す用法および不完全同一性の用法（第四章）、指定指示と代行指示の用法（第五章）などである。

前者（第四章で扱った現象）については、ソ系列指示詞が変項を導入するという仮説から考えれば、変項が「テキスト的意味」の量を変更できる範囲を変域として、当該名詞句が指す対象を、先行詞とは異なったものに変えることができることは説明が可能である。それでは、後者（第五章で扱った現象）についてはどうか。第五章においては、指定指示と代行指示の二用法は先行研究で言われてきているような、二種類を別個に立てる必要はなく、一種類のソが意味論的に対立する二種の名詞句のいずれに付与されるかによって、見かけ上二種類に見えるのだと主張した。しかし、この記述が正しいとしても、代行指示においてコ系列指示詞が使用できないという庵(1995a)の主張は無視できない。彼が指定指示と代行指示の二種を（統語的に）別個のものであると立てる根拠の一つが、両者の間でのコ系列指示詞の使用可能性であるからである（5.3.1を参照）。

(1)a.この論文には、その／\*この結論がない。

b.「浅蜷の闇売屋の小母はんは、軍の機密じゃ機密じゃ云うて、特殊学校のようなところじゃと云うだけでがんしてなあ。げに、あの辺は汽車で通っても、汽車の窓を閉じてありますけんなあ。防<sup>ぼうちよう</sup>謀が嚴重ですけんなあ」

「そのくせ、汽車の便所の窓は、明けひろげですからね」と禿げ頭の炊事主任が云った。

「防謀防謀と云って、見てくれだけの防謀じゃないですか。形式だけで、本式にその／??この気持ちがない証拠です」（井伏:149-50 から引用加筆。下線は筆者）

指定指示と代行指示を同一のものであると主張するならば、(1)のような現象には、庵とは別の立場からの説明が必要である。また、第一部で行ってきた主張の中で考えるのであれば、ソノは変項に置きかえられるがコノはそうではないということから説明が可能であるかを探るのが望ましい。同じことは、庵(1996a)が「予測裏切りの意味」を表す用法として論じている次のような例にも当てはまる。

(2) a. 太郎は朝寝坊でめったに朝ごはんを食べない。今朝、その／\*この太郎が朝ごはんを食べた。  
(庵(1996a:34)より引用、体裁は本論のものに合わせた)

b. のぞみは結婚して10年、徹に愛され続けてきた。その／\*この徹を裏切って、彼女は外国人と恋仲になり逃亡してしまった。

このような一連のデータでも、代行指示の場合と同様にソは使えるがコは使用できない。このことも説明されるべきである。

また、「話者にとって指示的」であるということと、名詞句が変項を導入するということとは、そもそもどのような関係にあるのであろうか。第一部では、コ／ソそれぞれの特徴を詳細に洗い出すことが目的であったので、この問いに答えることはあえてしてこなかった。理論化を目指すのであれば、両者を一つの枠組みの中で述べる必要があるであろう。

さらに、現場指示と文脈指示の関係はどのようなものであろうか。本論の主張にしたがえば、ソは変項を導入するのであるから、非指示的である。ところが、現場指示に現れるソ系列指示詞は直感的には現場にあるものを指すわけであるので指示的であってしかるべきである。このことをどのように考えるかも問題となろう。

また、第一部では取り扱わなかったア系列指示詞についても論じることが必要である。いわゆる文脈指示のアの用法とか「観念指示」の用法と呼ばれ、本論 2.3 節や金水(1999)で記憶指示と呼ばれる用法と、現場指示における用法との間にはどのような関係が存在しているのであろうか。また、真の文脈指示(庵(1995b)では「狭義の文脈指示」)ではアが使用できないといわれるが、これに対して根本的な答えを与えることは可能であろうか。

(3) (後楽園の入り口の) 左側にはもっていたチケットを見せる場所がある。\*あそこから1メートルくらい行くと、4つの印鑑(=スタンプ)が置かれた50センチの机がある。  
(岡山大学文学部留学生の作文より引用、括弧内は筆者)

以上のような問題を解決していくことが第二部の目的である。そのために本章では、まず第一部でまとめた文脈指示についてのモデルを構築し、それを用いて再び前章までに観察したデータを説明する。次に第七章、第八章ではこの理論を現場指示の用法に拡張することを試みる。まず第七章において現場指示におけるソ系列指示詞について考察し、第八章ではア系列指示詞について議論を深めていく。これらの結果、最終的に構築される理論は、前章までに観察してきたデータをくまなく説明するだけではなく、本節であげた、未解決の問題に対しても明解な説明を与えてくれるものであることを明らかにする。

次節では、指示詞の理論として近年最も有力視されている金水・田窪(1990)、田窪・金水(1996)などによる談話管理理論について概観する。

## 6. 2 談話管理理論

### 6.2.1 理論の概観

指示詞における最近の研究の中で最も重要なものに金水・田窪(1990)、田窪・金水(1996)などで提示されている談話管理理論<sup>\*1</sup>によるものがある。田窪・金水(1996)で提示されている理論の大きな特徴として次の二点が挙げられよう。

(4)a.「聞き手の知識」という概念を排除した理論である。

b.複数の心的領域を設定する理論である。

まず(4a)から見ていこう。(4a)については、既に 2.6.1 節において詳細な議論を行った。簡単に見直していくと、久野(1973)が提示した(5)には経験的、理論的な問題が存在し、その問題は理論の中に「聞き手の知識」を含んでしまったことにあるというものであった。(7,8)は、久野の(5)によって説明することができない(以下、例文は 2.6.1 から再掲のものである)。

---

\*1 談話管理理論の詳細については金水・田窪の論文の他、三藤(1999)を参照されたい。

(5) アー系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソー系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

(6) 話し手：昨日、山田さんに会いました。あの／\*その人いつも元気ですね。

聞き手：本当にそうですね。 (以上、久野(1973:185-6)から引用)

(7) 僕は大阪で山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくといいよ。

(8) 今日神田で火事があったよ。あの／\*その火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。 (以上、黒田(1979:101)に加筆)

理論的な問題としては Clark & Marshall(1981)の「相互知識のパラドックス」というものであった。詳しくは 2.6.1 を参照されたい。

以上のことから、田窪・金水(1996)は「聞き手知識に関する原則」を主張したのであった。

#### (9) 聞き手知識に関する原則

言語形式の使用法の記述は、その中に聞き手の知識の想定を含んではいけない。

(田窪・金水(1996:62)より引用)

次に(4b)についてであるが、これも 2.9 節で詳しく議論したのでそちらを参照されたいが、簡単に振り返っておくと、談話管理理論ではメンタル・スペース理論(Fauconnier(1985))を基に、話者の頭の中に複数の心的領域を設定する。指示詞はその領域に登録された要素を探索する指令であると捉えられている。それぞれの領域は(10)のようなものである。

#### (10) 直接経験領域 (D-領域)

長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。直接的指示が可能。

#### 間接経験領域 (I-領域)

まだ検証されていない情報（推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報）とリンクされる。記述などにより間接的に指示される。

（田窪・金水(1996:66)より引用）

田窪・金水(1996:66)によると両者の区別は、「基本的には、属性による絞り込みなどによらず直接指示できる対象（現場にあるもの、記憶の中にあり過去のエピソード内の対象であるのか）、その対話内で初めて呈示され、属性が対話内でのみ設定されているような対象」の区別である。このように考えた上でア系列とソ系列それぞれの指示詞について(11)のような定義をする。そして、これらの語の使用の際に現れる、話し手の聞き手の知識への配慮は、すべて語用論的な計算の効果によると考える（これと似た記述は堀口(1978)にも見られる。2.6.1 節に引用した）。

(11) a. ア系列指示詞は、D-領域を検索範囲として、指示対象を検索せよという標識である。

b. ソ系列指示詞は、I-領域を検索範囲として、指示対象を検索せよという標識である。

この仮説により、久野(1973)の一般化では説明ができないうとして黒田(1979)が挙げた(7)や(12)等の例も説明することが可能になる。(7)でもし「ソノ火事」と言えば、それは「今日神田であった火事」という、談話内でのみ設定された属性しか利用できず、これのみでは後文の「人が何人も死んだ」という結論を導くことが不可能であるのに対し、「アノ火事」と言えば、それは話者が直接に経験した火事を指しており、したがって「今日神田であった火事」という属性以上の属性を利用することができ、後文の結論を導くことができるのである。また、(12)のような仮定的な対象は当然 D-領域には存在し得ないのでア系列指示詞では指し得ない。

(12) もし電車がとまっていたら、\*あれ／それに乗ってください。

（田窪・金水(2000:278)注 6)より引用、下線は筆者）

以上、簡単に談話管理理論の特徴を二点見てきた。筆者もこの二点は基本的には正しいものであると考えており、指示詞研究の中での最も重要な発見の一つであったと思う。したがって本論でもこの二点については田窪・金水に従うことにする。しかし、D-領域、I-領域それぞれの中の対象は一体どのような特徴を持っているのか、(10)の定義は果たして正しいものなのか、次節ではこの点について考察を進めていくことにする。

### 6.2.2 談話管理理論の問題点

田窪・金水(2000)の注 6)において彼らは、前節で紹介したソ系列指示詞の特徴付けがある種の束縛的解釈を許すことも説明すると述べている。

(13) トヨタと日産がどちらもその顧問弁護士を解雇した。

(14) 論文を書いたどの学生もそれを学会誌に送った。

(以上、田窪・金水(2000:278 注 6)より引用)

確かにこれらの例においてア系列指示詞を使用することは不可能である。筆者の解釈が間違っていなければ、基本的に談話の中で呈示されるものがソ系列で指示され、現場、記憶の中の直接指示できる要素とリンクできないものはア系列では指せないというのが彼らの説明である。しかし、(13,14)が D-領域に存在しないということがどのように保証されるのか、彼らの記述からでは定かではないように思う。例えば(13,14)に類するような例文で、かつ話者がソ系列指示詞でしか指せない対象を直接経験として知っているということを明示するような文脈を与えた例においても、やはりコ／ア系列の指示詞は使用が不可能である。

(15) 私の知っている、ロバを飼っている全ての農夫がその／\*この／\*あのロバを叩いていた。

(16) どの国も、その／\*この／\*あの国の国旗を持って入場したのを見た。

(17) 太郎はたくさんの羊を飼っている。私は、彼がその／\*この／\*あの羊に毎朝えさをやるのを知っている。



これらの例は全て、話者が直接に経験したことを述べている（前節の「火事」の例と同様に）わけであるからそれらの指示対象は D-領域に存在しているはずであり、ア系列指示詞によって指示が可能であるはずである。にもかかわらず事実上ソ系列指示詞の使用しか認められない<sup>\*2</sup>。

そもそも、「直接経験した」とか「記憶の中にあり過去のエピソード内の対象」とはどういったものなのであろうか。どこまで経験すれば直接経験したことになるのか、定義が曖昧なところである。たとえば(18B2)は、直接経験もしていなければ当然記憶の中にも存在しないのでアノが使用できないのは問題ない。しかし(18B1)は、例えばテレビ等でその映画の CM は見たが、その詳しい内容は映画を見ていないので当然知らないという状況でもアノが使用できる。さらに、CM やチラシなどの映像的な情報がなくても「ハムナプトラ」について友人等からそのような映画が今上映中だという情報を聞いて知っていさえすればアノが使用可能になる。この場合、田窪・金水(1996)にしたがえば、CM を見たといったことで直接経験になるというように説明しなければならないであろう。

(18) A: ハムナプトラ 2 見た？

B1: いや、あの／？その映画はまだ見てない。

B2: いや、\*あの／その映画は知らないな。

---

\*2 6.2.3 節で、庵(1997)の議論を見るが「予測裏切りの意味」も談話管理理論の問題点となろう。また、6.4.2 節では、談話管理理論における知識に関する説明に対して検討を加えるが、先取りして言うと、一部の九州方言などでは、聞き手は、直接に知り得た対象ではなく、話者から聞いたのみの対象に対してア系列指示詞を使用することができ、この現象も問題となろう。また、同じく 6.4.2 節で議論される次のような昔話では、そもそも「おじいさん」は現実の世界に存在しえないために、文脈のみによる情報しかなく、にもかかわらずコノが使用できる理由は説明されなければならないだろう。(6.3.2 および 6.4.2 節で詳しく議論する)

i) 昔々、あるところにおじいさんがすんでいました。この／そのおじいさんは山へ柴刈りに行きました。

もし、彼らの理論に問題があるとすれば、それは経験という概念の定義であり、このことを更に考えていくと、経験ということによって、指示される対象が存在する二つの領域を分割することにあるのではないかという考えに行き着く。これらの考察から、本論では経験という概念を考慮しない指示詞の理論を提案するが、その仕事に取りかかる前に、文脈指示を取り扱いかつ談話管理理論とは異なった観点からの考察である庵(1997)を見ておかなければならない。

### 6.2.3 庵(1997)

庵(1997)は、現場指示における談話管理理論の正当性を認めた上で、いわゆる文脈指示の指示詞においてはこの理論がうまく働かない例があることを示し、文脈指示の指示詞には、現場指示のそれとは異なった理論が必要であることを主張した。(19)が、庵が挙げる談話管理理論が扱えない文脈指示の指示詞の例である。

(19) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その（／\*この）順子が今は他の男の子供を二人も産んでいる。(庵(1997:21)より引用)

(19)においては「順子」は文の中で明らかに卓越性(saliency)を持っていると考えられる。談話管理理論にしたがえば、「近称のコは明らかに文脈指示においては有標」(金水・田窪(1990:104))となり、それならば(19)でコノが使えると予測することになるというのが庵の見解である。この見解が妥当かどうかはここでの議論の興味を中心ではないが、庵(1997)に挙げられているこの類の一連の例(庵はこれを「予測裏切りの意味」を持つとしている。(庵(1996a,1997.ch.7))) が、談話管理理論にとっての反例になるという指摘は正しい。前節での本論での言い方にしたがえば、「順子」は固有名詞であり、かつ(19)の話者が仮に順子を直接知っている(つまり、D-領域に存在する要素として捉える)としても、コノの使用は不可能で、ソノのみが使用できるという現象を、談話管理理論では扱うことができないということになる。ここでもやはり問題は、コ(ア)とソが指す領域を「経験」という概念で分割したことに問題があると考えられる。

さて、庵(1997)における談話管理理論への代替案は、ソ系列指示詞とコ系列指示詞に対して、それぞれ異なった観点からの意味を与えるというものであった。

(20)「この」はテキスト送信者が先行詞をテキストのトピックとの関連性という観点から捉えていることを示すマーカーである。

(21)「その」はテキスト送信者が先行詞を定情報名詞句へのテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである。(以上、庵(1997:61)より引用)

これらの定義の中には、談話管理理論では言及されている、対象に対する話者の知識という概念はない。かわりに話者が、そのテキストの中でその対象をどのように捉えているかという概念が導入されている。これらを用いて彼は(22)でコノが使用できない理由を、「テキスト的意味の付与が義務的な文脈ではソノしか使用できない(p.59)」としているが、なぜテキスト的意味の付与が義務的になれば自動的にコノが使用できなくなるのかは不明である((19)において「順子」はトピックでもある点に注意)。庵はこの点に気がついていて、後に「潜在的には」コでもソでも捉えることが可能ではあるが、(19)は「先行詞を定情報名詞句へのテキスト的意味の付与という観点から捉えることが義務的な文脈」であるのでソノの使用が義務的になると言いかえている。しかし、この言い換えは結局問題の解決にはなっておらず、なぜ、片方が義務的になればもう片方の使用が不可能になるのか定かではない。

庵(1997)が直面するこの問題は、筆者の考えではソとコを全く別の観点から捉えようとするところから生じるものである。談話管理理論における直接経験／間接経験のみならず、これまでの先行研究では佐久間(1951)の人称区分説、三上(1970)の楕円的対立／円的対立、久野(1973)の相互知識からの説明等を考えてみても、指示詞の違いを、ある同一の平面上で捉えようとしたものが多い。直感的にも、コ系列指示詞(およびア系列指示詞)とソ系列指示詞は同一の平面上で対立していると捉えるのが妥当であり、庵(1997)における(20,21)の仮説には懐疑的にならざるを得ない。また、庵(1997)の大前提として、現場指示と文脈指示では全く異なる理論を用意しなければならないというものがあるが、果たしてこの仮説が経験的にどれほど実証可能性のあるものなのか疑わしい。幼児や非日本語母語話者の言語習得という観点からも、現場指示と文脈指示は何らかの形で関係があると考えの方が妥当であると言えよう(2.10節における議論も参照のこと)。

以上本節では、最近の指示詞理論の主流となりつつある談話管理理論を概観し、問題点があるとすれば、それは「経験」という概念の曖昧さと、それを理論に持ち込むことから生じるという議論を展開した。次に庵(1997)の文脈指示の理論に考察を進め、彼の理論に

においても問題点が生じるということ、それはコ系列指示詞、ソ系列指示詞を別の平面で捉えようとするところに原因があるのではないかと考えた。次節ではこれらのことを踏まえ、指示詞を同一平面上で捉えながらも、「経験」という概念を取り入れない形での理論を考える。

## 6. 3 モデル化

### 6.3.1 本論におけるモデル

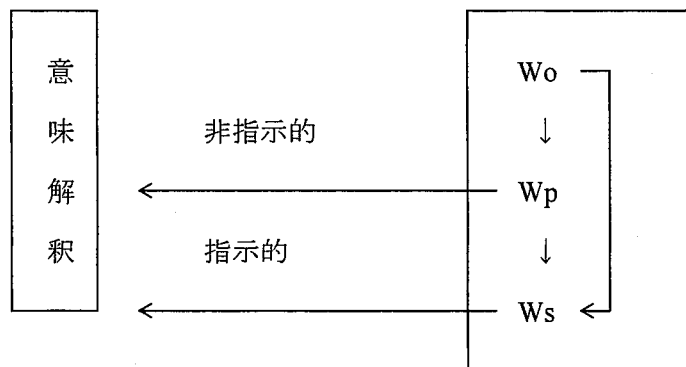
名詞の指示対象とはいかなるものであるか。この問題については形式意味論的考察、メンタルスペース理論(Fauconnier(1985))的考察等々、様々な議論があり、本論でその一つ一つに詳細な議論を加える余裕はないし、またそれは本論の目的でもない。先述したように、筆者は金水・田窪(1990)、田窪・金水(1996,2000)の、二つの心的領域を設定するという点に関しては賛意を表する。したがって、名詞の指示対象は外的世界に存在するものではなく、それを話者が話者の心の中で捉えたものであるということになる。既に述べたことであるが、高橋(1956)は、我々を取り巻く外的世界を「場面」、我々が心の中に作り上げる世界を「場」と呼び、「言語体系に組み入れられるものは「場」であって「場面」ではない」とした。この立場に立つと、我々が名詞句を用いて指示を行うということは、「場」の中に存在する対象を指すということであると考えられる(2.9 節の高橋(1956)からの引用も参照のこと)。

さて、「場」の中に二つの(心的)世界を設け、それぞれ  $W_s, W_p$  と呼ぶことにする。また、高橋(1956)の「場面」に相当する外的世界を  $W_o$  とする。

#### (22) $W_s, W_p$

- a.  $W_s$  は話者が外界や文脈から構築する世界である。( $\therefore W_s \neq W_o$ )
- b.  $W_p$  は  $W_s$  と  $W_o$  との間中間的な存在(interface)である。
- c.  $W_p$  内の要素を介して  $W_s$  内の要素を指示することを間接指示といい、 $W_p$  内の要素を介さずに  $W_s$  内の要素を指示することを直接指示という。
- d.  $W_p$  内の要素は全て変項である。 $W_s$  内の要素は全て変項ではない。
- e. 意味解釈は、 $W_s, W_p$  内の要素のいずれかを用いてなされる。
- f.  $W_s$  内から意味解釈に選び出される要素を指示的、 $W_p$  内から選び出される要素を非指示的と呼ぶ。

(23)



基本的なアイデアは、名詞を指示する場合に大きく分けると (i)  $Wo$  から直接  $Ws$  へ登録される、(ii)  $Wo$  から  $Wp$  へ登録された後  $Ws$  へ登録される、(iii)  $Wo$  から  $Wp$  に登録されるが  $Ws$  への登録が拒否される、という3つのパターンがあるということである。 $Wp$  においては、名詞句は全ていったん変項として解釈されよう (Kamp (1981), Heim (1982))。つまり (ii) では、名詞句をいったん変項 ( $x, y$  など) に置きかえ、その後に  $Ws$  内に存在する要素として指示するという手続きをとる。(i, ii) のように  $Ws$  の要素を通して解釈する場合は、それは話者にとってそれが何であるかが特定できる対象である。その名詞句の対象を、変項に置きかえる必要なくその対象を直接的に解釈できるという意味において、(i) が最も我々の言語処理能力に負担がかからない方略であると言える。また、後述するが (iii) の方略は、ある意味論的な制約の結果 (つまり、何らかの意味的、文脈的状况が  $Wp \rightarrow Ws$  を阻止するような場合)、最終的な手段としてとられるものであると考える。

では、簡単な例を見ることで、このモデルを説明することにしよう。

(24) こないだ久しぶりに太郎に会いましたが、彼はちょっと見ただけでは分からないくらいに老け込んでいました。

(25) あるところにおじいさんが住んでいました。彼は山に柴刈りに行きました。

(26)  $\exists x$ [おじいさん( $x$ )]

固有名詞「太郎」は、基本的には厳格な指定表現 (rigid designator, (Kripke (1972))) であるのでこのモデルでは  $Wp$  を介さずに  $Ws$  にその指示対象が登録される。それに対して不定

名詞「おじいさん」は、Kamp(1981), Heim(1982)にしたがえば(26)のように変項を用いて表記される。Wp は、その対象が変項として存在する世界であるので、(25)では Wp を介して Ws へ「おじいさん」の指示対象が登録されることになる。前者を直接指示、後者を間接指示ということにするのである。

### 6.3.2 第三章の再検討

第三章では、ソ系列指示詞は「非指示的」であり、コ系列指示詞は「話者にとって指示的」と主張した。両者の定義を 3.3.2 から引用する。

(27) ある名詞句( $\alpha$ )が世界の対象物を直接指示するとき、その名詞句を指示的であるといい、意味解釈において変項を導入するとき、その名詞句を非指示的であるという。

(3.3.2 節より引用)

ソ系列指示詞が変項として解釈されるということは本論を通しての主張であり、第一部の議論によってその妥当性を検討してきた。また、6.2.2 節で議論した(13,14)におけるソノの解釈が、いわゆる束縛変項解釈を受けることから直感的に理解されよう。この主張に対するさらなる議論は次節以降で詳しく行うことにする。

(27)の問題点は、「世界の対象物を直接指示する」という点にある。第三章では、世界という概念が曖昧に使用されているが、それは本章での外的世界(Wo)に相当するものであると考えられる。しかしこのモデルでは、実際の世界に存在しない対象物は決してコノで指示されないということになってしまう。この予測は明らかに誤っている。

(28) あるところにおじいさんが住んでいました。この／そのおじいさんは山へ柴刈りに行きました。

(28)は昔話などの語り始めによくあるものであるが、コノ／ソノどちらを用いても自然である。しかしだからといって、コノを用いた場合に話者が実際の世界に存在する「おじいさん」を直接に指示したと考えるのはあまりに不自然で奇妙である。

では本章のモデルではいかにして(28)の問題が解決されるのか考えてみよう。これまでの議論を表にすると(29)のようになる。

(29)

$W_o \rightarrow W_s$	直接指示	指示的
$W_o \rightarrow W_p \rightarrow W_s$	間接指示 <sup>*3</sup>	
$W_o \rightarrow W_p$		非指示的

第三章では、コノは指示的でありソノは非指示的であるとした。本章でもこの考えを引き継ぎ、コノとソノの違いを記述する。

(30) a. コノは  $W_s$  に登録された対象を指す。

b. ソノは  $W_p$  に登録された対象を指す。

(30)により(28)が説明できる。(28)の「おじいさん」は、(25)での議論同様に  $W_p$  を介して  $W_s$  に登録される。 $W_s$  は、話者が外的世界や文脈から構築する世界(=(22a))であるので、ここに実存しない対象が登録されることは本モデルでは一切問題がない<sup>\*4</sup>。「おじいさん」は  $W_p$  を介して  $W_s$  に登録されているので、当然  $W_p$  にも  $W_s$  の対象に対応する対象が(変項を介した形で)登録されている。したがって(30)によってコノ／ソノどちらでも指すことができる。

---

\*3  $W_o \rightarrow W_p$  で、 $W_s$  への登録が拒否される場合には、(非指示的なので)間接指示すら成立しないと考えられるかもしれない。しかし本論では「直接／間接指示」の区別は単に  $W_p$  を介して指示がなされるかどうかという違いとして捉えているので、定義上非指示的なものも間接指示であるとして考える。

\*4 メンタル・スペース理論のように「むかしむかし」をスペース導入表現と見て架空の外的世界  $W_{om}$  を構築し、その後に  $W_{om}$  から  $W_p$  への登録を考えてもよいと思う。

(29)の3タイプは、コノ（アノ）／ソノの言い換えについて次のような明解な予測をする。第三章で議論しているデータを見てみれば、この予測は正しいものであることが分かる。以下、順にデータを見てみることにしよう。

- (31) a. (直接指示∧指示的) →コノ／\*ソノ
- b. (間接指示∧指示的) →コノ／ソノ
- c. (間接指示∧非指示的) →\*コノ／ソノ

## 6. 4 データの分析

### 6.4.1 コノ／\*ソノ

Wp を介さずに、直接 Ws に指示対象が登録されるものには、その典型として固有名詞がある（6.3.1 節の議論も参照）<sup>5</sup>。固有名詞は厳格な指定表現であるので変項を導入する必要はなく、したがって Wp にその指示対象が登録されない<sup>6</sup>。

- (32) a. ダイアナ元王妃が亡くなりました。この／\*その王妃は世界平和にとっても貢献したのを知ってる？
- b. こないだ U2 のコンサートに行ったよ。この／\*そのバンドは、やっぱり人気があるね。会場は超満員だったよ。

---

\*5 本章以降では第三章以降用いてきた「話し手にとって指示的」であるという表現は用いない。しかし、その精神は本章以降で構築されていくモデルにおいて、Ws という形で反映されていることに注意されたい。本モデルはあくまで、話者の心的領域に関するモデルであるので、Ws が指示的であると定義された以上、それは必然的に「話者にとって指示的」であるのである。また、このようにコノ／ソノの定義を一つのモデルの中に存在する二つの心的世界であると捉えることにより、両者の関係をより統一的に説明しようとしているのである。

\*6 固有名詞は「基本的には」Wp を介さずに直接指示が可能なかただけであって、固有名詞であれば必ず Wp を介さないと主張しているのではない。ある環境では、固有名詞でさえ Wp を介して解釈されなければならない場合もある。この現象については後述する（6.4.3.2, 6.4.3.3 節）。



ここで二点指摘しておかなければならないことがある。それは特に(32a)において、ソノの使用が完全に容認できないわけではなく、?-??という判断をする話者が存在する点である。これは恐らく(32a)の後文の内容と関係しているように思われる。(32a)の後文は「～を知ってる?」と、あたかも聞き手がダイアナ元王妃を知らない可能性を話者が想定しているような文になっている。(32b)のように「やっぱり」などを使用して、そのような解釈がなされる可能性をキャンセルすることでソノの使用はほぼ不可能になる。

(33)ダイアナ元王妃が亡くなりました。この／\*その王妃はやっぱり歴史に残る偉大な人物だったよね”。

つまり、(32a)でソノが容認不可能でないと判断する話者は、固有名詞であるはずの「ダイアナ元王妃」を、何らかの方法で Wp に登録し、そこに存在する対象をソノで指していると考えられる(コノ／ソノが自由に言い換えられる場合どちらが選ばれるかについては 6.4.2 節で詳述する)。ではその何らかの方法とは何か。それは「ダイアナ元王妃」を「ダイアナ元王妃トイウ人」のように再解釈するというものであろう。田窪(1989)によれば「トイウ」は固有名詞を不定名詞化する働きがある。これは本論の見方に則して言えば、本来 Ws に直接登録されるはずの固有名詞を、言語手段を使うことによって強制的に Wp を介する解釈を行わせる方略であると考えられる。Wp に対象が登録されてさえいればその対象をソノで指すことは可能である。

---

\*7 individual level の要素は Ws に登録されるとすれば、i) も説明が可能である(これは、筆者が堤(2002a)を執筆した際、『言語研究』の査読者からいただいた指摘による)。

i) a. 私は紅茶が好きだ。この／\*その飲物はいつも疲れを癒してくれる。

b. こないだ飛行機で旅行したんだけど、どうもこの／\*その乗り物は好きになれないね。

総称名詞と固有名詞句には様々な共通点があるが、このことをもって総称名詞を Ws に登録するという根拠にすることはできない。今後、両者の関係を考察する必要があるだろう。

(34) アクティバという会社が東証一部に上場したよ。この／その会社は、ここ数年で急に規模を大きくしてきているんだ。

もう一点指摘しておかなければならないのは、Hoji (1995) で議論されている次の文の文法性判断についてである。

(35) a.\* (トヨタが) アリゾナ工場さえ<sup>1</sup>がそこを推薦した (んです)。

b. (トヨタが) アリゾナ工場<sup>1</sup>がそこを推薦した (んです)。

((Hoji (1995:260) より引用。判断は Hoji (1995))

彼は Reinhart (1983:Ch.7) に従い、束縛理論は束縛変項解釈される名詞句にのみ適用されるとしている。この仮説に従って彼は (35ab) の判断の違いを (35a) は「さえ」により先行詞が束縛変項解釈され、束縛理論 B によって非文になるのに対し、(35b) は先行詞が固有名詞で束縛変項解釈されないために束縛理論によって何らの制約も受けず、同一指標解釈 (coreference) が成立するとしている。

Hoji (1995) は formal dependency という概念を導入し、指示詞を含んだ文を統語論の観点から考察した示唆に富む研究であるが、ここでその詳細について検討することは本論の目的ではない。しかし、筆者が納得できないのは (35ab) の文法性判断そのものなのである。彼の議論が成立するためには (35ab) の文法性判断は重要であるが、筆者には (35b) も (35a) 同様非文であるように思えるのである。筆者が事前に行ったインフォーマントチェックにおいては、ほぼ全員が (35ab) の文法性に顕著な差は認められず、いずれもかなり低い容認性を示すとした。

この点についてもう少しばかり詳細にデータを検討してみよう。次の例を見られたい。

(36) トヨタ<sup>1</sup>に電話してそこに修理させよう\*。

(37) a. 後樂園<sup>1</sup>に行ってそこで弁当を食べよう。

b. モナリザ<sup>1</sup>を盗んでそれを売り飛ばそう。

---

\*8 (36) は『言語研究』の査読者の指摘による。また、以下の議論は同じ査読者からの指摘によるところが多い。

(36,37)ではソコ／ツレが、固有名詞「トヨタ、後樂園、モナリザ」を受けているように見え、本論の議論とは矛盾する。(36)に関しては、これを不自然であるとする話者が、筆者を含めなお存在することは報告しておく必要があるが、(37)にいたっては恐らく全ての日本語母語話者が自然な文だと判断するであろう。それでは次の例はどうか。

(38) a. あいつ<sup>1</sup>を呼んできて、そいつ<sub>1</sub>にやらせてみるか？

b. \*太郎<sup>1</sup>を呼んできて、そいつ<sub>1</sub>にやらせてみるか？

c. \*あー、太郎がいた。あいつ<sup>1</sup>を呼んできてそいつ<sub>1</sub>にやらせてみるか？

((38a)は三上(1955:179)より引用)

(38a)は三上(1955)の有名な例であるが、これとて完全に自然であるとする話者はむしろ少ないようである。問題なのは(38bc)である。これらは完全に不自然であろう。もし(38a)の容認性よりも(38bc)のそれの方が悪いという、本論のこの観察が正しいとするならば、(ア系／コ系)指示代名詞の類と固有名詞との質的な差が問題になるが、これは現段階では議論することができない。だとしても、(38bc)が不自然で、(36,37)が自然であるということと言える。これはなぜか。

一つの記述的な可能性としてはソレ／ソコでは先行詞との照応が可能であるが、ソイツではそれが不可能であるというものである。これは概ね妥当なものであるが、次のような例を説明することができない((39)と(40b)は『言語研究』の査読者からの指摘による)。

(39) モナリザ<sup>1</sup>を盗んで、そいつ<sub>1</sub>を売り飛ばそう。

つまり、ソイツにおいては(38)のように、先行詞が人である場合には先行詞との照応が不可能で、(39)のように、先行詞が物であれば照応が可能となるということである。このように、ソレ／ソコと、物を先行詞とするソイツにおいては固有名詞との照応が可能なのに對して、人と照応するソイツではそれが不可能なのはなぜか。

この問題を解く鍵は近藤(2000)に見いだすことができる。近藤(2000)は、ソレの指示対象について詳細に検討し、ソレは「名詞を指しているのではなく、補文構造を指している」(p.549)と述べている。近藤(2000)が、全てのソレについて補文構造を指していると考え

ているかどうかは判断しがたいが、第四章では、近藤の分析を理論的に考察し、一見名詞を指示しているようなソレであっても、補文構造を指示するのであると主張した。このことから、不完全同一性(sloppy identity)の現象が説明できることは4.7節でもみた。つまり、ソレが指しているものは先行名詞そのものではなく、何らかの先行文脈なのであるから、先行名詞とソレとは必ずしも同一の指示対象を指す必要はないということになるのである。さて、ソレが先行名詞と同一の対象を必ずしも指示しない解釈が可能なのと同様に、ソコと、物である先行詞と照応するソイツも先行名詞と同一の対象を指示しない場合が存在する。(40)がその例である。

(40) a. 後樂園を破壊して、そこにビルを建てよう。

b. モナリザを偽造して、それ／そいつを売り飛ばそう。

(40a)において、ソコが指しているものは、先行名詞「後樂園」自体ではない。同様に(40b)のソレ／ソイツが指すものも、「モナリザ」そのものではない。近藤(2000)および第四章の見解が正しいものであるとすると、先行名詞と同一の指示対象を指すようにみえるソレは、実は先行名詞そのものを指しているのではなく、常に先行詞を含む補文構造を指しているということになる。

話を元に戻そう。(36,37,39)においてなぜソコ／ソレ／ソイツが言えるのか。それは、これらの指示代名詞が「トヨタ／モナリザ」という先行名詞を指しているのではなく、「トヨタである場所／モナリザであるもの」というような、先行文脈を一種の補文として受けているからであると考えられる。補文構造は当然ながら固有名詞とは解釈され得ず、むしろ不特定の「場所／もの」と解釈されるため Wp に登録されるようになる。その結果、ソレ／ソコ／ソイツが自然になるのである。

一方、人が先行詞である場合のソイツはこのような解釈を許さないようである。

(41) \*太郎に催眠術をかけて、そいつを働かせよう。

(この例文は睦宗均氏(p.c.)による。)

なぜソレ／ソコ、そして物である先行詞と照応するソイツがこの解釈を許し、先行詞が人

であるソイツがこの解釈を許さないのかは別に考えなければならない問題である<sup>9</sup>。しかし、ソレ／ソコが先行名詞とは同一でない解釈を許容し、ソイツがそれを許さないことと、(36,37,39)の文法性の差は無関係ではないと思われるのである。そしてソレ／ソコが指すものが、固有名詞そのものではないのであれば、(36,37,39)の例は本節での主張の反例にはならないということになるのである。

結局のところ、Hoji の formal dependency を用いた理論の是非は現段階で検討することはできないにしても、ソ系列の指示詞が固有名詞と同一の指示対象を指しうるという (35b) の判断は筆者には容認できないものであるし、また本論におけるこれまでの議論からの予測とも明らかに反したものであると言わなければならない。もし、(35b) が統語部門において収束したとしても、意味部門において本論で議論しているような理論が働き (35b) を排除すると考えることは可能であろう。以上のような理由から Hoji (1995) の (35ab) の判断

---

\*9 4.6 節で議論したように、筆者はソレの構造を [NP [Demp ソレ] e] のように、NP 主要部には何らかのゼロ要素があるものと考えている。恐らくソコの構造は Hoji (1995) のように [NP [Demp ソ] コ] のようであり、NP 主要部の「コ」は [+place] とでも表せる素性が音声化したものであろう。ソイツの「イツ」には [+human, +insult] とでも表せるような素性が少なくとも関わっていると考えられるが、物が先行詞である場合のソイツにおける解釈には [+human] という素性は関与的ではなく、結局のところ [+insult] という素性のみが残ることになる。補文解釈が成立するためには NP 主要部が「軽く」なければならないと仮定すると、人と照応するソイツが他より「重い」ことが、この解釈を不可能にしていると結論づけることができる。この仮定を支持すると思われるデータは、(36-38) をソノ NP で置き換えた i) のようなものである。

i) a. \*トヨタ<sup>1</sup> に電話してその会社に修理させよう。

b. \*後樂園<sup>1</sup> に行ってその場所で弁当を食べよう。

c. ??-\*モナリザ<sup>1</sup> を盗んでその絵を売り飛ばそう。

d. \*太郎<sup>1</sup> を呼んできて、その人にやらせてみるか？

これらの NP 主要部には音声化された要素があり、このことが照応を不可能にしていると考えられるのである。しかし、この問題は未だ未解決の部分が多く、今後の研究を待たねばならない。

は、本論ではどちらも非文であると考え、本節での議論が、指示詞の意味論として正しいものであると仮定しておくことにする。

#### 6.4.2 コノ／ソノ

(42) A: 昔むかし、あるところにおじいさんが住んでいました。この／そのおじいさんはある日、山へ柴刈りに行きました。

(43) 僕は昨日生協でぜんざいを食べたけど、この／そのぜんざいはおいしかったよ。

(44) 僕が好きな国を当ててごらん？ この／その国は南アメリカにあつて、コーヒーがとても有名なんだ。

6.3.2 節でも少し述べたが、Wp を介して Ws に対象が登録される場合はコ、ソともに使用が可能となる。普通名詞は固有名詞とは異なり、その指示対象が直接 Ws に登録されず、いったん Wp を通して解釈されるときを考えよう (Kamp (1981), Heim (1982), Diesing (1992))。

(42) では、第一文により「おじいさん」が Wp に変項(x)として導入される。この Wp 内の x に対応する対象物は Ws 内にも存在する要素であると捉えられるので、この「おじいさん」は Ws 内で話者にとって何らかの指示的な対象として登録される。

このようにして二つの異なる世界に登録された要素のうち、どちらを用いるかは堀口 (1978)、黒田 (1979)、金水・田窪 (1990) 等が述べるように話者に委ねられている。Ws の要素を用いて「コノおじいさん」と表現した場合には、「おじいさん」は話者にとっては指示的で、その意味においては何らかの映像的なイメージを持っていると言ってもよいと思う。このことにより、「おじいさん」を話者が自分に引きつけて話しているようなニュアンス (堀口 (1978)) や、談話主題として捉えられる (正保 (1981)、庵 (1995c)) と言ったような効果が生まれる。

ここで、対話における使い分けについて、このモデルでの分析を考えてみる。金水 (1999) が挙げる次の例を見てみよう。

(45) A: 僕の友達に山田という人がいるんですが、この男はなかなかの理論化で・・・

B: {その／??この} 人は何歳くらいの人ですか? (金水 (1999:77-8) より引用)

(45A)の発話により、聞き手の Wp 内に「山田という人」が登録される。Wp に登録される要素は、次節で詳しく述べるような制約がない場合には Ws に登録される。したがって、聞き手の Ws にも「山田 (という人)」は登録される。つまり、本論のモデルによる予測では聞き手 B の Ws にも山田は存在することになり、コノが使用できるはずである。しかしこれは事実とは反した予測である。なぜか。

ここで考えなければならないのは、Ws でのその要素のあり方である。Ws 内に送り込まれる要素は 6.3.1 節の (22d) により、変項であってはならない。これによって何らかの形で映像化される。ここで映像化と呼んでいる操作は、非常にルーズな言い方をすれば、個々の頭の中で Wp の要素に対してイメージを与えることである<sup>\*10</sup>。これによって、聞き手の Ws (Wsh とする) にも、聞き手がいわば身勝手に描いた「山田」が登録される。ところが、話者の Ws (Wss とする) にも同時に「山田」は存在する。ここで Wss 内の山田と Wsh 内の山田の間には、よほどの偶然でもない限りはかなりの差があることになる。これは、この後に続くコミュニケーション上の支障となる恐れがある。この支障を避けるために、聞き手はあえて Wsh 内の要素を用いずに (あるいはいったん登録した要素をキャンセルして) Wp 内の要素である変項を用いて発話すると考えられる。変項 (x,y 等) は話者によって相対的なものではなく、絶対的な意味論的手段であると考えておく。

この制約は一種のコミュニケーション上のものであるので、聞き手の側がコミュニケーションに支障がないと判断すれば Ws 内の要素を使用することも可能であると考えられる。九州の一部の方言 (筆者がチェックした限りでは現段階では佐賀、長崎、福岡の話者、これは現段階では大きな調査を行ったわけではないが、複数の回答を得ている) では、その話者が実際の経験から知った人や場所でないものについて、ア系列指示詞を用いることができるようである。

(46) A: ほら、僕がこないだからずっと噂しよる小坂ゆーやつがおるやろ? あいつが今度うちを訪ねてくることになったんよ。

B: 私もあの人に一度でいいから会ってみたいと思うとったんよ。

---

\*10 「映像化」は、ここではごく常識的に、話者が、経験や知識などから適当な絵画的イメージを Ws 内に構築すると考えていただきたい。「映像化」についての具体的な議論は 7.3.3 節で行う。

(47) A:今度出張で、東京に行くことになったんだよ。

B:羨ましい！私もあそこに行ってみたいっちゃ。

これは、このような方言を使う話者にとっては、標準語話者とは異なったコミュニケーション上の規則があり、Ws に登録されている要素をそのまま用いて発話することができるということではないだろうか。

また、標準語においても次のような状況でならアノを使用することが可能であろう。

(48(=18)) A:ハムナプトラ 2 見た？

B1:いや、あの/?その映画はまだ見てない。

(49) (ワンルームマンションに住んでいる友人を訪ねた学生)

となりのやつうるさいな。あいつ何時まで起きてるんだ？

(50) ところで、こないだつつみんの知り合いがブラジルに学会に来るって言ってたやろ？あの人、ゆうこさんっていう人？私が（ズル）休みだった日に、電話かけてきた人がいたらしくて、その人がゆうこさんっていうらしいねんけど、知り合いにその名前の人いないからさ。友達の友達って言ってたらしいから、もしかしてそうかな。  
(友人から筆者に届いたメールより引用)

(48)は 6.2.2 節において、談話管理理論における問題点を指摘した際に提示したものの再掲であるが、このような場合においても、話者の直接的な経験なしに、かつ聞き手の知識にも左右されずにア系列指示詞を使用することができる。(49)においても、話者は友人の隣人を知っている必要はなく、ただ単に夜遅くまで騒いでいることによって、自分が眠れないという迷惑を受けている怒りの対象としてのみの知識しか持っていない。また、(50)は実際に筆者に友人から届いたメールである。この友人はブラジルに住んでおり、筆者の別の知り合いがブラジルに出張するというので、色々問い合わせていた。そこへ有休をとって休んでいた彼女の職場に「ゆうこさん」なる人物から電話がかかってきたが、彼女はそのような名前の人物を知らない。ひょっとして、筆者がこのメールの前に問い合わせていた、ブラジルに出張する人間というのがその「ゆうこさん」ではないかと聞いている。このような状況から分かるように、この友人はブラジルに出張するもう一人の私の知り合いを知らない。当然会ったこともない。にもかかわらず彼女はその知り合いのことを、ア



ノ人と言って、アノを用いて指しているのである（因みにこの友人は神戸出身である。筆者には(50)は全く問題ないが、筆者自身の方言も関西方言なので、その影響があるかもしれない）。これらのような実例も含め、上の例が示唆していることは、Wp に登録された要素は、(次節で述べるような) 特別な制約がない限りは全て Ws に送りこまれ、そこで「映像化」されるということであり、コミュニケーションに支障を来さないのであれば、たとえその対象を直接知り得なくても Ws 内に登録された要素を用いて指すことが可能であるということである。

今、ア／コの違いは無視して、両者が Ws 内の要素を指すものだとすると、このことは(46,47)同様、これらの経験していない要素もいったんは Ws 内に登録され、その後コミュニケーション上の制約によって(45)のように Wp の要素で指すようになると考えることができると思うのである。

このように考えるならば、聞き手の発話であっても次に挙げる(42'B)のように、コノが使用できる文脈もあってしかるべきであり、事実そうである。

(42) A: 昔むかし、あるところにおじいさんが住んでいました。この／そのおじいさんはある日、山へ柴刈りに行きました。

(42') B: このおじいさんは、その後どうなっちゃったの？

これは昔話という文脈では、Wss と Wsh に描かれる「おじいさん」が多少異なっているもその後の（主に話者主導で行われる）コミュニケーションには支障をきたさないと考えられるからではないだろうか。金水(1999)が挙げている(51)や、同様の(52)なども、話者と聞き手が Ws に登録する対象は異なったものであり得るが、その対象がお互いに異なっているも、(発話段階ではまだ実在しないものである) コミュニケーションに大きな支障を来さないと考えられる範囲で許されると考えられる。

(51) A: ……以上で、ファッション・シティ・プロジェクトの概要の説明を終わります。

B: このプロジェクトは、いつから開始するのかね。 (金水(1999:78)より引用)

(52) A: 次の旅行は鳥取から島根を抜けて、帰りは山陽方面を見て帰ろうよ。

B: この旅行はおもしろくなりそうだね。<sup>\*11\*12</sup>

---

\*11 金水(1999)では、(51)は「包合型／対立型視点」という観点から記述されている。つまり、(51)では A が話題にしている「このプロジェクト」に B が何らかの関係をもっていて、その意味で B の視点が A の視点に包み込まれると考えるのである。「包合型／対立型視点」については後述するが、本論の枠組みの中ではこの概念は採用されない。この概念を採用する前提として、聞き手というものを理論の中に組み入れる必要があるが、次章においては現場指示においても聞き手の存在というものは、語用論的に考慮されるものであって、文法が要求しているものではないとの主張を行う。

本論ではコ系列指示詞が談話主題を表すというのは、Ws に登録されたことによって生じる二次的効果であると捉えている以上、(51)における金水(1999:78)の「(聞き手にも)自分自身の主題であると捉えることができれば、コの使用は可能であろう」という説明ができない。

\*12 次のような例も同様に説明することができるだろう。i)は話し手も聞き手も旅行に参加しているので Wss/Wsh における「旅行」はほぼ同一のものである。ii)はこのままではコノは座りが悪いが、例えば旅行に参加した者からその旅行について十分に聞かされた後の発話であると考えればかなりコノがよくなる。これは B の Wsh に登録された「旅行」が、参加者からの詳細な情報によりその参加者の Wss 内の「旅行」とコミュニケーションに支障を来さない程度に近いものになるからではないかと考えられる。いずれにしても、聞き手の側の Ws にも対象は登録されていると考えるべきであろう。『言語研究』の査読者からの指摘による iii)も同様に考えることが可能である。

i) ((52)の旅行の参加者が後日)

B: この旅行はおもしろかったね。

ii) (旅行の参加者ではない人が)

B: その／?‑??この旅行はおもしろかったようですね。

iii) A: 私は昨日曙橋にあるレストランで食事をしました。

B: その／\*このレストランは有名なところですか。

話を元に戻そう。コノを用いた場合には上で述べたような様々な効果が現れることが分かった。逆にソノを用いた場合には、「おじいさん」を話者の中で一方的に映像化するのではなく、あくまでどのような対象なのか分からないxであるとして表現することになる。話者はWsにもその要素を登録しているわけであるのに、それを使用せずにWpの要素を用いるということは、相手に話者のWs内の対象を想像させるという負担をかけずに、相手にも十分に理解可能な変項を用いるということになり、相手の解釈の負担を軽減するような方略であるということができよう。本稿でのこの説明は金水(1999:75)で「聞き手負荷制約」として提案されているものと基本的には同じものである。

#### (53) 聞き手負荷制約：

聞き手が発話を処理する際にかかる負荷を最小にせよ。(金水(1999:75)より引用)

以上、コノとソノの両者が使用できる場合を考察した。Ws,Wpに対象が登録されている場合は、そのどちらを使用するかは話者次第ということである。本論でのモデルが、コノとソノの使い分けに関する予測を行うのみでなく、金水(1999)での「聞き手負荷制約」やその他の記述を損ねることなく説明することができるものであるということも指摘した。

### 6.4.3 \*コノ／ソノ

本論のシステムに則して考えれば、コ系列指示詞が使用できずにソ系列指示詞のみが使用できるという環境は、WpからWsへの対象の登録が拒否されるという状況である。このような状況には大きく分けて意味論的なものと語用論的なものがあるようである。以下詳しく検討していくことにしよう。

#### 6.4.3.1 名詞の指示性

(54) 太郎は羊を飼っている。花子はこの／その羊にえさをやる。

まず第三章で議論したデータを再検討することから始めよう。(54)を見ていただきたい。ここでコノとソノを用いた場合の両者に意味的な差異があるようには感じられないだろ

う。しかし(55)のような文脈を作ると、突然コノの使用が不可能になる（第三章で少し述べた）。

(55) 太郎は羊を飼っていて、それを育てて売ることによって生計を立てている。花子は\*この／その羊にえさをやる。

ここで起こっていることは次のようなことであると考えることができる。(55)における「太郎が飼っている羊」は、それを育てて売っているわけであるからその指示対象に日々の変化があると考えられる。つまり、ある日には{シロ、花子、権太}という羊を太郎は飼っていたが、3日後にはシロを売り代わりにブー子とメー太を飼うようになった。すなわち3日後の太郎の羊は{ブー子、メー太、花子、権太}ということになる。コノが使用できないことは、コノがこのような非特定の状況を表現するのには適さないものであるということを示している。非特定のである場合、とにかく「太郎が飼っている羊（であるもの）」をxとおいて「xにえさをやる」と表現するのは好都合であり、Wp内の要素が用いられ、そのためソノが使用される。(54)も同様に考えられて、コノが使用できる場合は太郎は常に同じ羊を飼っているという特定の解釈でのみである。次の例でも同様である。

(56) 太郎はトヨタで車を売っているが、その／\*この車には保険をかけなければならない。

(57) 太郎は岡山にアパートを持っていて、部屋を貸しているが、その／この部屋には火災保険をかけなければならない。

(56)では、太郎がトヨタで売る車は、その指示対象が非特定のであるためにコノは不自然で、(57)では太郎が貸す部屋は特定のであるのでコノは自然になる<sup>\*13</sup>。

同様のことが(58)についても言える。(58)では一見、コノとソノは言い換えが可能であ

---

\*13 (55)の判断はやや揺れがあるかもしれないが、状況を詳しく説明すると、コノの方が不自然になるという母語話者が多かった。また、少なくとも(55)のコノの方が(54)のコノよりもすわりが悪いという結果も、多くの母語話者に共有される反応であった。

るように感じられるが、それはソノの解釈のうちの一つが、コノの解釈と同様になるということである。(58)の発話者は、(58)を発話する時点で「会社の者」ということによって誰が行くのかをその人の頭の中に思い描いている場合、すなわち話者にとっては特定のがある場合がある。この場合にのみコノが使用できるのであって、その解釈の時には本論の仮説通りソノも使用できる。しかし、ソノの別の解釈では Wp から Ws への登録が拒否されるためコノの使用が不可能になる。それは「会社の者」が、発話の時点では誰なのかが特定できない解釈の場合である。つまり、会社の者{田中、山田、平野}のうちの誰かが行くというような場合である。この場合にも「会社の者」を特定の指示することなく、単に「会社の者である x が来る」という情報のみを伝えれば事足りるソノのみが使用でき、コノは使用できない。このことは(58)を(59)のように書き換えることで確かめることができる。

(58) 1 時間後に会社の者が受け取りに来ますから、この／その者に渡してください。

(59) 1 時間後に会社の者のうち誰かが受け取りに来ますから、\*この／その者に渡してください。

以上の議論を考えると、直接にしろ、Wp を介して対象を登録する場合にしろ Ws に登録される対象は、話者の中でその指示対象が特定できるようなものでなければならないということになる。話者がその対象の存在を特定できれば、Ws への登録が可能だということとは(60ab)のコノ／アノの使用可能性で確認することができる。(60a)の「～そうだ」という形式は、その事態の存在を話者自身は保証できないということを表す形式であると考えられ、したがってその事態を構成する要素の Ws への登録も拒否されることになる。一方(60b)においては、話者は事態の存在を保証しているわけであり、そのことによって Ws 内の要素を指すコノ／アノの使用が可能になるのである<sup>\*14</sup>。

(60) a.彼は昨日生協でぜんざいを食べたそうなんだけど、\*この／\*あの／そのぜんざいはおいしかったそうだよ。

b.彼は昨日生協でぜんざいを食べていた。o.k.-?この／あの／そのぜんざいはうま

---

\*14 コノとアノの違いについては第八章を参照されたい。

そうだった。

同様に、仮定節内に入るような要素も、その存在が発話時点では非特定のであるために Ws への登録は拒否される。

(61) a. もしあの時買った宝くじが当たっていたら、\*この／その金を頭金にして家が買えたのになあ。 (金水・田窪(1990:137)を修正)

b. もし私に子供がいたら、\*この／その子にピアノを習わせよう。

#### 6.4.3.2 束縛変項解釈・代行指示

Wp から Ws への登録が拒否される場合には、上で述べたものの他に、より文法的な要因によるものもある。Wp は変項によって解釈が行われる領域だと述べたが、変項解釈が強制されるような形式の場合にはコノの使用はできない。このような場合には束縛変項解釈がなされる場合と代行指示の場合がある。

(62) a. どの国も、その／\*この国の旗を持って入場した。

b. どの本も、その／\*この本の内容はとてもよかった。

c. どの国(x) (x が x の旗を持って入場した)

d. どの本(x) (x も x の内容はとてもよかった)

(63) a. チョムスキーとその／\*この著書／『坊ちゃん』とその／\*この著者

b. 実験はその結果が大切だ。

c.  $\lambda x(\exists y)\text{book-written-by}(x,y)/\lambda x(\exists y)\text{author-of}(x,y)$

d.  $\lambda x(\exists y)\text{result-of}(x,y)$

e.  $\lambda x(\exists y)R(x,y)$

(62)はいわゆる束縛変項解釈されるような場合であり、(63)は、第五章で詳しく議論した代行指示の用法である。これらの処理にはそれぞれの(cd)のような論理式を用いる処理を行わなければならないと考えられ、この計算に変項を用いることが義務的である以上、Ws にその要素を登録することはできず、したがってソノのみが使用できるというように考えることができる。(62)がそのような処理を必要とすることは、これらの文がある種の関数

的な解釈を要求することから明らかであるし、(63)も(63e)のような x と y の間に成立する関係を規定するような二項述語 R の存在を考えてみるとよいだろう。(63)では原則的には Ws に直接登録されるはずの固有名詞「チョムスキー」(6.4.1 節参照)までもがソノによって指示されることが、これらの解釈に(63e)のような、変項を介した何らかの処理が関わっていることの証拠であると考えられるのである。

このように考えることは、ソノを一種類として分析することが可能であるという点でメリットがある。第五章で議論したとおり、代行指示のソノというものは、基本的には指定指示のソノと同じものが、付与される名詞の飽和性によって代行指示として解釈されるものであり、二つのソノは別の存在ではないと主張したが、本節での議論は、このような主張の下でも代行指示においてコ系列指示詞（あるいはア系列）が現れ得ないことをうまく説明することに成功している。したがって、第五章の議論と合わせて、やはり代行指示と指定指示のソノは一種類であると考えられるのである。

#### 6.4.3.3 「予測裏切りの意味」

庵(1996a)が挙げている次のような例も、先行詞、指示詞が付与される名詞ともに固有名詞であるにも関わらずソノのみが使用可能である。

(64) a. 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その／\*この順子が今は  
他の男の子供を2人も産んでいる。 (庵(1996a:31)より引用)

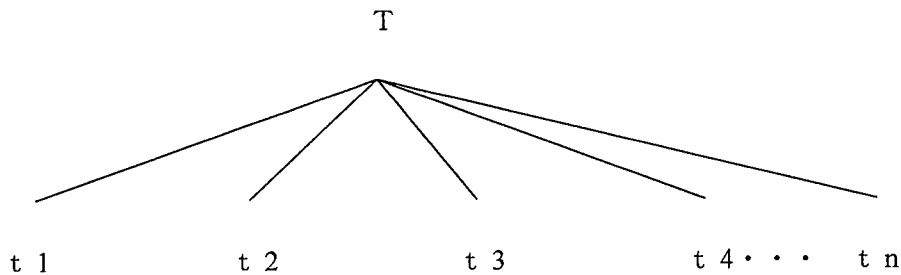
b. 太郎は朝寝坊でめったに朝ごはんを食べない。今朝、その／\*この太郎が朝ごはんを食べた。 (同(p.34)より引用)

庵(1996a)は、予測裏切りの文脈は、先行文脈からの義務的なテキスト的意味の付与の結果生じる(p.36)とし、義務的な付与なのでソノのみが使用可能であるとしている。この議論についてはすでに 6.2.3 節で、テキスト的意味の付与が義務的なことが即ちコノの使用をキャンセルする動機にならないことを指摘した。しかし、予測裏切りの文脈においてはテキスト的意味の付与が義務的であるという主張自体は正しいものであると思う。問題は、なぜこのような文脈ではテキスト的意味の付与と庵が呼んでいるものが必要で、その結果なぜソノのみが使えるコノが使えなくなるのかということを説明することである。

ここで考えなければならないのは、例えば(64b)における前文の太郎と後文の太郎では、

それが指す対象が異なっているということである。前文の太郎は、Ws 内に登録される太郎であり、一人の個人としての太郎を表している。固有名詞「太郎」は、本論の立場に従えばデフォルトでは Ws に直接登録されるため、原則としては (Wp で起こるような) 意味論的操作を必要としない。しかし、これは固有名詞は意味論的操作が行われてはならないと主張しているわけではない。

固有名詞「太郎(T)」は、様々な属性(「日本人だ」「25歳だ」「すし好きだ」・・etc.)を持つ太郎(tで表す)の集合体であると考えられる。この関係は下のように表せる。



Ws に登録される太郎は、基本的には t の集合である T であると考えられる。(64b)の前文における「太郎」もこの T を指していると考えられる。しかしながら、後文の「太郎」はどうであろうか。この「太郎」は T を構成するものの中で「朝寝坊でめったに朝ご飯を食べない太郎」でなくてはならない。この点を庵(1996a)はテキストの意味の付与が義務的であると考えたのであるが、上のように考えればこれは、後文の「太郎」は T ではなく t (のうち、「朝寝坊でめったに朝ご飯を食べない太郎」) でなければならないということになる。指す対象が異なるとは、このような意味である。

Carlson(1977)は、種 (Kind) のものが個 (Object) として具現化したものを次のように表した。

(65)  $R[y^o, x^k]$

これは、主に英語の裸複数名詞(bare plural)における総称名詞解釈と存在量化名詞解釈を、一種の変換処理によって関係づけたものであるが、Tとtの間にもこのような変換処理を考えることは可能であると思われる。議論を一般的にするために、Tをx、tをyとすると、この変換処理は(65)に倣って(66a)のように表せる。もし、xをy1に変換させたいの



であれば(66b)のようになると考えよう。

(66) a.R[y,x]

b.R[y1,x]

このような変換処理は、(63)で見た代行指示における処理同様、変項を介して達成されるものであり、Wp 内でのみ行うことができる。このことの帰結としてソノのみが使用できるようになり、たとえ固有名詞であってもソノで指さなければならなくなるのである。

上の議論は何も固有名詞に限ったものではない。(67)のような例文でも同様のことが観察できよう。

(67) すこし前まで納豆は関西ではほとんど売られていなかった。その納豆が今では関西で人気商品になっている。 (例文は『言語研究』査読者の指摘による)

前文の、x としての「納豆」は、「納豆」がもつあらゆる属性の集合である。それに対して後文のそれは、x を構成する y のうち、「関西ではほとんど売られていなかった納豆」でなければならない。ここで x を y に変換する処理が必要になるため、Wp 内において(66)が適用され、その結果としてソノが使用されると考えられるのである。

## 6. 5 第六章のまとめ

本章では、主に文脈指示の指示詞に有効であると思われるモデルを提示した。談話管理理論の主論点であるところの、「聞き手の知識」という概念の排除と「複数の心的領域」の設定は踏襲した上で、「経験」という概念を用いずに、直接指示と、変項を介した指示という二つの世界を考えることで、指示詞の分析の一つの可能性を示した。結果、コノとソノがどのような環境で使用でき、どのような環境では使用できないのか、そしてそれはなぜなのかという問いに対して答えを与えることが可能になったと思う。

このモデルを使用することで、文脈指示の指示詞の使用法についてはほぼ統一的に説明が可能になると思われる。しかし、本章での議論では未だこのモデルは完成したとは言えない。ここで次章以降で述べる、本章で残された問題点について言及しておこう。

まず、コ系列指示詞とア系列指示詞が Ws という、同じ領域の要素を指すとした点であ

る（以下の議論および例文は『言語研究』の査読者の指摘によるところが多い）。このことの帰結として、次のような例において、コ／アが同様の振る舞いをするという予測が成り立つが、事実はそうではない。

(68)a. 卵と小麦粉をよく混ぜて、それ／これ／\*あれを型に流し込みます。

b. 「あなたなしでは生きられない」と言っていたその／\*この／あの順子が、今では他の男の子供を二人も産んでいる。 （以上、査読者の指摘による）

コ／アは(68)の例からも、詳しく検討する必要がある。第八章で議論する。そこでは、Wsの要素が、どこから登録されたのかという点に関して考える必要がある。つまり、Woに関するより綿密な記述を行う。

また、本章では、本論で提示したモデルを用いて文脈指示の指示詞の用法について触れていない。現場指示の指示詞へのモデルの応用なくして、このモデルの妥当性を実証したとは言えないであろう（このように、文脈指示と現場指示を同一の理論で捉えようとする最近の試みに Hoji et al. (2000) がある）。このような仕事は次章で詳しく行うことにする。

## 第七章 現場指示のソ系列指示詞

### 7. 1 はじめに

前章では文脈指示の指示詞の言い換えを説明するために、それまでの章における現象をふまえて一つのモデルを提案した。そこでは直接指示的な Ws と間接指示的な Wp とを話者の心的領域として設定し、そこに登録される要素と指示詞がどちらの領域の要素を指すかという規定の違いにより、言い換えの可否が説明できると考えた。

本章では現場指示における人称区分的なソ系列指示詞について考察する。人称区分的なソと本章で呼ぶものは、(1b)のように聞き手の領域にあると話者が考えるものをソを用いて指す用法である。現場指示のソと文脈指示のソの間には著しい違いがあるが、両者の間の関係はどのようなものであるのだろうか。また、前章で提示したモデルは現場指示における現象を扱うのにも有効なのであろうか。

(1) a. 昨日あなたを男子学生が訪ねてきましたよ。その人は、あなたに急な用事があったみたいでしたけど。 (文脈指示)

b. (聞き手が持っているペンを指して) そのペン、ちょっと貸してくれない？ (現場指示)

本章におけるこれらの問いに対する答えは、現場指示のソは文脈指示のソの意味から捉えることが可能であり、したがって前章のモデルが有効であるというものである。

このことを述べるために、本章ではまず次節で先行研究である金水(1999)、岡崎(2001)を紹介し彼らの主張にしたがうことを述べる。彼らはソ系列指示詞を歴史的なデータに基づいて考察し、非直示的用法(本論では文脈指示的用法)がその元々の意味であったと述べている。これが正しいものであるならば、前章における文脈指示のモデルから現場指示の用法を分析することの妥当性が支持されることになる。

次に 7.4 節で、前章のモデルの観点に立つならば、現場指示のソ系列指示詞はどのように捉えられるべきものであるのかについて、一つの仮説を提示する。Ws は話者が独断と偏見によって映像化を施す世界であるので、極めて主観的であり、そのことから話者がそ

の対象に対して優先権を積極的に主張するようなニュアンスが派生的効果として生まれる。日本語には相手の領域を考慮し、対象がその領域に存在するならば話者の優先権を積極的に主張してはならないという語用論的制約が存在すると考えられ、この制約を遵守するために Wp が用いられると考える。Wp の要素は変項であり、全ての話者に共通の道具を用いて指すことにより冷静で客観的なニュアンスを帯びる。この、Wp の特性が持つ効果を、制約を守るために我々はうまく利用しているのではないか。その結果としてソが現れるのではないかという議論を展開する。

7.5 節では、7.4 節の仮説を立てる論拠について議論したい。この仮説の一つの大きな論拠となるものは、現場指示のソ系列指示詞は基本的には独話では現れないという事実である（正保(1981)、堀口(1978)、金水(1999)等）。基本的に直示的用法である現場指示においては、特別な理由が存在しない限りあえて非直接指示的な Wp の要素を用いる方略は、その指示のあり方としては適当ではない。聞き手の存在を語用論的に考慮して初めて、「わざわざ」Wp を使う理由が生じるのである。また、この制約が語用論的なものであるとすると、それを何らかの状況を設定することによってキャンセルすることが可能になるはずである。これをデータをあげることによって示す。また、この議論は文脈指示を中心に観察することによって構築されたモデルに拠っている。だとすれば、文脈指示においてもこのモデルの派生的な効果をうまく利用したような現象があるかもしれない。前章ですでに議論したデータの中に、そのようなものが既に指摘されていることを述べ、現場指示と文脈指示の関連性を指摘する。

さらに 7.6 節においては、このモデルを現場指示に援用することによる利点について記述したい。まず最初に、田窪(2002)の記述の問題点を指摘し、本論で取り組んでいるモデルの立場では、このような問題が生じないことを示す。

7.6 節の後半では、曖昧指示と呼ばれる現象について考察する。この現象については金水(1999)にも指摘があるが、その指摘について見た後、本章の仮説のもとではこの現象をどのように考えることができるかを述べる。さらに、この仮説の利点として「聞き手の存在」というものを、文法から取り外すことができる点があげられる。前述したが、「聞き手」というものはあくまで語用論的に考慮されるものであって、これが指示詞の文法の中に組みこまれるべきではないことを論じる。さらなる利点として、英語のように二項対立の指示詞体系をもつ言語と、日本語のように三項対立の指示詞体系をもつ言語との違いを説明する可能性を、このモデルが有していることを述べたい。この考察は今後の研究を待

たねばならないが、考察する価値は十分にあり、この点からもこのモデルの妥当性を支持する現象ではないかと考えられる。

最後に 7.7 節において、いわゆる中距離のソについて議論してこの章を閉じる。

## 7. 2 ソ系列指示詞と文脈指示用法

金水(1999)は、コ／アには直示的な本質が全ての用法にわたって認められるのに対し、ソにはそのような特質は見られず、非直示的な性格をその本質としてもつと主張している。金水が直示的／非直示的と言っているものは、本論での現場指示／文脈指示に概ね対応すると考えよう。金水(1999)はこのことを、様々なデータを検討することで詳細に述べているが、特に興味深いのはソ系列指示詞の歴史的変遷について述べた次の記述である。

(2) 中称は現代語と同様に文脈照応によく用いられ、分配的解釈も見られる一方で、文脈指示と独立した純然たる直示用法は中世末まで見られない。

(金水(1999:88)より引用)

そのうえで金水(1999)では、「おそらく文脈照応を足がかりにして、直示用法においてソ系列の領域が確定してい」ったのではないかと述べられている(p.88)。

岡崎(2001)<sup>\*1</sup>にも同様の主張が見られる。岡崎(2001:121)によれば、サ行系列の指示詞は上代では観念用法と照応用法にしか用いられず、直示用法はない。中古になって、ソコが直示用法を獲得するが、これとて二人称用法に偏るとされている。以上のように、ソ系列指示詞は非直示用法から直示用法に拡張したと考えられるような歴史的事実が存在するわけである。彼らはこのことをもとに、現場指示(直示)に現れるソ系列指示詞は本質的なものではなく、文脈指示(非直示)に現れるソ系列指示詞こそがその本質であり、現場指示はその拡張として捉えられることを述べているのである。

これとは別に筆者は堤(1998a)以来、少なくとも文脈指示におけるソは変項であり、し

---

\*1 本章では岡崎の説は岡崎(2001)として代表させるが、他に岡崎(2002)も重要である。岡崎(2002)では指示代名詞と指示副詞の歴史的変化を比較的に論じているが、指示代名詞に関する主張は岡崎(2001)と変わってはいない。

たがって非指示的であると主張してきた。この主張は本論においても踏襲されている（第三章および第六章）。もし、金水(1999)、岡崎(2001)と本論第三章における主張が正しいとするなら、ソ系列指示詞は文脈指示の用法を詳細に記述し、その意味を現場指示に拡張して考えるのが研究の方向として望ましいということになる。そしてソの意味は、たとえ現場指示であってもそれが指す対象を変項として Wp に登録するというものであるということになる。

### 7. 3 ソ系列指示詞の本質と現場指示用法

このように考えると直ちに問題が生じる。それは Hoji et al.(2000)においても正しく指摘されているとおり、そもそも非指示的であるはずのソの性格が、極めて直示的な性格を有する現場指示に使用されるのはどのような理由によるのかという点である。

この疑問に対する解決方法としては大きく二通りのやり方が考えられる<sup>\*2</sup>。一つ目は、このような疑問が生じるのは、現場指示と文脈指示を統一的に捉えようとするところから生じるものであると考え、二つを全く別の理論として捉える方法である。この立場に対しては既に 2.10 節において、現場指示と文脈指示の関係が見えにくくなるという金水・田窪(1992)の指摘を紹介し、これに賛意を表した。また、このように現場指示と文脈指示の間で理論を別に立てようとする Kuno(1973)は、現場指示では基本的に人称区分説を採用しながら、文脈指示では指示詞はその「元々の意味を失う」と述べている。しかし、この記述に対する論証はなく、根拠もない。このように考えると現場指示と文脈指示という、全く別の理論が働くはずのものに、全く同じ形態の指示詞が使用されることに対する説明も困難になると考えられるのである。

また、庵(1997)は文脈指示の中に「知識管理」の原理にしたがうものと「結束性」の原

---

\*2 今一つの方法として、ソ系列指示詞の本質を直示的な用法、つまり現場指示のものに求めるというものがある。これは佐久間(1951)以来様々な研究者によって採られてきた方法であるが、本論では金水(1999)、岡崎(2001)の指摘を正しいものとして採用しているのでこの立場は採ることができない。もしこの立場を採るなら、金水らの指摘した歴史的な事実の説明に加え、本章までに述べられてきたような文脈指示のある種特殊な用法について、現場指示の観点から記述するという仕事が生じる。

理にしたがうものがあるとしているが、現場指示に関しては特に言及されていない。現場指示では全く別の原理が働くとする、合計三つの原理を別に立てることになり、これも根拠を示す必要があるだろう。庵(1997)は、金水・田窪(1992)の「談話管理理論」の有効性を認めているので、現場指示には「知識管理」の原理が働くと考えているようであるが、やはり両者の関係を明らかにする必要があるし、また同じ文脈指示の中で原理を変えるのなら、どのような条件の場合にはどちらの原理が働くのかという点に対して明解な答えを与えなければならない。この点について庵(1997)は特に言及しておらず、したがって理論的にも問題があるように思われる。詳しい検討は次章で行うことにする。

残された方法とは、ソ系列指示詞の本質として非指示的な性格を認めた上で、現場指示用法においては何らかの特別な要請により、その対象を直接的に指すことをあえて避け、非指示的なソを使用することで、ある種の語用論的效果を狙っていると考えるものである。本章ではこの主張の妥当性を検討していくが、次節では前章でのモデルを用いて、その理由に対する仮説を立てることにする。

#### 7. 4 現場指示に用いられるソ

##### 7.4.1 聞き手とソ

ここで現場指示用法に目を向けてみよう。現場指示においてソ系列指示詞が現れるための必要条件は、聞き手が存在することである。聞き手が存在しない独話などでは、ソは現れない。たとえば堀口(1978)は、「我々の内言・独話などにおける知覚対象指示の用法を内省すると、コ・アを圧倒的に用いて、ソを用いることはきわめて稀だ、ということが思われてくる」と述べている(正保(1981)、金水(1999)なども参照)。

(3) これは何だろう？

(4) あれは何だろう？

(5) (独り言で) #それ、何だろう？

したがって、ソが現れる場合には何らかの形で聞き手の存在が前提され、かつ何らかの意

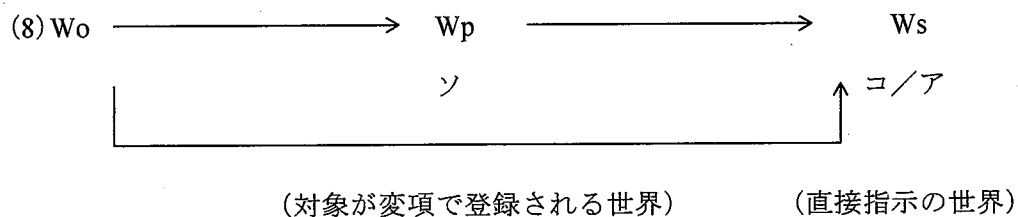
味でその対象は聞き手の領域に存在すると話者が捉えているということになる<sup>\*3</sup>。

(6) これ、何だと思う？

(7) それ、なあに？

#### 7.4.2 聞き手の領域

このことを、前章で提示したモデルを用いて考えてみよう。簡単に振り返れば、前章でのモデルは(8)のように図示できる。



外的世界である  $W_o$  から対象を話者の心的領域である  $W_p/W_s$  に登録していくわけであるが、その登録の仕方には矢印で示したように三通りの方法があった(6.3.2 節における(29))。

眼前に存在する対象は、固有名詞と同じように直接指示することができる対象であるので、基本的には  $W_o$  から直接  $W_s$  に登録される。つまり、聞き手が存在しない場合、話者

---

\*3 黒田(1979)における、独り言における独立的用法というものがあるが、これは「なんだか分からない」ものであるという規定から分かるように  $x, y$  などの変項に置き換えられ、したがってソで指せるようになることは、本論のモデルでは問題なく説明できる。このような例は、「医者が言っていた腫瘍」が、言語的には顕現しなくても話者の頭の中では一種の先行詞のように働き、それを指しているとすれば文脈指示的であると考えられることもできよう。いずれにせよ、はっきりと分からないものに対してソを使用するのは本論の立場からはむしろ当然のことである。

i) (医者に腫瘍があると言われ)「一体、それはどんな色をしているのだろうか」

(黒田(1979:47)より引用)



は眼前に存在するものを  $W_s$  内の要素を使って自由に指示することができる。 $W_p$  を介さないのは、 $W_o$  から  $W_s$  に直接登録するやり方が、人間の言語処理にとって最も負担がかからない方略であるという仮定からの帰結である。聞き手が存在しない場合に  $W_p$  をあえて介在させて  $W_s$  に対象を登録するやり方は、特に動機もないしまた  $W_p$  を介さない方法に比して負担が大きいのでとられない。

$W_p$  への登録そのものがなされないとなると、その対象はソ系列指示詞では指せないことになるが、事実は正にその通りとなることは(5)が示すとおりである。

ところが、聞き手が存在すると突然ソが出現する。上の議論とこの事実を考えあわせれば、話者は聞き手が存在することによって「わざわざ」対象を  $W_p$  に登録し、変項に置きかえることによってソを用いていると考えられないだろうか。つまり、聞き手が存在することによって何らかの制約がはたらき、 $W_o \rightarrow W_s$  へ直接対象を登録するという、話者にとっては最も負担の少ない方略がもはやとることができなくなったのではないであろうか。だとすると、そのような制約とはどのようなものであろうか。

ここで、現代標準日本語には次のような語用論的制約が存在すると仮定しよう。

(9)a. 聞き手の領域を認めよ。

b. 聞き手の領域に存在するものに対して話者の優先権を主張するな。

(9a)は、聞き手が存在する場合には話者が捉えている外的世界である  $W_o^*$  を分割して、聞き手に属する（と話者が捉える）領域を作成せよという指令である。そのうえで(9b)は、聞き手の領域に存在するものに対して、特別な理由がなければそれを自分のものとして指示してはならないという制約である。

聞き手の領域に存在するものの典型としては、聞き手自身であり、聞き手の心の中に存在する対象である。この中には聞き手の気持ちや意志なども含まれるとすると、(9)の制約は何も指示詞に限ったことではなく、その他の言語表現にも適応されている可能性がで

---

\*4 現段階では  $W_o$  は外的世界であるとしているが、この言い方は適当ではない。本論では  $W_o$  も話者が話者の目を通して把握している外的世界であると考えている。これについては次章において  $W_o$  を再定義する際に詳しく論じる。

てくる。益岡(1997)が「私的領域」に関する制約としてあげた次のような制約も、(9)の部分集合であると考えられることもできよう。

(10)人物の内的世界はその人物の私的領域であり、私的領域における事態の真偽を断定的に述べる権利はその人物に専属する。 (益岡(1997:4)より引用)

(11)a.私は水が飲みたい。

b.私は悲しい。

(12)a.\*あなたは水が飲みたい。

b.\*あなたは悲しい。

(13)a.\*花子は水が飲みたい。

b.\*花子は悲しい。

益岡が(10)を語用論的制約であるとしている点も、本論の主張と合致しており興味深いが、この問題にはこれ以上立ち入らないことにする。少なくとも、日本語においては何らかの語用論的制約により、話者の領域とそうでない領域とを分割し、聞き手の領域には何らかの制約がかかると見ることはできそうである。

話を元に戻そう。日本語では(9)の制約が働くと考えた。しかし、ではなぜそのことがWsの使用をキャンセルさせ、Wp内の要素を指していることを示すソ系列指示詞を出現させるのであろうか。このことを考えるには、Ws/Wpそのものが持つ特性を考える必要がある。7.4.4節でこのことを検討していくが、その時に前章で提示した、Ws内の要素は「映像化」を受けるという考え方が重要になる。そこで、次節では「映像化」について少し詳しく考え、7.4.4節での議論の準備を行いたい。

### 7.4.3 「映像化」再考

前章で、Wsには「映像化」という処理が施されると述べた。「映像化」とはWoに存在する対象物を、話者が主観的なイメージとしてWs内に登録する方法であった。この「主観的に登録する」というやり方が、現場指示用法を考える上で重要になると筆者は考える。そこで本節では、「映像化」について少し詳しく見ていくことにしよう。

例えば、「明石家さんま」について考えよう。言うまでもなく、彼は平成14年現在にお

ける一流のお笑い芸人として広く知られている。彼のことを話題にする場合、その談話の参加者の頭の中には何らかの彼に対する情報なりイメージなりが登録されていると考えられる。本論では 2.9 節で述べたとおり、発話は外的世界と言語表現とをつなぐ心的領域に存在する要素を使用して行われると考えているので、Ws/Wp のいずれかに要素がなければその要素について語ることはできないと考える。また、このことも前章で既に述べたが、特に制約がない場合には、全ての要素は Ws に登録される（その制約については 6.4.3 節を参照）。したがって「明石家さんま」は、それを知っている話者であれば、それを Ws 内に登録することができる。

ところで個々の話者の Ws 内に存在する「明石家さんま」は全て一律に同様のものだろうか。Ws 内の要素は一種の「写真／絵画的イメージ」であるとした。彼をイメージする場合、どのような場面の、どのような表情のどの角度から見た彼をイメージするかは、話者によって大きく異なるだろう。また、そのイメージも散髪したての彼なのか、夏服を着た彼なのか、笑う彼か怒る彼か等々によって微妙に違っている。さらに、話者によっては彼の身体の一部を強調して登録するかもしれない。このように考えると、同じ「明石家さんま」という名前で指される対象は、このような微妙なずれが積み重なって話者によってかなり異なることになる。3.3.3 節で「話し手にとって指示的」であるという概念を提示したが、以上のような観点から考えると Ws 内の要素（例えば「明石家さんま」）は、「話者にとってのみ指示的」な要素であると言えるのである\*5。

「明石家さんま」のような、現実世界におけるその対応物は唯一であると考えられる対象物の場合でも、上の議論で分かるように個々の Ws に登録された対象は異なっていると考えられる。これが普通名詞の場合にはなおさらである。たとえば次の例における「おじいさん」を考えてみよう（「むかしむかし」「あるところ」という表現も、Ws 内に登録する場合には、ある定的な時間／場所に一応固定されると考えられるが、今は無視する）。

---

\*5 もちろん、実際の世界には「明石家さんま」は唯一人であるという、世界に関する知識が働くことにより、全ての人に共通に「明石家さんま」という名詞が固有名詞として認識される。このような観点からすれば Kripke (1972) の「厳格な指定表現 (rigid designator)」という概念も、話者にとってのみ厳格な指定表現であるものが、世界に関する知識が働くことによりある程度普遍的に「厳格」になるだけなのかもしれない。

(14)むかしむかし、あるところにおじいさんが住んでいました。

繰り返すが、本論のモデルにおいては特別な理由がない限りは、名詞は全て Ws に登録される。したがって「おじいさん」も Ws に何らかの「写真／絵画的イメージ」として登録されなければならない。この要請によって、個々の話者は、過去の自分の経験や記憶などを頼りに「おじいさん」のイメージを作っていく。ある話者は白髪の立派なあごひげを生やした、百姓のイメージを描くかもしれないし、立派な武士の姿を思い描くかもしれない。談話が展開するにつれて、「おじいさん」の属性は言語的に導入され、それにとまって Ws 内の要素は次々に変化していくが<sup>\*6</sup>、(14)の文のみから得られる Ws 内の「おじいさん」は、話者によって大いに異なるはずである。

「映像化」とは以上のように、話者が要素を Ws に「写真／絵画的イメージ」として登録しなければならないという要請を守るために、その要素に対してイメージを与えることで、その操作によって得られる映像は個人によって随分異なっていると考えられる。結果、Ws 内の要素は「話者にとってのみ指示的」なのであり、Ws は話者が独断と偏見で創り上げたイメージの世界であるということになる。

ところで、「問題／理論」などの抽象的な名詞の場合には、この「映像化」とはどのようなものと考えられるだろうか<sup>\*7</sup>。例えば「コノ問題」と言った場合、我々はどのようなイメージを「問題」に対して構築するのであろうか。この問いに対しては、筆者は現段階では明示的に答えることはできない。本論では Ws の要素は「変項ではない」としており（前章を参照）、かつ Neale(1990)にしたがい Ws を用いて表される名詞は object dependent であるとしたので、「映像化」は Ws 内に object を構築しなければならないという要請から出た操作である。同じような問題は「心／勇気／性格」などの一般的に抽象名詞と言われているものに当てはまる。

---

\*6 Ws 内の要素は、一度登録されれば修正できないようなものではなく、随時修正されていくと考えよう。

\*7 この点に関しては、本章のもととなった堤(2002b)を発表した際に、金水敏先生よりいただいた指摘による。

Ueyama(1998:182-4)は、D-indexed NPs という概念を提出している。これは簡単に言えば、話者が直接的経験により（文法とは）独立して指示的になる名詞のことである。SR (Semantic Representation) では[John]<sub>D-1</sub> は $\sigma^0(1)^8$  に書き換えられるが、それが指す個体(individual)が何／誰であるか、またそれが存在するか否かは文法の外の問題であるとされている(p.183)。

我々が Ws 内の要素として考察しているのは、この文法の外の要素のありようであると考えられる。Ueyama(1998)は金水・田窪(1996)、黒田(1979)を引いて、話者の直接的経験により指示的になるとしているが、前章でも述べたとおり、経験という概念は本論では採用していない。我々は経験に関わらず、とりあえずその対象に何らかの具体的イメージを与えているのである。Ueyama(1998)の議論と本論を考えあわせれば、「映像化」された要素は D-indexed NP として番号を付けて数え上げ(numerate)られ、SR では上のような表示になると考えることもできよう。その意味で Ueyama が指摘するとおり、 $\sigma^0(n)$ は定数(constant)であり、文法がこの値に影響を与えることはない(p.183)。このように考えるならば、Ws と Wp の対立は結局のところ変項(variable)と定数(constant)という対立であるとしてしまってもいいのかもしれない。ただ、定数によって指される対象が（文法の外で）どのようにして構築されるかは、本節のように別に考えなければならない問題であると考えるのである”。

#### 7.4.4 仮説

前節の議論により、Ws について(15)のようなことが言えるだろう。また、7.4.2 節での

---

\*8  $\sigma^0 = \{ \langle 1, \text{John} \rangle, \langle 2, \text{Mary} \rangle, \langle 3, \text{Bill} \rangle, \dots \}$  (Ueyama(1998:182))

\*9 Ueyama(1998)に関する議論も堤(2002b)における金水先生からのコメントに答える形でつけ加えた。Ws が文法の外であるのなら、Wp も文法の外のものであるとして、数え上げの段階で変項に置きかえられるとすべきかもしれないが、この問題は機会を改めて論じたい。また、変項が何に束縛されて値を得るかという問題についても別に考えなければならない。堤(1998b)では文脈指示においては、ヨあるいは数量詞によって束縛されると考えている。現場指示においては、対象が存在するということが、自動的にヨを導入すると考えればそれで事足りると考えられるが、今はこれ以上は言及しないでおく。

「聞き手の領域」に関する語用論的制約(9)を再掲しよう。

(9) a. 聞き手の領域を認めよ。

b. 聞き手の領域に存在するものに対して話者の優先権を主張するな。

(15) Ws

a. 登録される対象は、話者がそれを映像化して捉えている。

b. 映像化は、話者の独断と偏見によってなされる。

我々がいま問題にしているのは、なぜ(9)の制約が Ws の使用をキャンセルすることになるのかという点と、なぜそのことにより Wp の使用が認められるようになるのかという点であった。まず前者について考えよう。

Ws の要素は(15b)で述べたように、話者の独断と偏見によって「映像化」されるわけであるから、その意味において話者にのみ可視的である。その対象は話者が自分の記憶や経験などをもとに創り上げたものであり、その意味でそれは話者に属する話者の所有物である。話者の所有物である Ws を用いて発話することは、その対象が話者のものであると積極的に主張するようなニュアンスを帯びる。その対象が話者に属していると主張することは、(9b)で禁じられている話者の優先権を主張することに他ならない。そこで Ws の使用が禁じられる。これが第一の問題に対する答えである。

次に、なぜ Wp 内の要素が使用されるようになるのかという問題についてである。前述したとおり、本論のモデルにおいては Ws/Wp 内に要素がなければ発話は成立せず、いずれかの世界に要素が登録されていなければならない。聞き手が存在し、対象が聞き手の領域にあると認められる場合には上の議論により Ws の使用は禁止される。残された唯一の方略は Wp を使用することである。

本論で一貫して主張し続けていることであるが、Wp 内の要素は全て変項として登録されている。変項は文法によって用意された道具であり、だからこそ我々は、前章で議論してきたような束縛変項解釈や代行指示の解釈を処理することができるのである。前章での議論を思い起こしていただきたい。このような操作が必要な場合には、Ws の要素を用いることは全く不可能であり、そのような文は強い非文法性を示した。

(16)a. どの画家も、その／\*この作品が一番だと思っている。

b. チョムスキーとその／\*この著書

日本語母語話者が共通にこのような文法性判断を示すのは、このような現象に変項という、より普遍的な文法により用意された道具が関わっていることの現れであると考えることができる。

変項が文法的な道具であるとする、それは全ての話者に備わっており、それを用いて表現することで、全ての話者に処理可能なものとして客観的に表現していることになる。このような方法を Ws を用いた場合のそれと比較してみた場合、それはより客観的で冷静に指すようなニュアンスを与えることになると思うことはできないであろうか。少なくとも、このような Wp を用いた指示の仕方は (9b) の制約を破るものではないことは明らかである。以上のような理由により、Ws の使用がキャンセルされるような状況では Wp が唯一使用できる候補として残り、かつそれを用いることが (9b) に抵触することがないので、ソ系列指示詞が聞き手の領域を指すのに適しているということになるのである。

本章でのこのような分析は、ソ系列指示詞の基本的な意味の中に現場指示用法に適するものが存在すると考えるのではなく、Ws/Wp 内に登録される要素のあり方と、それによって派生する効果を我々がうまくコミュニケーションに利用しているということを主張しており、この意味において現場指示用法におけるソは語用論的な条件によって出現すると考えるものである。

このように、ソが現場指示において出現する理由を語用論的な理由に求めたのは何も筆者が最初ではない。金水(1999)は次のように述べて、筆者と同様であると思われる見解を述べている。

(17)・・・ソは直示においてもさらに人称区分と距離区分に分かれているのであるが、いずれもプリミティブな用法というより、コミュニケーション上の要請により隙間を埋める充填材的な手段として適用されているのである。(金水(1999:87)より引用)

本節では、まず現場指示用法のソが聞き手の存在に大きく依存していることを述べ、現代の標準日本語においては、話者は聞き手の領域を設定し、その領域に属すると考えられるものに対しての話者の優先権を主張してはならないという語用論的制約を仮定した。そ

のうえで、Ws に登録される要素に適用される「映像化」という操作に考察を加え、それが話者の主観によってなされ、したがって Ws 内に登録される要素を用いることは、その対象に対する話者の優先権を積極的に主張することになり、そのことが語用論的な制約に抵触するのでコ／アの使用がキャンセルされると考えた。逆に Wp を使用することは、全ての話者に共通に処理可能な変項を用いて指すことになり、これが話者の優先権を主張しないというニュアンスを帯びることからソの使用が認められるという分析を提示した。次節以降では、この仮説を提示する論拠を二点ほどあげ、その後この分析によってもたらされる利点について述べたい。

## 7. 5 分析の論拠

前節までの分析で主張していることは、Ws/Wp の特徴から得られる派生的効果を、我々はうまく利用し、(9b)の語用論的制約を回避しているというものであった。本節ではこのような分析を行う論拠について考察する。一点目は(9b)のキャンセル可能性、二点目は文脈指示における現象との関連である。

### 7.5.1 制約のキャンセル可能性

まず一点目であるが、(9)はあくまでも語用論的な制約であると主張した。だとすると、この制約は状況がととのえばキャンセルすることができるということになる。つまり、明らかに聞き手の領域に存在すると考えられるような対象を指してコで指示することが可能であるはずである。このような例は Hoji et al.(2000)があげている次のようなものである。

(18) (暴君が部屋の片隅で白い椅子に座っている。もう一方の隅には赤い椅子が置いてあり、彼の家来がその椅子に座っている。彼は家来に話しかける)

よく聞け。 この／その／\*あの椅子はなあ、わしが北京から持って帰ったのじゃ。

(Hoji et al.(2000:18)より引用、括弧内の原文は英語)

(19) お、 この／その宇治金時、うまそうじゃん。俺も これ／それにするよ。

このように、話者のその対象への思い入れが強い場合や、何らかの理由によって精神的な近接性が感じられるような場合にはコを用いて話者の優先権をあえて主張することもあり得る。従来、(18,19)のような例は「包合型視点」「対立型視点」という、視点の違いとし



て説明されることが多かったが（三上(1955)、木村(1992)、金水(1999)等）、本論の立場から考えればそれは(9)の制約のキャンセルであると捉えることができる。

ただし、(18)でアが言えないという点は説明が必要である。(9)の制約は非常に強いと考えられる。聞き手が手に持っていたり、座っていたりして、体の一部に接触しているような場合には(18)のように、かなりの状況を設定しないとコノは使用できない。だとすると、この制約をキャンセルする唯一の方略は、コ系列指示詞を用いてその対象の優先権をあえて主張することのみということになる。コ／アはともに Ws 内の要素を指すものである(第六章)が、その違いは話者がその対象を近いと捉えるか遠いと捉えるかである(Hoji et al.(2000))。あえて(9)の制約をキャンセルしてまで話者の優先権を主張したのにも関わらず、それを自分からは遠いとすることは、ある意味矛盾であり、(9)をキャンセルするための十分な動機とはならないのである。

#### 7.5.2 文脈指示における現象

Ws を用いることをあえて避け、Wp を用いなければならない現象は文脈指示にも存在する。前章 6.4.2 節では次のようなデータをあげた。

(20) A:僕の友達に山田という人がいるんですが、この男はなかなかの理論化で・・・

B:その／??この人は何歳くらいの人ですか？ (金水(1999:77-8)より引用)

すでに何度か述べていることであるが、本論の枠組みでは話し手 B の Ws 内にも基本的には「山田という人」が登録されると考える。その際、B は彼の独断によって A の Ws 内の山田(A)とは全く別の山田(B)を映像化によって作り上げる。しかし、山田(A)と山田(B)は随分異なったものである可能性が高く、それをそのまま使い続けることはコミュニケーション上の制約から禁止される。この制約とは概ね次のようなものであると考えられる。

聞き手(B)がコノを使用する場合、それは Ws(B)の山田(B)を用いていることを話し手(A)に伝えており、聞き手(B)が山田(B)で山田(A)を同定できるという表示を行ったに等しい。このままでは、この状態は修復されることなく談話が続き、誤解を招きかねない。このような状況を避けるためにコノは使用されない。また、(20B)においてコノを使用すると、山田(B)=山田(A)であるという前提での聞き手(B)の発話としては矛盾したものであるとも考えられる。(20B)の発話は、山田(A)の属性を問うものであるが、山田(B)=山

田(A)であるとするならこのような質問をする必要性がそもそもないからである。以上のような結果として、聞き手(B)はコノ人とは言えなくなる。一方、Wsの要素を用いてもコミュニケーションに支障がないような文脈ではこの制約はキャンセルされる。

(21)A:昔むかし、あるところにおじいさんが住んでいました。この／そのおじいさん  
はある日、山へ柴刈りに行きました。・・・(話が続く)・・・。

B:このおじいさんは、その後どうなっちゃったの？

(21)においては、おじいさん(A)とおじいさん(B)は概ね同一であると判断できるほどに談話が進んでいると考えられる。このような場合にはコノを用いることもあり得よう。(20)においても、ある程度談話が進行した段階でなら「僕もコノ人／山田さんに会ってみたいなあ」と言えるかもしれない<sup>\*10</sup>。

ところで、このデータは別の分析の仕方もあり得る。つまり、聞き手(B)は話し手(A)が導入した対象に対して聞き手の領域に属するものと認め、(9)を適用しているのだとするやり方である。このような分析に立つならば(21B)でコノが使用できるのは、聞き手(B)の「おじいさん」に対する何らかの思い入れが影響し(9)をキャンセルしたのだと捉えることもできる。

この二つの分析は、どちらが正しいかということを議論する必要があるのかもしれないが、筆者はそのどちらもが妥当なものであると考える。文脈指示（今、「先行詞と照応する指示」としてもいい）では基本的にコ／ソの両者が使用される可能性があることはすでに第三章でみたが、対話における文脈指示の場合には、聞き手が存在することにより、先行詞が相手によって導入される可能性が出てくる。この場合、相手の先行詞を自分のWsに登録して使用すると、上に見たような誤解を招く恐れが生じるが、それは同時に相手の

---

\*10 このような分析法は、前章において排除した聞き手の知識を再び考慮に入れるものであるとの反論があるかもしれない。しかし、この議論はあくまで語用論のレベルであることに注意されたい。本論での議論は、語用論のレベルにおいてまで聞き手の知識を徹底的に排除するものではない。この点は田窪・金水(1996)や堀口(1978)、黒田(1979)と同様の見解である。

領域に存在するものに対する、自分の優先権を主張することにもなるのである。

本章 7.2 節で、ソは文脈指示から現場指示へと拡張したとする金水(1999)、岡崎(2001)の節を紹介し、本論でもこの見解を踏襲すると述べたが、このような誤解を避けるために用いられたソが、たまたま聞き手の領域に属するものを指すことから、現場指示用法への拡張の足がかりができたのではないかと考えられると思う。

つまり、文脈指示の中にも現場指示と同じような語用論的な制約によってコ系列指示詞の使用がキャンセルされる場合があり、また、このような現象にも(9)の仮説を用いて分析することが可能であるとするならば、現場指示用法と文脈指示用法を関連づけることになり、またこの仮説の有効性を示すことにもなるのである。

## 7. 6 分析の利点

本章での分析には、どのような利点があるのだろうか。本節ではこのことについて考察したい。

### 7.6.1 Hoji et al. (2000)、田窪(2002)の問題点

Hoji et al.(2000)は、指示詞の現場指示と文脈指示の用法を統一的な理論で説明しようとしたものであるが、そこでも本章と同様に、ソ系列指示詞については文脈指示の用法から現場指示を捉えるという方向が示されている。彼らの理論については、本章の付録として紹介したので参照されたいが、その主張は田窪(2002:200)の次の記述に端的に現れている。

(22)「ソ系列」は、聞き手のいる場合の遠称であると考えることができる。

(22)の記述は、聞き手がない場合にはアで指すような場所やものが、聞き手の領域に所属する場合にはソで指されるということを述べていると思われる。つまり、独話などにおいてはアが使用されることが、聞き手がいる場合においてソが使用されるための必要条件であるということになる。

しかし、そうであるとする次のような例は説明できない。

(23) (話者から 50cm ほど離れたところにあるペンを見て)

「この／＼あのペンは誰のだろう？」

(24) (話者から 50cm くらい離れて聞き手がペンを持って座っている)

「この／その／＼あのペン、随分高そうだね」

重要なのは(23)においてはアノが使用できないという点である。話者から非常に近い場所に存在するペンはアノとは指せない。にもかかわらず、同じ状況に聞き手が存在すればソノは使用できる。Hoji et al.(2000)、田窪(2002)の説にしたがえば、このような例の説明には窮するが、本論における説明では、ソの使用の前提として独話でのアの使用には言及しないのでこのような問題は生じない。

#### 7.6.2 曖昧指示

金水(1999)で曖昧指示と呼ばれている用法は、本発表で用いたモデルを用いれば説明が可能である。

(25) A:おでかけですか

B:ええ、ちょっとそこまで。

(26) A:私のメガネ知らない？

B:その辺に置いてるんじゃないの。

(以上、金水(1999:85)より引用)

このような例は、金水(1999)が分析しているとおり、ソを用いることによって指示対象を特定しないという効果を狙ったものであると考えることができる。(25)では話者は自分の行き先をはっきりと言いたくはないので、あえて Wp 内の要素を使用することによって曖昧にしているのである。また(26)でも、メガネがある場所はまだ分からないということを表現するのに Wp の要素は好都合である。このように、Wp の要素を用いて指示対象をぼかすことができるのも、Wp の要素が変項だからであり、その値を特定させずに何だか分からないもの(x)として表すことが元々できるからに他ならない。曖昧指示は、このような Wp の特徴を我々がうまく利用している表現であると考えることができる。

### 7.6.3 聞き手の存在

本章の分析では、聞き手の存在はあくまで語用論的制約として考慮されると主張している。田窪・金水(1996)は、「聞き手知識に関する原則」として次のようなものを立てている。2.6節、6.2節でもとりあげたが再掲しよう。

(27) 聞き手知識に関する原則：

言語形式の使用法の記述は、その中に聞き手の知識の想定を含んではいけない。

(田窪・金水(1996:62)より引用)

聞き手の知識を考慮するのは全てコミュニケーション上の問題とするのである。

しかし、現場指示の用法においては金水(1999)、田窪(2002)などで、先に紹介したような「包含型視点」「対立型視点」という概念を用いており、聞き手の知識は排除しても、聞き手そのものは排除していないようである。本章の分析が正しいものであるならば、この問題は(9)の制約をキャンセルするかしないかということになり、聞き手の存在そのものを語用論の問題とすることになるだろう(更なる考察が必要である)。

### 7.6.4 二項対立vs. 三項対立

本論の立場から英語の指示詞の体系を見てみよう。英語の指示詞の体系は、よくいわれるように二項対立であり、基本的に距離の区分に関係する。本論のモデルに則して考えるならば、これらは両者ともWsに関係するような指示詞であろう。さて、英語において、聞き手が手に持っているものを人称代名詞を用いずに、あえて指示形容詞を用いて表現するとすればどのようなになるか。服部(1968)によれば、「話し相手の勢力範囲内にあるものは、ふつう話し手の勢力範囲外にあるから、thatで表されるけれども、日本語のソレのような、特に聞き手の勢力範囲内にあるものを指す形式がないから、日本語ならソレというところをthisということもときどきある。(服部(1968:75)より引用)」ようである。これは、言語によってはWpを介して、わざわざ聞き手の領域を認めるということはせずに、現場指示においては基本的には全てWs内のみで処理するのだと考えられないだろうか。もしそうであるならば、少なくとも日本語と英語の違いは、Wpを用いることに関する語用論的制約の有無ということになり、二項対立であったり三項対立であったりする指示詞の体系が、一つの単純なモデルを用いることで説明することができ、非常に興味深い。も

つとも、このような分析により、なぜ英語にはソノに対応するような語が存在しないのかという問いに答えることは不可能であるが、他の言語や日本語の方言にあたることによって、新たな知見が得られるかもしれない問題である。

## 7. 7 第七章のまとめ

本章では、文脈指示に関するモデルを現場指示における人称区分的な用法に援用することを試みた。その結果、少なくとも人称区分的な用法においてはソ系列指示詞は聞き手の優先権を考慮せよという語用論的な制約によって出現するのだという仮説を得た。また、このように考えることの利点も四点ばかり指摘した。

本章で残した問題点として最大のものは中距離のソをどのように捉えるかという点である。中距離のソとは、聞き手の領域に属せずに、かつ話者から遠くもなく近くもない距離にある対象を指す用法で、次のようなものが典型的な例としてあげられることが多い（阪田(1971)に豊富なデータが挙げられているので参照されたい）。

(28) a. (タクシーの中で) 運転手さん、そこの角で降ろしてください。

b. ねえねえ、今、そこのスーパーで大安売りをやっているよ。

これらの例においては、聞き手はどちらかといえば話者の近くに存在し、少なくともソコで指示される場所には存在せず、したがって(9)の制約が適用されるとする保証はない。また、ソコで指されている場所は特定のであり、その意味において曖昧指示の用法でもない。このような場合になぜソが出現するのかについては、現段階では本論のモデルを用いては答えを出すことができない。

この問題について、本格的に取りあげ議論しているものは、筆者が見た限りでは少ない。しかし、阪田(1971)、金水・田窪(1992:169,188)、金水(1999)などが部分的にこの問題を扱っており参考になる。金水(1999:86-7)の記述を箇条書きにしてまとめると次のようになる。

(29) a. ”中距離” という領域は、近距離、遠距離が確定した後に寄生的に成立する領域でプリミティブとは言えない。

b.中距離のソも独話では現れにくく、聞き手への教導、注意喚起等に多く用いられる。

c.中距離のソはソコ、ソノ辺等の場所表現がほとんどを占めるが、これは空間が本来、連続的・一体的で境界を持たないために、話し手の積極的な焦点化をまって初めて区分が成立する。

これらのいずれもが重要な観察であり指摘であるが、これのみをもって本章の分析にあてはめることはできない。というのは、中距離のソは人称区分的なソとは異なり、基本的にアとの置き換えが自由であるからである。本論の分析を適用して、中距離のソとして聞き手の領域を指すとするには無理があろう。

(30)a. (タクシーの中で) 運転手さん、あそこの角で降ろしてください。

b.ねえねえ、今、あそこのスーパーで大安売りをやっているよ。

ただし、ソコで指す対象をアソコで言い換えることはできても、アソコで指す対象をソコで言い換えることは必ずしも可能ではない。(30a)において「あその角」が100mほど先であれば、ソコとは言えないだろうし、(30b)においても1kmも離れているスーパーを指して「#ソコのスーパー」とは言わないであろう。また、中距離のソは独話では現れないという指摘は、疑う余地は十分にあるように思う。筆者の内省では、外に見える自転車を指して「そこの木の枝を使ってたき火をしよう」とか「あの本は確かそこに置いておいたはずだけど」などとは言えるように思う<sup>\*11</sup> (もちろんこの場合もアで指すことには問題はなかろう)。いずれにせよ、この問題は一朝一夕に答えが出せるようなものではなく、さらなる研究が待たれるところである。

---

\*11 この点に関しては、田野村忠温先生(p.c.)も同様の直感を持っておられるようである。

## 第八章 指示詞モデルからみたア系列指示詞

### 8. 1 はじめに

第六章と第七章で構築してきたモデルは、文脈指示におけるコ／ソの使い分けや、現場指示にソ系列指示詞がなぜ現れるのかといった難問に対する答えを、統一的に与えてくれるものであることを見てきた。

本章では、主にア系列指示詞について考察する。近年、ア系列指示詞の全ての用法は、直示的な用法からの拡張により説明が可能であるとされている(三上(1970)、田中(1981)、春木(1991)、庵(1995b)、金水(1999))。筆者も、この点については同様の見解を持っている。このことにより、真の文脈指示(庵(1995b)の「狭義の文脈指示」)においては、アが使用できないという事実も記述的には説明が可能となる。しかし、それでは真の文脈指示とは何なのか、また、対話における文脈指示などではア系列指示詞が使用できる(いわゆる観念指示用法)が、この場合にはなぜアの使用が許可されるのかなど、答えられなければならない問題はまだ残っていると思う。

本章では、これらの先行研究における指摘や主張を正しいものと考えたうえで、本論で構築中のモデルの中で、彼らの主張がどのように捉え直せるかを検討する。まず前章までのモデルの不備を指摘し、これを補う仕事から始める。その後、Hoji et al.(2000)の議論を援用し、コ系列指示詞とア系列指示詞の違いについて考える。さらに金水(1999)の「直示」の定義をこのモデル内で考察した後、ア系列指示詞の記憶指示用法について議論する。金水(1999)の記述がほぼ正しいものとして議論を進めるが、彼が語用論的制約として説明したものの中に、うまく説明がつかないと思われるデータが存在することを指摘する。これらのデータは、庵(1997)で考察されているテキストのタイプに目を向けることで説明が可能になるという分析を提示する。庵は「狭義の文脈指示」においてはア系列指示詞が使用できなくなると指摘しているが、この現象も本論のモデルを用いれば無理なく説明ができることを最後に主張する。



## 8. 2 モデルの問題点と補強

### 8.2.1 問題点

前章までのモデルにおける、コ／ソの意味とは次のようなものであった。

(1) a. コノは Ws に登録された要素を指す。

b. ソノは Wp に登録された要素を指す。

現段階では、暗黙の了解としてア系列指示詞も Ws の要素を指すと考えている（金水・田窪(1992:186)も同様の見解を示している）。したがって、アノの意味をこの枠組みにしたがって規定するなら、(1a)のコノをアノに変えれば事足りることになる。しかし、このような考え方の下では、コが使用できればアが使用できることを予測してしまい、好ましい一般化とは言えない。この予測が誤りであることは、(2)を考えれば明らかである。

(2) a. 順子は、「あなたなしでは生きていけない」と言っていた。その／\*この／\*あの順子が、今は他の男の子供を二人も産んでいる。 (庵(1996b:32)を修正)

b. 「あなたなしでは生きていけない」などと言っていた\*その／\*この／あの順子が、今は他の男の子供を二人も産んでいる。 (『言語研究』の査読者の指摘による)

### 8.2.2 モデルの補強

現段階でのモデルでは、コとアの区別がうまくできないという問題点が存在することを、前節で述べた。前章までの段階では、扱った現象が主に文脈指示のソ／コや現場指示のソであり、ア系列指示詞を扱うことがなかった。文脈指示においては基本的にアは現れない（庵(1995b)）し、前章では現場指示のソのみに絞って話を進めてきた。しかし、アとコを区別することが出来ないという問題は、モデル自体にとっては非常に重要な欠陥である。そこで本節では、以下の議論のための準備として、この欠陥を克服すべくモデルを修正、補強することにしよう。

第六章において、このモデルの定義を行った際にあげた(3)を再掲するので見ていただきたい。

### (3) Ws, Wp

- a. Ws は話者が外界や文脈から構築する世界である。 ( $\therefore Ws \neq Wo$ )
- b. Wp は Ws と Wo との中間的な存在(interface)である。
- c. Wp 内の要素を介して Ws 内の要素を指示することを間接指示といい、Wp 内の要素を介さずに Ws 内の要素を指示することを直接指示という。
- d. Wp 内の要素は全て変項である。Ws 内の要素は全て変項ではない。
- e. 意味解釈は、Ws, Wp 内の要素のいずれかを用いてなされる。
- f. Ws 内から意味解釈に選び出される要素を指示的、Wp 内から選び出される要素を非指示的と呼ぶ。

第七章では、(3)を提示した上で Wo については単に「外的世界」であるとのみ記述した。しかし、この記述だけで規定できてしまうほどに Wo は単純ではない。そこで Wo について少し考察してみよう。Wo は、2.9 節でも論じたとおり高橋(1956)の「場面」であり、金水(1999)の「外的世界」である。しかし、「外的世界」とはいわゆる客観的世界、つまり我々が現実存在している世界のことなのであろうか。もしそうだとすれば、第六章でも述べたとおり、昔話などの架空の対象を考えると不都合が生じることはすでにみた。そこで、金水(1999)と同じ談話管理理論に基づいて論を展開している田窪・金水(1996)の記述を見てみよう。以下に引用する。

・・・この心的領域は、従来の談話領域にあたるもので、記憶ベースへのアクセスパスを定義するインデクス、あるいはポインターの格納場所のようなものとして捉えることができ、記憶ベースと言語表現の間のインターフェイスの役目を果たす。言語表現は、記憶や知識そのものに言及するのではなく、記憶や知識内容へのインデクスを操作するものであると考える。

(田窪・金水(1996:59-60)より引用)

ここでは、金水(1999)で「外的世界」と呼んでいるものを「記憶ベース」として捉えている(Takubo and Kinsui(1997)でも memory-base とされている)。つまり、外的世界は記憶ベースのことであり、この立場を採るならば、外的世界とて話者の心の中に存在すると考えられるのである。では、「記憶ベース」とは何であるかということが問題になる。

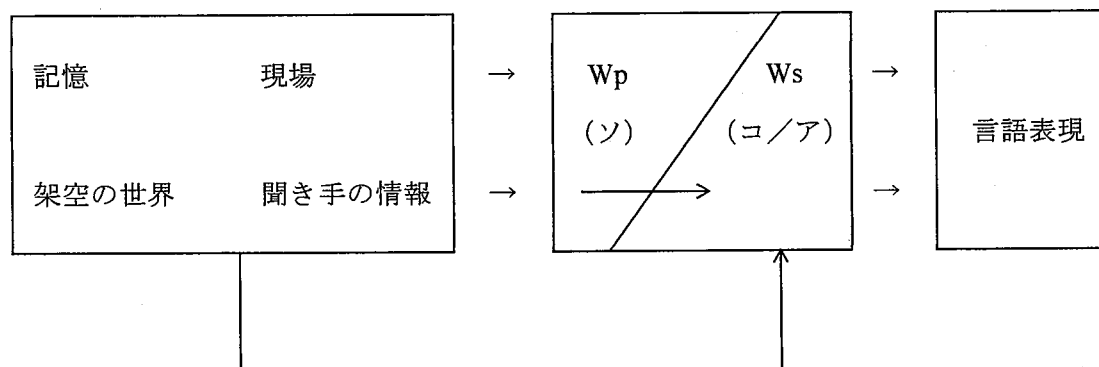
Ws/Wp には、様々な要素が登録される。登録されるためには、その要素は Ws/Wp の「外」

に存在している必要があるであろう。このような観点からまず、Wo とは、Ws/Wp に登録されるべき要素が、予め存在している「外」の世界であるということができる。「外」と言っても、それは単に Ws/Wp の「外」という意味であって、話者の「外」という意味ではない。Wo はあくまで話者の頭の中に存在する世界であると考えておく。では、Wo にはどのようなものがあるだろうか。

最も理解しやすい「外」の世界は、話者が今存在している空間である。この空間を現場と呼ぼう。現場は、客観的に存在している世界を、話者が話者の目を通して知覚、認識し、話者の頭の中で構築したものであり、この意味において、あくまで話者の頭の中に存在する。「記憶ベース」の一部を構成するということもできるかもしれない。

対話の中で話者が聞き手から得た情報も、Wo の中に世界を構築する。また、ニュースや新聞などから得た情報も同様に Wo 内の要素である。これを聞き手の情報と呼ぼう。これらが過去のものになれば、話者が自分で経験して得た情報などとともに、過去の記憶として収納される。さらに、架空の話をする場合や、将来について語る場合などには、臨時的にそれに対応するような世界が Wo 内に構築されると考えよう。Wo には、少なくとも上にあげたような、様々な世界が構築され、その世界から話者は、必要な要素を Ws/Wp に転送し、登録して使用していると考えられるのである。このイメージを図示すると、(4) のようになる。

#### (4) Wo



### 8.2.3 直示の再定義

金水(1999)は、コ系列指示詞およびア系列指示詞は、ともに直示的な性格がその本質であるとした。筆者も、この点はその通りであると考え。直示の定義を、金水(1999)から

引用する。

(5) 直示の定義：

談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むことである。 (金水(1999:68)より引用)

この定義を、(4)と照らし合わせて定義し直せば、直示とは「Wo に存在する要素を、Ws に転送して用いること」であるとすることができる。Wp の要素は、いったん変項に置き換えられ、それを介して解釈されるので、Wp 内の要素を用いることは非直示的であるということになる。

ここで、(4)で Wo を構成するとしてあげた架空の世界、聞き手の情報、記憶、現場の要素は全て直示的に（つまり、Ws の要素を用いて）指すことができるかを確認しておこう。まず、架空の世界の要素を直示的に指すことができるかという点である。この点については、金水(1999)が「指示対象が現実世界に『实在』するか否かということとは独立した事象である(p.77)」と、正しく指摘しているように、話者が頭の中の世界の対象を、Ws 内で映像化し、それを指すことは可能である。

(6) 昔むかし、おじいさんが住んでいました。この／そのおじいさんは、それはそれは心のやさしい人で、野良犬を集めてはえさをやっておりました。

(7) 今から、お話を作ります。主人公は医者にしましょう。名前を仮に田中さんとします。この男はとても腕のいい心臓外科医です。 (金水(1999:77)より引用)

次に、聞き手から得た情報を直示的に指すことも潜在的には可能である。例えば(6)の話を一通り聞き終えた子供が(8)のように言ったり、A の旅行の計画を聞いた B が(9)のように言うことが可能なことは、すでに確認済みである (6.4.2 節および 7.5.2 節)。

(8)・・・最後に、このおじいさんは大金持ちになったんだね。よかった！

(9) A: 次の旅行は鳥取から島根を抜けて、帰りは山陽方面を見て帰ろうよ。

B: この旅行はおもしろくなりそうだね。

また、これも 6.4.2 節で報告したが、一部の九州方言では発話以前に聞き手から得た情報を、直示的に指すことも可能なようである。

(10) A: ほら、僕がこないだからずっと噂しよる小坂ゆーやつがおるやろ？ あいつが今度うちを訪ねてくることになったんよ。

B: 私もあの人に一度でいいから会ってみたいと思うとったんよ。

(11) A: 今度出張で、東京に行くことになったんだよ。

B: 羨ましい！ 私もあそこに行ってみたいっちゃ。

このように、聞き手の情報を直示的に指すことも潜在的には可能であるが、コミュニケーション上の制約が働いて、(8,9)においてはソで言う方が自然であり、(10,11)に関しては標準語などではアは全く無理で、ソが選択される。

次に、記憶内の要素であるが、この中の要素はコ／アどちらでも指せる。

(12) a. 友達に平岩君というのがいるんだけど、この男が優れていてね・・・

b. 友達に池谷さんというのがいるんですけど、あの人なんか、適任だと思います。

最後に、言うまでもなく現場指示の要素は直示できる。現場指示で問題となるのは、逆になぜ非直示であるはずのソ系列指示詞が現れるのかということであったが、この点については前章で詳しく議論したのでここではこれ以上立ち入らない。

いずれにしても、Wo の要素を Ws に転送して直示的に指すことは可能なのである。その意味において、Wo は、金水(1999)が言うように、言語文脈からは独立していると考えることができる。

本節での議論をまとめておこう。8.2.1 節では、前章までで提示したモデルを概観し、その問題点を指摘した。Wo の定義が十分ではなく、その結果コ系列指示詞とア系列指示詞を区別できないというものであった。8.2.2 節では、この不備を補うために、Wo の性格と、Wo を構成する世界について議論を行った。これをうけて 8.2.3 節においては、金水(1999)の「直示」の定義を、本論のモデルに照らし合わせて再定義を行い、Wo 内に存在する要素は、潜在的に直示的に指すことができることを確認した。次節では、コ／アの使い分けについて議論する。

### 8.3 コ／ア

前節では、金水(1999)にしたがって、直示とは言語外世界にあらかじめ存在する対象を、言語文脈に持ち込むことであり、本論の立場では、それは Wo の要素を Ws に転送することであると述べた。また、本論では金水(1999)にしたがい、コ系列指示詞、ア系列指示詞はともに、直示的な性質がその本質であると考ええる。そうであるならば、コ／アの使い分けは、Wo の要素のあり方、より正確に言えば、Wo に存在する要素を、話者がどのように認識するかによるということになる。では、コとアの違いは何か。

現場指示において、コ／アの基本的な違いは、指される対象を話者が近いと捉えているか、遠いと捉えているかという違いである。ここで Hoji et al.(2000)にしたがって、コ／アに次のような意味を与える。

(13)a.コ： 語彙的に[+Proximal]である。

b.ア： 語彙的に[-Proximal]である。

これは、コ／アがもつ一種の語彙素性の指定であると考えられる。三上(1955)の「近称」「遠称」を想起していただいてもよいと思う。

話者がある対象を「近い」と捉えるか「遠い」と捉えるかは、その対象に対する話者の気持ち次第であり、文法以外の要素によって影響を受ける (Hoji et al.(2000:17)、田窪(2002:200))。対象に対する話者の遠近に関する判断を、Hoji et al.(2000)にしたがって、それぞれ *non-proximal*/ *proximal* としよう<sup>\*1</sup>。この判断は、(現場指示においては) 外的世界に存在する対象を話者が見て下すものであるので、Wo において行われるものであると考えられる。一種の認知的な素性として[+proximal] [-proximal]をみとめ、Wo から心的世界に登録される際に、名詞にこの素性が添付(attach)されようと考えよう。そうすると、Wsに登録される名詞の中で、[+proximal]をもっているものは(13)によりコが、同様に[-proximal]のものにはアが使用されるということになる。

---

\*1 Hoji et al.(2000)では、*non-proximal*ではなく、*distal*という用語が用いられているが、本論では便宜上前者を用いる。

8.2.3 節において、8.2.2 節の(4)に図示した Wo 内の要素が全て直示的であることを確認するために、(6-12)の例文を提示した。その際には、特にコ／アの使い分けに言及することはせず、ただ、それらの例文が直示的であるということに焦点を絞って議論した。今、コ／アの使い分けに注目して、(6-12)を含め、各々の世界について検討していこう。

現場指示においては、8.2.3 節では例文をあげていないが、話者が[+proximal]と判断すればコが、[-proximal]と判断すればアが使用される。

(14) (50m ほど先にある建物を指さして)

- a. この建物が、二号棟です。
- b. あの建物が、二号棟です。

ところが、どのような距離にある対象でも、自由にコ／アで指せるわけではない。Hoji et al. (2000:19)、田窪 (2002:200) は、ある制約の下では[+proximal]とは判断できても[-proximal]とは判断できない場合があることを指摘し、この制約を COP (condition on proximal construal)、「近称制約」と呼んでいる。本論では、田窪 (2002) にならい「近称制約」という用語を用いることにする。

(15) (自分で手に持っている時計を指して)

- a. この時計は、先日恋人からもらったものなんだ。
- b. \*あの時計は、先日恋人からもらったものなんだ。

「近称制約」は、他の世界に対しても働く。聞き手との対話において、発話時点で話題に上っている要素や、架空の対象、未来のことを仮定して述べるような場合にはアは使用できない。

(16) (話者 A が話を終えて)

A: この／\*あのことは、二人だけの秘密だよ。

(17(=(6)を修正)) 昔むかし、おじいさんが住んでいました。この／\*あのおじいさんは、それはそれは心のやさしい人で、野良犬を集めてはえさをやっておりました。

(18) A: 来週の水曜日は、太郎の誕生日なんだけど来られる？

B: いや、この／\*あの日は都合が悪いんだ。

これは、三上(1970)がアについて、時間的遠方も指せると指摘したことを考えれば、現在や未来の時点は、時間的遠方とは捉えられず、必ず[+proximal]と判断されるということであろう。したがって、「近称制約」は(4)のWo内の世界の、記憶以外の世界に対して働くということである。

#### 8. 4 ア系列指示詞の記憶指示用法

一方、過去の記憶は時間的遠方と捉えられるため、ア系列指示詞で指される。現場指示においてもそうであるが、話者からの物理的距離が、[+proximal]であるとは決して捉えられないほどに離れている対象をコで指すことはかなり難しい。1km 以上先に、おぼろげに見える建物を指して「コノ建物」と言うためには、その建物が話者の所有物であるなどの、かなりの強い動機が必要で、少なくとも距離的には近いとは判断されないであろう。これと同様に、過去の出来事は、近いとは判断できないほどに時間的隔たりがあると判断され、コで指すことは難しい。

(19) こないだ見た、あの／＊この映画、おもしろかったなあ。

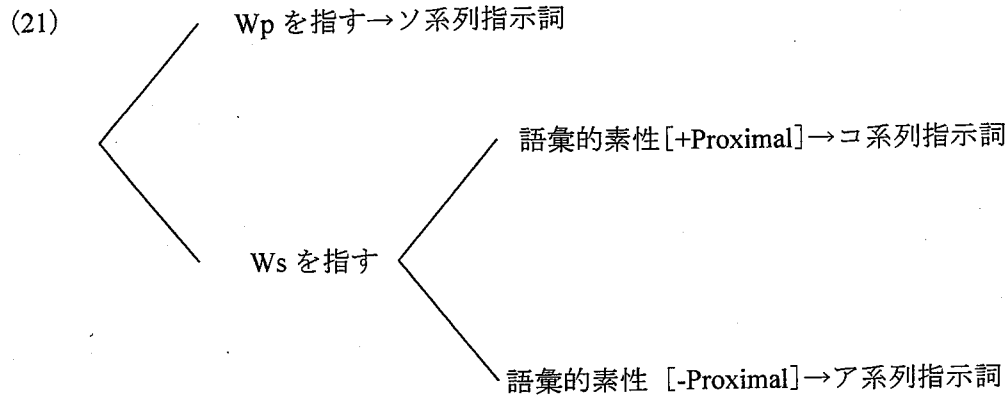
(20) A:先月行った、温泉宿、覚えてる？ほら、鳥取との県境にある・・・

B:あー、あの／＊この温泉ね。うん、覚えてるよ。

金水(1999)は「一般に、アの文脈照応用法と呼ばれるものは、すべてこの記憶指示用法である(p.72)」と述べている。この主張にしたがえば、アの用法は、現場指示と記憶指示の二つの用法のみであるということになる。筆者も、この指摘は正しいと考えている。だとすると、我々が[-proximal]と判断する要素は、現場指示用法の場合には話者からの物理的距離が、そして記憶指示用法の場合には時間的距離が、それぞれ「遠い」と判断されるということになる。いずれにせよ、アの意味としては Hoji et al.(2000)にしたがって、(13)のように[-Proximal]であるとのみしておけば十分であると思うのである。

この段階で、初めて本論における指示詞の全ての意味を提示したことになる。それを簡単にまとめておこう。





ところで、本論におけるアの分析は基本的に金水(1999)のそれを踏襲している。したがって、久野(1973)のように、「聞き手の知識」に言及せずとも、Wo 内の記憶の中にある要素でありさえすれば、アで指すことができると考える。久野(1973)と金水(1999)の、アに関する一般化を以下にあげておこう。

(22) アー系列： その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。 (久野(1973:185)より引用)

(23) (話者が) 直接に経験した過去の場面に関連づけられた対象であることがア系列を使用するための必要条件である。 (金水(1999:75)より引用、括弧は筆者)

しかしそれでも、アを使用した場合には「聞き手もよく知っている」というニュアンスがあることは、直感としては正しい。7.5.2 節で、Ws に登録されている要素を用いて話すことは、話し手の個人的な「映像化」を受けた要素を用いて話すことになり、コミュニケーションに支障を来す恐れがある時には避けられるという分析を提示したが、アの使用におけるこのような直感も、Ws の要素を用いることによって生じる副次的な効果であると考えられる。つまり、Ws の要素をアを用いて話すということは、そのことによってコミュニケーションに支障を来すことはない、話者は考えているということであり、聞き手の「映像化」と自分の「映像化」の結果がほぼ同じであると判断しているということである。同じ「映像化」を引き起こすためには、結局お互いの Wo 内の記憶に、同じ対象が登録されている必要があり、そのためには、「話し手、聞き手ともによく知っている」ということが必要になるのである。このことも既に金水(1999)が、「聞き手負荷制約」として一般化している。本論のモデルは、この一般化も無理なく理論の中に取り込むことができるの

である。

(24) 聞き手負荷制約：

聞き手が発話を処理する際にかかる負荷を最小にせよ。(金水(1999:75)より引用)

「聞き手の知識」を考慮することが、このモデルの副次的効果であることは既に述べたが、この効果が必ずしもいつも現れるものではないことも、黒田(1979)、Yoshimoto(1986)、金水(1999)らが指摘しているとおりで、「叱責、勧め、思い出語り等の文脈」では、「聞き手の知識」は無視される(金水(1999:77))。

(25) A: 賤ヶ岳の戦いって、どんな戦いだっけ？

B: えっ？ お前、あの有名な戦いもしらんのか。

(26) 学部四年生の頃が懐かしいよ。あの頃は、毎日みんなでパーティーをしていたんだ。

## 8. 5 テキストのタイプ

### 8.5.1 リンク

Wo 内の記憶に要素があれば、いつでもそれを Ws 内に転送して、ア系列指示詞が使用できるかといえばそうではない。金水(1999)は、「説明的・提示的な文脈」では、話し手は聞き手の知識を考慮して、義務的にソ系列指示詞を使用しなければならないと述べている(p.75)。

(27) 神戸にいいイタリア料理店があるんですが、こんどそこ／??あそこに行ってみませんか？  
(金水(1999:75)より引用、表記法は本論のものに合わせた)

しかし、この例文において、金水が言うように潜在的にはアが使用できるのであろうか。もし、アが使用できるのであれば、それは記憶内の要素を指すことになり、記憶内の要素は時間的遠方に存在するためにコでは指せない。前節での(19,20)の例文を想起されたい。ところが、(28)においては、やや座りは悪いものの、ココが使用できる。金水(1999)の説明では、アが言えずにソが言える理由の説明は可能であるが、コが言える理由の説明は不可能なのではないかと思われるのである。むしろ、「説明的・提示的な文脈」においては、

記憶内の要素は何らかの理由によって使用できなくなっていると考えられるのである。

(28)神戸にいいイタリア料理店があるんですが、結構いい料理を安く食べられるんですよ。こんど?ここ/\*あそこに行ってみませんか？

ここで「記憶内の要素が使用できない」ということについて、もう少し厳密に規定しておく必要がある。実際の言語使用にあたっては  $W_o$  から  $W_s$  に転送した要素を用いているのであるから、転送が完了した時点では  $W_o$  が使用できるかどうかは、これまでの議論からは無関係であるように考えられてきたからである。

しかしながら我々が考えてきたモデルは、2.9 節以来、外的世界と言語表現を結びつけるインターフェイスとしての心的表示であったはずである。2.9 節で提示した図を再掲しよう。

(29) 言語表現 → 心的表示 → 外的世界 (金水(1999:69)より引用)

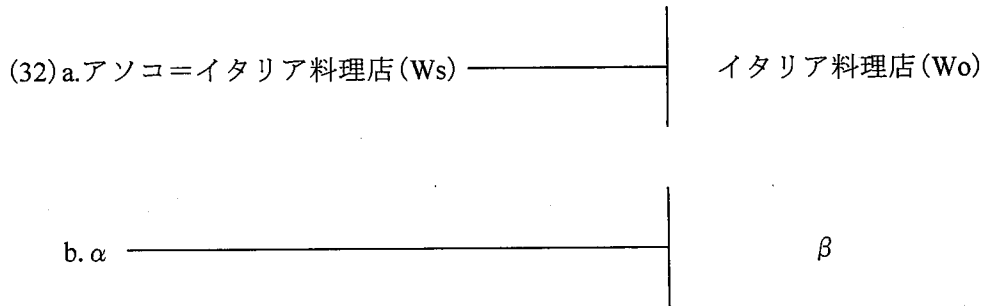
本章の議論によって、(29)の「外的世界」は話者が話者の中に描くところの世界である  $W_o$  であるとしたが、それにしても、 $W_s$  内の要素を指すことで、結果として  $W_o$  に存在する世界の対象を指していることには変わりはない。今、このようなことを示すために、 $W_s$  内におけるある要素 ( $\alpha$ ) とその登録元である  $W_o$  内における対応物 ( $\beta$ ) の間には、 $\alpha$  と  $\beta$  が同一のものであることを保証するようなリンクが存在すると考え、そのことを(30)のように表そう。このリンクは、メンタル・スペース理論でいうところの「同定関数」のようなものであると考えていただきたい。

(30)  $\alpha \longrightarrow \beta$

同様に、 $W_p$  の要素(x)から  $\beta$  にリンクがある場合は(31)のように表記する。

(31)  $x \longrightarrow \beta$

このように考えるならば、(28)において「記憶内の要素が使用できない」という状況は、何らかの理由によって、このリンクが絶たれた状態であると考えることができる。リンクが絶たれた(28)の状態を(32a)のように表し、それを一般化したものを(32b)で示す。



このような状況下では、Wo からの登録は可能であるが、それは一方向的登録であって、Ws/Wp から Wo への逆方向のリンクは作成されない<sup>\*2</sup>。

### 8.5.2 文脈指示とはどのようなテキストタイプか

前節で議論したような、Ws/Wp と、Wo とのリンクが絶たれる文脈は、典型的に文脈指示と呼ばれているものに現れるが、これらの例では、話者の知識の有無に関わらず、アは使用できずにコが使用できる場合が多い。少なくとも、これらの例においては、Wo の記憶内の要素は使用されていない（つまり、Ws/Wp からのリンクが絶たれている）ということになる。

(33) 今日未明神田で火事があった。この／その／\*あの火事で、三名が軽い火傷を負った。

(34) 次は、跨線橋東です。×××は、ここ／\*あそこから徒歩3分です。

(岡山中鉄バスのアナウンス)

---

\*2 次節での議論になるが、文脈指示においては常にこのリンクは絶たれた状態である。したがって参照されるのは Ws/Wp の要素のみであり、文脈指示を議論する際には本節での考察は直接的には無関係である。したがって、この議論が前章までの議論に影響を与えることはない。

- (35) 冬休みに旅行に行きました。・・・(中略)・・・能登半島の七尾と輪島という町まで、電車とバスで行きました。私はこの／その／\*あの地方のことはあまり知りませんでしたから、美しい村を見れば\*あそこで降りました。(堀口(1978)を修正)
- (36) a. 二階にかばんが置いてありました。私は?これ／それ／\*あれを取りに上がりました。
- b. 二階にかばんが置いてある。それ／あれを持ってきてくれ。

((36b)は、堀口(1978)より引用)

庵(1997)は、文脈指示とはどのようなテキスト・タイプであるかということを検討し、ここではア系列指示詞は使用できず、基本的にコ系列指示詞とソ系列指示詞の対立が存在するとした。だとすると、(28)の金水の例も、(33-36)の例と同様に、庵が言うところの文脈指示であるとするべきではなかろうか。もしそうであるならば、問題は、なぜ文脈指示の中ではア系列指示詞が使用できなくなるのかという点に絞られる。

庵(1997)は、まずテキストを自己充足型テキストと非自己充足型テキストに分けた。前者は、「テキストの中で描かれている出来事が言語的文脈を参照しただけで第三者にも解釈可能になる種類のもの」であり、後者は「言語的文脈を参照しただけではテキスト内部の出来事が第三者には解釈可能にならずそれ以外の非言語的文脈を参照する必要があるもの」である。そして、両者の最大の違いは、「状況への依存度」にあるとした(p.15)。さらに、指示詞の対立にはア／ソが対立するものとコ／ソが対立するものがあり、前者は「知識管理」の原理に従う対立であり、後者は「結束性」の原理に従う対立であるとした。自己充足型テキストは、結束性の原理に従う対立であるためア系列指示詞は現れないとするのが、庵の説明である(庵(1997:ch.3))。

庵の、自己充足型テキストではア系列指示詞が現れないという指摘は、上述の議論からも正しいものであると思う。しかし、その理由として、自己充足型テキストと非自己充足型テキストとでは働く原理が異なるとした点には疑問が残る。形態にも発音にも差がないものを、二つの全く異なる原理で説明するには、それなりの根拠が必要であろう。しかし、庵はこのことについては触れていない。例えば「知識管理」の原理に従うソと「結束性」

の原理に従うソはどのような関係にあるのだろうか<sup>3</sup>。また、自己充足型テキストであるか非自己充足型テキストであるかは、状況に依存しているか否かであるということになる。であるとするなら、次の例文は状況に依存せず、第三者が読んでも解釈が可能であるので自己充足型テキストであるということになる。

(37) 昨日、山田さんという人に会いました。道に迷っていたので助けてあげました。

(久野(1973:186)を修正)

だとすると、(37)の中で指示詞を用いるとするとコかソだということになる。しかし、先行研究をはじめとして庵自身も、これは「知識管理」の原理に従う例であるとして、コが言えるかどうかを議論したものはない。いずれにせよ、庵(1997)のような、説明原理を複数用意するという方法は、問題が多いと考えられる。

しかし、彼が自己充足型テキストと非自己充足型テキストを区別する際に用いた、状況に依存するか否かという観点は卓見であった。そもそも「説明的・提示的な文脈」というのは、聞き手にことばだけを使って、出来事を解釈させなければならない。聞き手に話者との共通の経験がない場合、使用されるテキストは義務的に、状況に依存しない自己充足型テキストにならざるを得ないのである。このことを、本論のモデルで考えるために、「状況」を次のように定義しよう。

(38) 状況とは  $W_o$  のことであり、状況に依存するとは、 $W_o$  内の要素を用いることである。

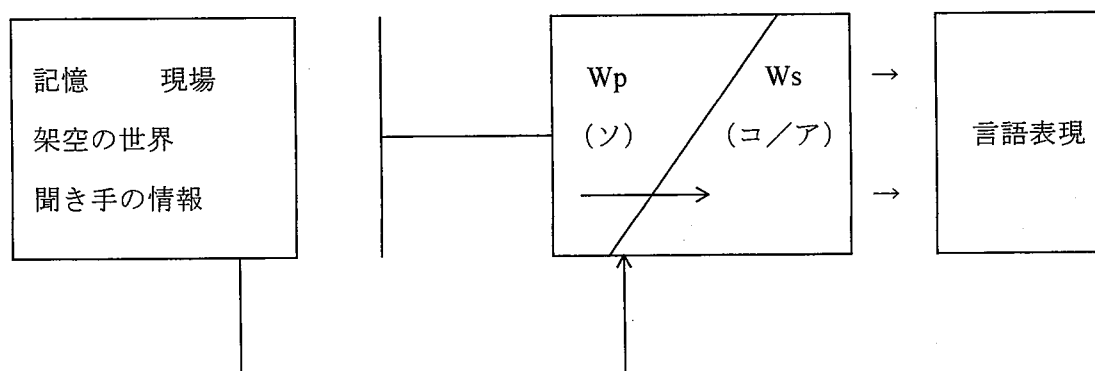
$W_o$  の要素を用いるためには、 $W_o$  と  $W_p/W_s$  の要素の間にリンクがなければならない。しかし、自己充足型テキストでは、状況に依存してはならないために、 $W_o$  の要素は使用できなくなっていると考えられる。つまり、庵(1997)の議論と、(38)の帰結として次のことがいえる。

---

\*3 金水・田窪(1992)にも、文脈指示と現場指示とを別々の原理で捉えようとすることに  
関して同様の記述が見られる(2.10 節で指摘した)。

(39) 自己充足型テキストにおいては、Wp/Ws から Wo へのリンクを作成するな。

(40) Wo



(40) は、文脈指示における本論でのモデルの状態を示している。要素は Wo から Wp/Ws へ登録されるものの、いったん登録された要素は Ws/Wp 内でだけ処理され、Wo の要素とはリンクがないためにそれは一切参照されることがない。状況に依存しない自己充足型テキストと庵(1997)が呼んだものは、実は Ws/Wp のみを使用して行われるテキストタイプであるのである。

さて、Wo 内の要素が用いられないということは、記憶内の要素も用いてはならないということである。したがってアの使用は文法的にキャンセルされる。Ws 内でアが使用できなくなり、もしこの状態で Ws 内の要素を用いれば必ずコが用いられる。自己充足型テキストにおいて、コ系列指示詞とソ系列指示詞が対立するという庵(1997)の指摘は、記述的には正しいものであるが、非自己充足型テキストとは別の原理をたてずとも、一つのモデルからこの現象についての説明を与えることは可能なのである。

## 8. 6 第八章のまとめ

本章では、金水(1999)のア系列指示詞の記述を、本論のモデルの中に取り込み説明することを試みた。前章まででは明らかではなかった Wo の内実について詳しく検討することによって、金水の記述を損ねることなく、理論の中での説明が可能であることを示した。また、「説明的・提示的な文脈」では義務的にアの使用がキャンセルされるという点に関しては、金水(1999)が聞き手の知識の考慮という観点から説明を与えたのに対し、本論ではこれらのデータが庵(1997)のいうところの自己充足型テキストであることを示し、この

ことから文法的にアの使用ができなくなるとする説明を提示した。本章により、本論のモデルが文脈指示の用法をうまく捉えるのみではなく、現場指示のア系列指示詞とコ系列指示詞の対立や、記憶指示のア系列指示詞の用法をも捉えることが可能であることが証明できたと思う。第七章の考察と合わせれば、このモデルは現場指示用法をも包括的に捉えることに成功しており、文脈指示、現場指示の両方に説明力を有する画期的なモデルであるということが言えよう。

データの整理が十分でないので本論では詳しく検討することはできないが、先行詞が従属節内に存在する場合には、ソが義務的に使用される場合があるようである。

(41) もし、ピアノを買ったら、\*これ／それで歌を作ろう。

(42) 二階にかばんが置いてあるから、\*これ／それを取ってきてくれ。

(43) 私はボールを拾い上げると、\*これ／それを少年に投げ返しました。

(41)のような仮定的な対象に対しては、未確定で、現実には存在しないものであるとして、コが使用できないと説明されてきたが（金水・田窪(1992, 1996)、第三章、第六章）、これを二文にして、架空の要素として表現すればコも可能になる。

(44) 仮にピアノを買ったとしましょう。そしたら私はこの／そのピアノであなたに美しい曲を作ってみせますよ。

したがって、この問題については、もう少し文文法的な観点からの考察が必要であると思われる。野田(1995)の「現場依存の視点」「文脈依存の視点」が、この問題のキーワードではないかと考えているが、いずれにせよ今後の課題である。



## 第二部のまとめ

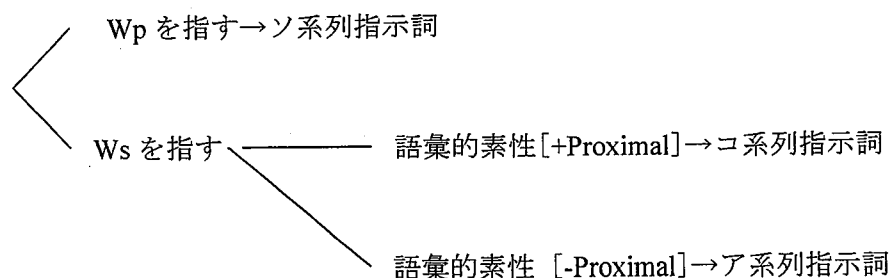
第二部では、第一部での記述的考察から得られた結論である、コは「話し手にとって指示的」であり、ソはいったん変項として解釈されるということをもとに、指示詞の用法を包括的に捉えることが可能になるようなモデルの構築を目指した。

第六章ではその出発点として、第一部でとりあげた文脈指示のデータをより詳しく観察することで、とりあえず文脈指示内のデータを扱うことができるモデルを提示した。このモデルの構築により、第一部では詳しく取りあげることができなかった代行指示や「予測裏切りの意味」を有するようなデータについても分析を施すことが可能になった。

第七章ではこのモデルを現場指示用法に拡張する方向で議論を進めた。ソ系列指示詞が文脈指示用法をその基本的意味として持ち、現場指示はその意味からの拡張であるとする金水(1999)、岡崎(2001)らの見解を踏襲すると、現場指示用法におけるソ系列指示詞は、語用論的な制約の要請により出現するものであるという仮説が得られる。この仮説が正しいものであると考えられることと、この議論により得られるさらなる利点についても議論を行った。

第八章では、ア系列指示詞に目を転じた。これまでの考察においてはコ系列指示詞とア系列指示詞は同列に扱われ、そのことはモデルの重要な欠陥であるとした上で、アは語彙的に[-Proximal]、コは語彙的に[+Proximal]の指定を持っていると考えた。さらに Wo を詳しく定義し直し、この中の要素が全て潜在的には直示的に指せることを見た。そのうえで、なぜ文脈指示用法においてはア系列指示詞が使用できないのかという問題について、理論の中で考察した。その結果、庵(1997)の自己充足型テキストとは Wo への Ws/Wp からのリンクがない状態のテキストタイプであり、そのことによってア系列指示詞の使用が文法的にできないということが明らかになった。

最後に、第二部で明らかにした、指示詞の意味を再掲してこの部を閉じよう。



## 第九章 本研究のまとめ

### 9. 1 はじめに

本論での主な議論は第八章までで終えた。この章ではまず、本論で明らかにしたことをまとめ、次に指示詞コソアの、それぞれの関係について筆者の考えを述べ、最後に今後の研究に向けて、本論が貢献できる可能性を探ってみたい。

### 9. 2 本論で明らかにしたこと

本論で明らかにしたことを以下に箇条書きにしてみよう。

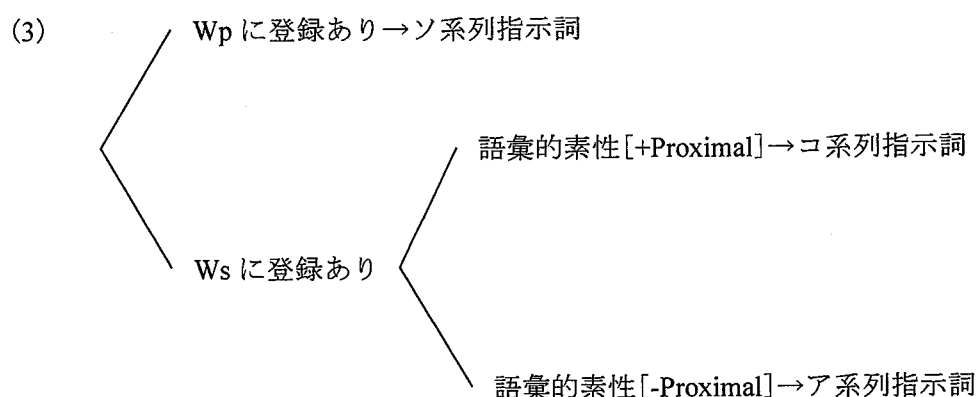
#### (1) 第一部

- a. 文脈指示用法におけるコ系列指示詞は「話し手にとって指示的」な名詞句を指し、ソ系列指示詞は意味解釈において変項として解釈される。(第三章)
- b. ソ系列指示詞が変項として解釈されるなら、先行詞と照応する名詞句との間で指示対象が異なることもあり得ることが予想されるが、そのような例は「打ち消し問答」文や「不完全同一性」の文である。ソ系列指示詞は変項として解釈されるために、変域を変えることができ、その結果指示対象を変えることも可能になる。変域は「テキスト的意味の量」を、全文脈より与えられた情報の範囲内で変えていくことによって得られる。(第四章)
- c. 指示詞をともなった名詞句ソノ N とソレの構造はそれぞれ $[_{NP}[_{DP} \text{ソノ}]N]$ 、 $[_{NP}[_{DP} \text{ソレ}]e]$ である。ソレは音形を持たない e をその主要部にとるために、前文全体と照応するような用法も存在する。(第四章)
- d. 指定指示と代行指示という区別は、便宜上のものであって、そのことが二種類の異なったソノの存在を主張するものではない。(第五章)
- e. 二種類に見えるのは、それらが付与される名詞句の意味的タイプによる。飽和名詞句の場合には指定指示、非飽和名詞句の場合には代行指示のように解釈される。(第五章)

(2) 第二部

- a. 指示詞が指す領域は、外的世界と言語表現をつなぐインターフェイスであるところの心的領域であり、指示詞が指すものはそこに登録された要素である。(第六章)
- b. 心的領域には Ws/Wp という世界が存在し、前者の要素をコ／アが、後者の要素をソが指す。(第六章)
- c. 名詞句が Ws/Wp に登録される方法には3パターンあり、その違いによって、文脈指示におけるコ／ソの使い分けが説明できる。(第六章)
- d. このモデルは、現場指示用法へも拡張が可能である。(第七章、第八章)
- e. ソ系列指示詞は文脈指示用法をその本質的意味として有しており、それが拡張されて、現場指示用法を有するようになった。(第七章)
- f. 現場指示用法におけるソ系列指示詞の用法は、語用論的制約により要請されたものである。(第七章)
- g. (2a)で「外的世界」と呼んでいるものは、Ws/Wp の外ではあるが、客観的世界ではなく、話者の中にある世界である。このような世界と Ws/Wp の対象とのリンクを考えることにより、文脈指示用法でア系列指示詞が使用されない理由が説明できる。(第八章)

最終的に本論が提示する指示詞コソアの意味とは、次のようなものである。



(1-3)で、本論 1.2 であげておいた問題に対して全て答えを与えることができたと思う。指示詞は心的領域の中に登録された要素を指し、それを指すことによって Wo の要素とリンクを形成している。また、現場指示用法と文脈指示用法は同じ理論によって扱うことが

可能である。

### 9. 3 指示詞のそれぞれの関係

次に、コソアはどのような関係を持っているかという問いについては少し述べなければならぬ。(3)を見れば、コソアはコ／ア vs. ソの構図をなしている。しかし、文法システムの中で指示詞が(3)のように対立をなしているということと、実際の使用において三者がこのような対立をなすということは別に考えなければならないと思う。本論の中で見てきたように、確かに、大体のデータにおいてはこのような図式が反映され、三者が全て使用可能である状況は発見しづらい。しかし、堀口(1978)も述べているように、場合によっては三者全てが用いられる状況も存在するのであり、そのことはこのモデルが禁止するものではない。

(4)a. 僕の友達に平岩君というのがいるんだけど、そいつ／こいつ／あいつは、君にびつたりだよ。

b. こないだ旅行に行きました。その／この／あの旅行はよかったよ。

このような観点からすれば、コソアは二項対立が二重に重なったものであるとする捉え方(三上(1970)や田窪・金水(1996)に代表されるような)も、堀口(1978)のコソアは三者が並立に存在する関係であるとする説も、どちらも指示詞のある側面を捉えていて、その側面においては正しい記述であると考えられるのである。

### 9. 4 今後の研究に向けて

もちろん、本論によって指示詞の全てが解明できたわけではない。以下に、今後の研究の問題点となるものをあげてみよう。なお、本節で述べることは全て筆者のアイデアの域を出ておらず、したがって何かの主張を行っているものではないことを断っておく。

(5)a. 中距離のソ系列指示詞について

b. 総称名詞につく指示詞について

c. 指示詞から派生したと考えられる接続詞について

d. ソノ／ソレ系列以外の指示詞(ソナ／ソウイウなど)について

- e.第二言語習得の観点から
- f.他の外国語あるいは方言との対照研究
- g.本モデルの別の文法現象への応用の可能性

筆者がざっと思いつくものをあげるだけでも、これだけの問題が残されており、そしてそのどれもが非常に興味深い。(5a)については第七章でも触れたとおり、本論のモデルで分析できる可能性は大いにあると思われるものの、それを証明するだけの十分なデータとアイデアを筆者は現段階で持ち合わせていない。また、指示詞と総称名詞についての考察は是非行わなければならない問題である。6.4.1 節の注7において挙げたデータや、「予測裏切りの意味」を表すデータなどを観察すると、総称名詞と固有名詞との類似性が見えてくる。このことは一つの重要なテーマとして、指示詞の研究と連動させながら行っていくべきであろうと考えている(総称名詞については Carlson and Pelletier (1995) が詳しい。また、(6a) のような文に関しては坂原(1996)がある)。

(6) a. 私は紅茶が好きだ。 この / \*その 飲み物はいつも疲れを癒してくれる。

b. くじらはとてもおとなしい動物です。 その / \*この くじらが人を襲ったなんて信じられません。

(5c) の接続詞についても考えなければならない問題である。指示詞から派生したと考えられる接続詞には次のようなものがある(浜田(1995)、庵(1996a)も参照のこと)。

(7) ソレガ、ソレヲ、ソレナノニ、ソレドコロカ、ソレカラ、ソレトモ・・・・

このようなソレは、漠然と状況を指しているという分析がなされることが多いが、もしそうであるとするならば、どのような経過を経て、指示代名詞ソレが状況を指すようになったのかについて考える必要がある。

(5d) についても、本論では考察を行わなかった。Hoji (1995, 1998)、Ueyama (1998) などが生成文法の立場からソコについて論じており、また、岡部(1995)はコンナとコウイウについて考察している。このようなデータは必ずしもまだ蓄積されているとは言えず、これから解決していかななくてはならない問題が山積していると考えられる。

(5e)は言語学のみならず、日本語教育の分野にも応用できる可能性を秘めたものである。筆者自身、日本語教育に携わり、多くの学習者の指示詞に関する誤用に生に接しているが、やはり指示詞の誤用は「は／が」「のだ」などの誤用に匹敵するほどに多い。迫田(1998)の膨大かつ優れた研究があるが、本論ではこの研究について触れることはなかった。本論でのモデルを第二言語習得に援用し、迫田の考察などと比較検討してみることで得られる知見は多く、また教育への貢献も期待できよう(迫田(1998)を用いながら第二言語習得を論じたものとして野田他(2001)がある)。

また、外国語や方言との比較対照も重要な分野である。第七章においては、英語などの二項対立のメカニズムをもつ言語を、本論のモデルで分析する可能性を示したが、これはこれから本格的に進められていかなければならない問題であろう。内間(1986)の琉球方言の研究、名嘉真(1987)の宮古方言の研究などが参考となろう。

最後に他の文法現象に、本論のモデルが応用できるなら、このモデルの有効性をさらに強固なものとしてくれることになる。その一つとしてモダリティの研究への応用可能性があると思われる。このような研究は田窪・金水(1996)ですでに「よ・ね・よね」についての考察が提示されているが、例えばダロウ／カモシレナイの違いを分析するのに有効である可能性がある。

宮崎(1997)では、ダロウは判断がすでに成立していると考え、そのことの反映として、Pダロウは $\sim P$ ダロウで否定することはできないとした。一方、カモシレナイでは判断はまだ成立しておらず、したがって $\sim P$ カモシレナイはPカモシレナイを否定することができる。

(8)\*明日は雨が降るだろうし、降らないだろう。

(9)明日は雨が降るかもしれないし、降らないかもしれない。

仮に命題Pを捉える話者のやり方に、「断定的／非断定的」の別を立てるとして、それが本論のモデルにおけるWs/Wpにそれぞれ対応するとすると、ダロウはWsの、カモシレナイはWpに登録された命題に付与される形式であると分析することができるかもしれない。

本論第七章で紹介した益岡(1997)の私的領域に関する議論も、たとえば「(聞き手が)水が飲みたいこと」という命題をWpから発話すると考えるなら、もはやこのモデルは名

詞の指示に関するモデルを超え、命題の指示性のようなものを捉える試みに拡張していくことになろう。非常に興味深いものであり、今後のさらなる研究が待たれる。

以上のように、本論が今後の研究に向けて貢献しうる分野は非常に多岐にわたり、しかも言語あるいは日本語の研究の中でも非常に重要な位置を占めるものばかりである。本研究が、これらの今後の研究に向けて、何らかの知見をもたらすことができれば、これに勝る喜びはない。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたっては、大変多くの方々の助け、アドバイスを受けた。ここに記して感謝する次第である。もちろん、本論文の内容は全て筆者の責任である。

主指導教官である三原健一先生には、1996年に筆者が修士課程に入学してから実に7年間お世話になっている。学部を、ポルトガル語を専攻して卒業した筆者の指導教官になってくださり、出来が悪い上に様々な我が儘三昧を並べ立てた筆者を懇切丁寧に指導してくださった。本論の内容は、先生のご専門からは結果的に随分かけ離れたものになってしまったかもしれないが、先生の言語に対する見方や研究への姿勢は、筆者に多大な影響を与え、本論もそれに少しでも近づくことができればと願いながら執筆したつもりである。また、修士課程の一年目が終わり、退学しようかと悩んでいた筆者を叱咤激励してくださったのも三原先生であった。あの時がなければ本論文はおろか、現在の筆者は存在しえなかった。生活面においても様々な、時に厳しいアドバイスをいただいた。先生にはいくら感謝しても感謝しきれない思いである。

副指導教官である杉本孝司先生と田野村忠温先生には、筆者が博士課程後期に在籍してから本格的にお世話になった。杉本先生からは、認知意味論的な分析を授業で教わりながら、個人的には形式意味論的な論理表記などをご教示いただいた。副学長という、想像を絶する忙しさの中、貴重なお時間を割いていただいた。いつも図々しくお送りしていた質問のメールに対して非常に丁寧な解説をしてくださったのが印象深い。本論文の内容は意味論的な部分が多いが、先生との議論の中で出てきたものも少なくない。

また、田野村先生からは研究の基本姿勢や論文執筆の基本的な考え方を教わった。本論文の中のデータにも、先生と筆者の判断が異なったものがいくつかあり、データを緻密にかつ慎重に検討し、収集する重要性を教えていただいた。

また、本学日本語講座の先生方には、公私にわたり様々なアドバイスをいただいたり、相談にのっていただいたりした。ここに記して感謝する次第である。

筆者は、現在岡山大学文学部の専任講師である。1999年に博士課程を中途退学しこの職をいただいたのであるが、筆者の、社会人として博士課程に再入学し勉強を続けたいとの願いを聞き入れてくださり再入学を快諾してくださったのは、当時の岡山大学文学部長であった稲田孝司先生であった。稲田先生と岡山大学文学部（現学部長は高橋文博先生で



ある)には、筆者が在学中色々にご面倒、ご迷惑をおかけしたことと思う。記して感謝する。

博士課程の友人である池谷知子氏、睦宗均氏、森篤嗣氏、川嶌信恵氏、修士課程以来の友人である石橋玲央氏、後藤寛樹氏、長谷川哲子氏、松田真希子氏、同級生であり、また人生の先輩でもある中井精一氏、岡山大学文学部の宮崎和人先生、中東靖恵先生をはじめとする諸先生方および同学部言語文化学科の学生諸君には、機会あるごとに筆者との議論やネイティブチェックにつき合っていただいた。また、実践女子大学の山内博之先生にも公私ともにお世話になっている。ここにお礼を申し上げる。また、本論文の中で例文として掲載することを認めて下さったノフィタ・ワティ氏と美濃部恭子氏にも感謝する。

最後に、就職もせずに大学院進学することを許し、金銭的、精神的援助を送り続けてきてくれた両親と、筆者の弟の家族に心からの謝辞を述べ、本論文を捧げる。

## 参考文献表

- 阿部泰明(1998)「意味論の基礎」『岩波講座 言語の科学 4 意味』第一章、岩波書店。
- Abney, Steve(1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*. Ph.D. dissertation, MIT.
- 天野みどり(1993)「文脈照応「その」の名詞句解釈に果たす役割」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』764-753, 三省堂。
- Carlson, Gregory N.(1977/1980) *Reference to Kinds in English*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst. (Available from Garland Publishing Co., New York, 1980).
- Carlson, Gregory N. and Francis Jeffry Pelletier(eds.) (1995) *The Generic Book*. The University of Chicago Press.
- Chierchia, Gennaro(1993) "Questions with Quantifiers." *Natural Language Semantics* 1:181-234, Kluwer.
- Clark, Herbert H. and Catherine R. Marshall(1981) "Definite Reference and Mutual Knowledge." In A.Joshi, B.L. Webber and I.A. Sag(eds.), *Linguistics Structure and Discourse Setting*, 10-63, Cambridge Univ. Press.
- Diesing, Molly(1992) *Indefinites*. MIT Press.
- Donnellan, Keith S.(1971) "Reference and Definite Descriptions." In Steinberg, Danny D. and Leon A. Jakobovits(eds.), *Semantics*, 100-114, Cambridge Univ. Press.
- Donnellan, Keith S.(1972) "Proper Names and Identifying Descriptions." In Davidson, Donald and Gilbert Harman(eds.), *Semantics of Natural Language*, 356-379, Reidel.
- Donnellan, Keith S.(1978) "Speaker Reference, Descriptions and Anaphora." In Cole, Peter(ed.), *Syntax and Semantics* 9:47-68, Academic Press.
- Evans, Gareth(1980) "Pronouns." *Linguistic Inquiry* 11-2:337-362.
- Fauconnier, Gilles(1985) *Mental Spaces*. MIT Press.
- Fauconnier, Gilles(1997) *Mappings in Thought and Language*. Cambridge University Press.
- Fukui, Naoki(1995) *Theory of Projection in Syntax*. CSLI Publications and Kuroshio Publishers.
- 浜田麻里(1995)「ソシテとソレデとソレカラ —添加の接続詞—」宮島・仁田(編)所収, 575-583.

- 春木仁孝(1991)「指示対象の性格からみた日本語の指示詞　ーアノを中心にー」『言語文化研究』17:93-113, 大阪大学.
- 林 四郎(1972)「指示代名詞『この』『その』の働きとその前後関係」『電子計算機による国語研究IV』110-131, 国立国語研究所.
- 林 四郎(1983)「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語講座五 運用 I』1-45, 朝倉書店.
- 服部四郎(1968)「コレ・ソレ・アレと this, that」『英語基礎語彙の研究』71-79, 三省堂.
- Heim, Irene(1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts.
- Hoji, Hajime(1995) "Demonstrative Binding and Principle B." *NELS* 25:255-271.
- Hoji, Hajime(1998) "Formal Dependency, Organization of Grammar, and Japanese Demonstratives." In Akatsuka, Noriko, Hajime Hoji et al. (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 7:649-677, CSLI.
- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, Ayumi Ueyama(2000) "On the "Demonstratives" in Japanese." Seminar on Demonstratives, held at ATR (Advanced Telecommunications Research Institute International), Kyoto, November 29.
- 堀口和吉(1978)「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8, 大阪外国語大学〔金水・田窪(編) (1992)に再録, 74-90.].
- 堀口和吉(1990)「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』9-3:59-70, 明治書院.
- 井手 至(1959)「代名詞」『続日本文法講座1 文法各論編』明治書院.
- 井手 至(1960)「所謂遠称の指示詞ヲチ・ヲトの性格」『国語と国文学』37-8, 東京大学国語国文学会.
- 庵 功雄(1995a)「語彙的意味に基づく結束性について」『現代日本語研究』第2号:85-102, 大阪大学現代日本語学講座.
- 庵 功雄(1995b)「コノとソノ」宮島・仁田(編)所収, 619-631.
- 庵 功雄(1995c)「テキスト的意味の付与について」『日本学報』第14号:79-93, 大阪大学文学部日本学研究室.
- 庵 功雄(1995d)「ソノNとソレ」宮島・仁田(編)所収, 632-637.
- 庵 功雄(1996a)「「それが」とテキストの構造ー接続詞と指示詞の関係に関する一考察ー」『阪大日本語研究』第8号:29-44, 大阪大学文学部日本語学講座.

- 庵 功雄(1996b)「指示と代用」『現代日本語研究』第3号:73-91, 大阪大学現代日本語学講座.
- 庵 功雄(1997)「日本語のテキストの結束性の研究」平成9年度大阪大学博士学位取得論文(文学)(未公刊).
- 庵 功雄(2002)「『この』と『その』の文脈指示用法再考」『一橋大学留学生センター紀要』第5号:5-16, 一橋大学留学生センター.
- Kamp, Hans(1981)"A Theory of Truth and Discourse Representation." In: Groenendijk, T. Jansen and M. Stokhof(eds.), *Formal Methods in the Study of Language*, 277-322, Amsterdam:Mathematical Centre.
- 木村英樹(1992)「中国語指示詞の「遠近」の対立について — 「コソア」との対照を兼ねて」大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集』181-211,くろしお出版.
- 金水 敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4:67-91.
- 金水 敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3:85-115, 日本認知科学会.
- 金水 敏・田窪行則(1992)「日本語指示詞研究史から／へ」金水・田窪(編)(1992)所収, 151-192.
- 金水 敏・田窪行則(編)(1992)『指示詞』ひつじ書房.
- 国立国語研究所(編)(1981)『日本語の指示詞』日本語教育指導参考書8、国立国語研究所.
- 近藤泰弘(1990)「構文的に見た指示詞の指示対象」『日本語学』9-3:31-38, 明治書院.
- 近藤泰弘(1992)「レ系指示詞の意味論的性格」文化言語学編集委員会(編)『文化言語学その提言と建設』365-375, 三省堂.
- 近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
- Kripke, Saul A.(1972)"Naming and Necessity." In Davidson, Donald. and Gilbert Harman(eds.), *Semantics of Natural Language*, 253-355, Reidel.
- 久野 暉(1973)『日本文法研究』大修館書店.
- Kuno, Susumu(1973)*The Structure of the Japanese Language*. MIT press.

- 黒田成幸(1979)「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集 英語と日本語と』41-60,くろしお出版.
- 益岡隆志(1997)「表現の主観性」田窪行則(編)『視点と言語行動』1-11,くろしお出版.
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』中文館書店.
- 三原健一(1994)『日本語の統語構造』松柏社.
- 三上 章(1955)『現代語法新説』刀江書院[1972年にくろしお出版より復刊].
- 三上 章(1970)『文法小論集』くろしお出版.
- 三藤 博(1999)「談話の意味表示」『岩波講座 言語の科学7 談話と文脈』第二章、岩波書店.
- 宮崎和人(1997)「判断のモダリティの体系と疑問化」『岡山大学文学部紀要』27号:125-141,岡山大学文学部.
- 宮島達夫・仁田義雄(編)(1995)『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版.
- 名嘉真三成(1987)「宮古方言の代名詞」『国文学 解釈と鑑賞』52-2:155-160.
- Neale, Stephen(1990)*Descriptions*. MIT Press.
- 西山佑司(1988)「指示的名詞句と非指示的名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第20号:113-134.
- 西山佑司(1990)「「カキ料理は広島が本場だ」構文についてー飽和名詞句と非飽和名詞句ー」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第22号:169-188.
- 仁田義雄・益岡隆志(編)(1989)『日本語のモダリティ』くろしお出版.
- 野田尚史(1995)「現場依存の視点と文脈依存の視点」仁田義雄(編)『複文の研究(下)』327-351,くろしお出版.
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子(2001)『日本語学習者の文法習得』大修館書店.
- 岡部 寛(1995)「コンナとコウイウ類ーものの属性を表す指示詞ー」宮島・仁田(編)所収, 638-644.
- 岡崎友子(2001)「指示副詞の史的変遷について」『國文學』13-2:119-122, 學燈社.
- 岡崎友子(2002)「指示副詞の歴史的変化についてーサ系列・ソ系を中心にー」『国語学』53-3:1-17.
- 大野 晋(1978)『日本語の文法を考える』岩波新書.

- Postal, Paul (1966) "On so-called Pronouns in English." In Reidel, David and Sanford Schane (eds.), *Modern Studies in English*, 201-223, Englewood Cliffs.
- Reinhart, Tanya (1983) *Anaphora and Semantic Interpretation*. The University of Chicago Press.
- Reinhart, Tanya (1998) "Wh-in-situ in the Framework of the Minimalist Program." *Natural Language Semantics* 6:29-56, Kluwer.
- 坂原 茂 (1989) 「メンタル・スペース理論概説」 仁田・益岡 (編) 所収, 235-246.
- 坂原 茂 (1991) 「フランス語と日本語の限定表現の対応」『対照研究 指示語について』51-92, 筑波大学つくば言語文化フォーラム.
- 坂原 茂 (1996) 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知科学』3-3:38-58, 日本認知科学会.
- 阪田雪子 (1971) 「指示詞『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外国語大学論集』21:125-138, 東京外国語大学.
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究 日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』溪水社.
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法 (改訂版)』厚生閣 [補正版としてくろしお出版より復刊(1983)].
- 佐久間まゆみ (2002) 「接続詞・指示詞と文連鎖」 仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語の文法 4 複文と談話』第三章、岩波書店.
- 正保 勇 (1981) 『『コソア』の体系』 国立国語研究所 (編) 所収, 51-122.
- 高橋太郎 (1956) 「「場面」と「場」」『国語国文』25-9:53-61, 京都大学文学部国語国文学研究室.
- 高橋太郎 (1990) 「指示語の性格」『日本語学』9-3:4-21, 明治書院.
- 高橋太郎・鈴木美都代 (1982) 「コ・ソ・アの指示領域について」『研究報告集』3:1-44, 国立国語研究所 (国立国語研究所報告集 71).
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」 仁田義雄・益岡隆志 (編) 所収, 211-233.
- 田窪行則 (2002) 「談話における名詞の使用」 仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語の文法 4 複文と談話』第四章、岩波書店.
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3:59-73, 日本認知科学会.
- Takubo, Yukinori and Satoshi Kinsui (1997) "Discourse Management in terms of Mental Spaces." *Journal of Pragmatics* 28:741-758, Elsevier Science.

- 田窪行則・金水敏(2000)「複数の心的領域による談話管理」坂原茂(編)『認知言語学の発展』, 251-280, ひつじ書房.
- 田中 望(1981)「「コソア」をめぐる諸問題」国立国語研究所(編)所収, 1-50.
- 東郷雄二(1999)「談話モデルと指示」『総合人間学部紀要』6:35-46, 京都大学.
- 東郷雄二(2000)「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『総合人間学部紀要』7:27-46, 京都大学.
- 堤 良一(1998a)「文脈指示における「その／この」の言い換えについて一名詞が導入する変項に注目した一分析」『日本語・日本文化研究』8:43-56, 大阪外国語大学日本語講座.
- 堤 良一(1998b)「日本語のソ系指示詞」平成9年度大阪外国語大学修士論文(外国語学研究科日本語学)(未刊行).
- 堤 良一(1999)「ソノ N とソレ～統語論的な解決を試みた一研究～」『STUDIUM』27:1-16, 大阪外国語大学院研究室.
- 堤 良一(2001)「文脈指示における「ソノ」「ソレ」～「テキスト的意味」の量からみた一考察～」KLS 21:216-225, 関西言語学会.
- 堤 良一(2002a)「文脈指示における指示詞の使い分けについて」『言語研究』第122号: 45-78, 日本言語学会.
- 堤 良一(2002b)「現場指示のソ系列指示詞について」日本語文法学会第3回大会(於同志社女子大学)における口頭発表(02.12.7-8)、『日本語文法学会第3回大会発表論文集』77-86, 日本語文法学会.
- 堤 良一(2002c/印刷中)「指示詞モデルからみたア系列指示詞 ～モデルによる指示詞の包括的説明にむけて～」『岡山大学文学部紀要』第38号、岡山大学文学部.
- 堤 良一(2002d/印刷中)「指定指示と代行指示」中井精一・後藤寛樹(編)『応用日本語研究』創刊号、応用日本語研究会.
- 内間直仁(1987)「古代語と琉球方言の名詞・代名詞」『国文学 解釈と鑑賞』52-2:134-138.
- Ueyama, Ayumi(1998) *Two Types of Dependency*. Ph.D. dissertation, University of Southern California.
- 上山あゆみ(2000)「日本語から見える「文法」の姿」『日本語学』19-4:169-183, 明治書院.
- Yoshimoto, Kei(1986) "On Demonstratives KO/SO/A in Japanese." 『言語研究』90:48-72, 日本言語学会.

## **本論で引用した文献**

新井素子「解説」（星新一『未来いそっぷ』の解説）新潮文庫 1982 年

井伏鱒二『黒い雨』新潮文庫 1970 年

星 新一「新しがりや」『未来いそっぷ』新潮文庫 1982 年

さくらももこ『あのことろ』集英社 1996 年



平成14年度博士論文

堤良一「日本語の指示詞の研究」

正誤表

頁、行	誤	正
contents 1	第三章 文脈指示における <u>コ</u> <u>系指示</u> と <u>ソ系指示詞</u>	第三章 文脈指示における <u>コ系列</u> <u>指示詞</u> と <u>ソ系列指示詞</u>
p.74 1.13	(42)・・・19世紀最大 <u>の</u> <u>の</u>	(42)・・・19世紀最大 <u>の</u>
p.75 1.5	<u>5.3.4節</u> において・・・	<u>5.3.3節</u> において・・・
p.101 *10 1.3	<u>7.3.3節</u> で行う。	<u>7.3.4節</u> で行う。
p.129 1.18-9	<u>彼らの理論については、本章</u> <u>の付録として紹介したので参</u> <u>照されたいが、その主張は・</u> ・	・・・(削除)・・・ <u>彼らの主張は・</u> ・